
シルバー・エッジ

戸川勝豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルバー・エッジ

【Nコード】

N6934L

【作者名】

戸川勝豊

【あらすじ】

突然失踪した姉の行方を追うため、探偵事務所を訪れた島原幸人^{しまばらゆきと}。それが全ての始まりだった。現代に生きる吸血鬼ハンターを描いたアクション長編。

プロローグ（前書き）

アスキー・メディアワークス主催の電撃ゲーム三大賞（現：電撃大賞）の第9回（2002年度）の応募作品、二次選考通過作品です。

プロローグ

闇が、その空間を占めていた。

その空間を一条の光が縦に割って入った。

光は筋から縦長の長方形に面積を広げると同時に、その空間　窓
一つ無い部屋　のコンクリート剥き出しの床面に光のヴァージン
ロードを作り出した。

部屋の一番奥、ドアから差し込むその光が途切れた所に、ハイヒールを履いた足元だけが映った。

光の中に人影が入り込んだ。

背格好からして男だろうか、戸口から伸びる影が部屋の奥の足元に届いた。

それを椅子に座った主は無言で見つめていた。少なくとも男にはそう見えた。

「……こんなところにいやがったのか」

男の億劫そうな言葉にも、暗闇に足元以外溶け込んだ女は無言で返した。

「どういつつもりだ？　いくら逃げても無駄なことがわからんほど馬鹿じゃあるまい」

男がゆつくりと歩み寄り、女から半歩の所で止まった。

だが、女は俯いたまま無言を通した。

「戻って来い。あの方がお待ちだ」

返答は無かった。代わりに、顔を上げずに右手に握ったものを突き出した。

「気でも狂ったか？　こんなものが何の役にたつ？」

女の手握られていたもの　リボルバーの拳銃が自分の腹部に突きつけられているにも関わらず、男に動じた様子は無かった。

女の口元が僅かに動いた。

オモチャのように引き金を引いた。

「!？」

乾いた音と共に男がのけぞった。体を弓なりに反らし堪えようとしたところに、再度銃声が響き、男は背中を床にまともに打ちつけた。
「き……さま」

置きあがろうとする男に、女が馬乗りになった。

「くっ……まさか……こ、れは……」

腹部を撃たれた人間ならば誰もが感じる、ほて火照ったような苦痛しかし、それ以上のものを男は感じていた。

「裏切る気か……俺が良くても、上が黙っちゃいないぜ……特にお前の恩人であるあの方がな」

額に脂汗をかきながら上半身を起こそうとした。

その左胸に銃口が押し当てられた。

「ひひっ、お前を苦痛から解放してくださいださったあの方に歯向かうとはな。地獄に落ちろ、とはこのことだ……ぐっ!？」

続けて三発の銃声。

「ぐ……ふう……」

男は荒い息を続けていた。女は撃つ瞬間、銃口を左胸から右胸にずらしていた。

銃口をまた左胸に押し当てた。すでに虫の息の男には、その動きを目で追うことしかできなかった。

女の口がまた歪んだ。無言だけにそこに込められた殺戮への喜悦は計り知れなかった。

銃声が部屋を埋めた。

「……」

硝煙が漂う暗闇で、女は懷から何かを取り出した。

暗闇にグリーンのバックライトが点った。携帯電話だ。

馬乗りの格好のまま、女は憑かれたように画面を眺めていた。

女が携帯を操作したのは、その十分後だった。

第一章 消えた姉 - 1

異常に暑い日だった。

八月上旬、小中高生も夏休み真っ盛りとは言え、この暑さは季節のせいだけではなさそうだった。

アスファルトの輻射熱、エアコンの排熱、二酸化炭素増加による地球温暖化現象

思いつく限りの暑さの原因で自分を納得させようとした彼 島原

幸人 は余計に暑くなるだけだと、その考えを払拭するかのよう
に頭を振った。

「……う」

が、それは余計に頭の温度を上げるだけであつた。

「確か、このあたりで良いはずだよな」

そうつぶやいて汗でずれた眼鏡を元の位置に戻し、手にしたヨレヨレのメモと周りの状況を確認した。

駅から歩いて五分、商店街を抜けたあたりに三・四階建ての雑居ビルが立ち並んでいた。

普段ならさほど高くも感じないが、この暑さと妙に密集した雑居ビルの壁が、自分を押しつぶそうとしているのではないかという錯覚に襲われた。

暑さを紛らわそうと汗でへばりついたＴシャツの胸元をばたつかせたが、蒸した空気が入り込むばかりだった。

まだ十代後半の若い体にもこの暑さは堪えたのだろうか。ほとんど空に近いデイバッグも重く感じる。事実、彼より元気なはずの子供達の姿さえ外には見えない。大人と一緒に中で涼んでいるのだろうか。もつとも、それが最近では当たり前かも知れないが。

休憩の場を求めてさまよう彼の目が、赤い直方体の側面を捉えた。
自動販売機だ。

薄汚れた雑居ビルの側面、ちょうど影に入った個所で自動販売機は

エアコンプレッサーの唸り声を上げていた。

重い足取りで道路の対岸のそこまでたどり着き、歩きながら取り出していたコイン三枚を自販機に投入した。

缶が取出し口に当たる音はしなかった。待ちきれなかった幸人が先に手をつっ込んでいたからだ。

炭酸で息が詰まりそうになるのもかまわず、幸人は七秒で缶を空にした。

「……ふうう……生きかえ？」

『る』という最後の一言と共に缶を口から離れた幸人の視線が止まった。

自販機の横、雑居ビルを上がる階段の側面。

幸人は慌ててメモを広げた。

「ここか……」

黒崎探偵事務所（3階）

黒地に白い文字で書かれた表札がそこにあった。

第一章 消えた姉 - 2

汗は急速に引いていった。

それが日陰とコンクリート壁の閉鎖空間のためだと幸人は思っていた。

最初は。

が、狭い階段を3階まで上がりきった時には、それ以外の原因があるのではないかと感じていた。

黒崎探偵事務所

明朝体で書かれたプレートが、目の前の扉に貼ってあった。間違い無い、ここだ。

そして、一番冷気を感じるのもここからだ。

温度ではなく、何か別の感覚が皮膚に伝わってきた。

決まっていやな感じではないが、何か異質なものの。

(……昼から出ないよな)

何となしに数日前にテレビで見た心霊特集が頭に浮かんだ。

「まさかね」

そう言い聞かせるように呟いてから、幸人は脇のインターホンに手を伸ばした。

ドアの奥でチャイムが鳴る音が聞こえた。

「……」

十秒ほど待ったが、反応が無い。

もう一度手を伸ばしかけた時、ドアが音も無く開いた。

その唐突さに半歩退いた。

「え?……いない?」

誰もいなかった。半分開いたドアの向こうにすりガラスのついたて衝立が見えた。が、それだけだった。

またあの心霊特集が頭に浮かんで、幸人はさらに半歩退いた。

「……ここよ」

「ひっ!？」

下のほうから上がってきた声に、跳び上がりそうになりながら視線を向けた。

そこには 少女が立っていた。

自分から半歩と離れていないところで、少女が彼を見上げていた。身長一八〇近くの彼の胸より下のところに、少女の頭があった長い黒髪の。

黒髪は、持ち主の腰辺りに達し、ほんの少し天然パーマがかかっているのか、先に行くほどわずかにウェーヴを描いていた。その黒髪に埋もれるように何か細かい細工を施した銀色のカチューシャ。

よほどの色白なのだろうか、透き通るような白い肌と、それと対照的な深く黒い瞳。高くは無いが形の良い鼻と薄い唇、すつと通った眉。

絵に描いたような美少女 幸人にはそれしか表現が浮かばなかった。

身長からすればまだ小学校中学年ぐらいだろう。が、かわいい、というよりは美しい、という雰囲気が目の中の少女にはあった。

この暑いのに、膨らみを持たせた紺色のワンピースにフリルのついた前掛け。見ているこっちが暑くなる格好 のはずが、幸人にはその反対の感覚しかなかった。

ドアを開けてから、先ほどまで感じていた冷気が増したのを感じたからだ。冷房かとも考えたが、ここに温度計があったとしても外との差はほとんど無いだろう。それだけはわかった。

まさか、幽霊

しかし、おろした視線の先には二本の足がついていた。途中、右手に何かフリルのついた白い布のようなものを手にしていたのが気になったが。

そういえば、この格好、どこかで見たことあるような

「……あまり感心しないわね」
「え？」

視線がまた戻った。

「そうじろじろ見るものじゃないわよ」

「あ、す、すみません」

端から見れば滑稽だっただろう。大学生の青年が小学生の女の子に敬語で謝っているのだから。

だが目の前の少女の言葉使いはどことなく大人びていた。いや、大人そのものであり　そして有無を言わぬ冷たさがあった。

「用が無いなら閉めるけど」

素っ気無く放たれた言葉と同時に、ドアが閉まりかけた。

「あ、待って」

慌てて閉まりかけたドアを手で押さえる幸人。

その彼に向けられた少女の視線は　やはり素っ気無かった。

「ここ、探偵事務所だろ」

「表札が見えない？」

「だったら、依頼したいことがあるんだけど……」

少女の言葉を肯定と捉えた幸人だったが、そこで言葉が詰まった。何で探偵事務所に子供がいる？

どうみても彼女は探偵には見えなかった。どこかのマンガではあるまいし。

「英治、クライアントよ」

幸人の疑問に答えるかのように、少女は奥に向かって声をかけた。

「……あ？　沙羅？　何だって？」

ついたて衝立の向こうから聞こえた男　英治　の声は、明らかに寝ぼけていた。

「クライアント」

沙羅と呼ばれた少女が奥に視線を向けて答える。

「クライアント？　じゃ、罰ゲームの見せしめにやちょうどいい。ちゃんとあのカッコしてるだろうな？」

「……ええ」

無表情の中にもどこかいらだたしげに、沙羅は手にしていたものを頭に被せた。

「あ……」

幸人はようやく気がついた。どこかで見た格好だと思ったら、マンガやアニメで出てくる『メイドさん』の衣裳だったのだ。

しかし、罰ゲームっていったい？ という幸人の疑問とは関係なしに少女と目に見えない相手との会話は続いた。

「それより、どうするの？ クライアントが待っているわよ」

「パスパス、俺は忙しいの。新規の仕事はしばらく無し」

どう聞いても忙しくなさそうだ。単に面倒くさい、それしか口調からは伝わってこなかった。

「お願いします。最初に頼んだところからここを紹介されたんです」
幸人は見えない相手に訴えた。

「だったら余計やだね。そんな余りもの、俺によこすなっつーの」
「で、でも……」

「いいじゃん、他あたれば。ここに来たみたいに」

二人のやり取りを見守っていた沙羅が、幸人に向き直った。

「お兄さん、ちょっと……」

沙羅が人差し指で幸人を招き寄せた。そんな仕草、普通の子供がやれば生意気なだけだが、目の前の少女だけは別だった。

「何？」

少女に視線を合わそうと少し前屈みになった瞬間、幸人の視界がぼやけた。

「あっ……？」

眼鏡が外れた、と思った彼の眼前で、沙羅がその眼鏡を手に振っていた。

取られた瞬間が彼には全くわからなかった。

「ねえ、お兄さん、誰かに似ているって言われたこと無い？」

「え？」

返せ、というよりも先に投げかけられた質問に、眼鏡に伸ばした手を止めた。

「例えば、芸能人とか」

「え……と……」

ためらいながらも、幸人はたまに友達に言われる『似ている芸能人』の名前をあげた。某ユニットのボーカル。線の細い感じが似ていると前に言われたな、と思い返しながらがたん。

衝立の向こうで物音がした。

「あら、言われてみればそうね」

「そ、そうかな……」

いくら過去にいわれたことがあっても、自分から似ている芸能人の名前を挙げるなんて恥ずかしい。特に、ルックスが良ければ。

「そうね、英治のオリジナル美少年カテゴリの……B、ランクは2といったところかしらね」

「へ？……えっ！？」

最初の『へ？』は、沙羅がじらすようにいった意味不明の言葉に対して。

その次の『えっ！？』は、目の前に風のように現れたものに対して。

「ようこそ。俺の名前は黒崎英治、ここの探偵だ」

「は、はあ……」

幸人はそれしか言えなかった。奥にいた声の主が、瞬間移動でもしたかのように目の前にいて、彼の肩に手を置いていたものだから仕方がない。時間にして約〇・五秒。

彼 黒崎英治 はさっきとはうって変わってやたら力強い口調で幸人を見下ろしていた。幸人の身長を考えると、おそらく一九〇はあることになる。

歳は二十代半ばだろうか。少し野性的な感じもするナチュラルなヘアスタイル、日焼けした肌。いや、もともと浅黒いのか。身長の割りにあまり『ひよる長い』というイメージが沸かないのは、Tシャ

ツの上からも見える厚い胸板の体格のせいだろうか。

形のはつきりした眉の下の目が、熱い視線を幸人に送っていた。口調と同じ位しつかりと意思を持った目。仕事に誇りを持ったプロフェッショナルの眼差しか。いや、それだけではないような

「さ、立ち話もなんだ、あがつて。沙羅、お茶の用意」

それ以上考える暇も無く、幸人の体はドアの奥に消えた。

第一章 消えた姉 - 3

給湯室でコンロに点火する音が聞こえた。

衝立の向こうは、ドラマで見るとような探偵事務所の光景が広がっていた。半開きのブラインドがかかった窓、その前には書類が平置きで積まれたスチールデスク。

スチールデスクと衝立の間には、幸人が座っているソファ二つとロ―テーブルの応接セット。

ドラマともうちょっと違うかと思ってたのに、と視線を巡らしていた幸人の前に、事務所の主が名刺を差し出した。

「じゃ、改めて……黒崎探偵事務所の黒崎英治。よろしく」

「あ、はい、島原幸人、大学生です」

返す名刺が無いため、両手で受け取って腰を下ろそうとした彼に、英治が右手を差し出した。

それが握手だと理解して右手を差し出す幸人。

握り返す英治の握力の強さに、幸人は頼もしさを覚えた。握力の強さは意思の強さ、と聞いたことがあったからだ。

「うんうん、見た目よりはたくましいな」

「は、はあ」

何故か空いている左手で幸人の右手をさする英治。

「え……と」

なかなかその手を離さないの、ためらいながらも声をかける幸人。

「おっと、こいつは失礼。どうぞ、楽にして」

離す手がなんとなく名残惜しそうなのは彼の気のせいかな。

「じゃ、二・三質問させてもらおうか。正直に答えてね、大事なことだから」

「はい」

「歳は？」

「十九です」

「へえ、大学生？」

「はい。二年目です」

「サークルとか入ってる？」

「いえ、特には……」

「じゃ、趣味とかは？」

「え……と、読書と音楽鑑賞、あと、たまにドライブとか」

「ドライブか、彼女と？」

「いえ、たまに姉を乗せるくらいで」

「もったいないなあ。好きな子とかいないの？」

「あ、あの、これって仕事に関係あるんですか？」

「うんうん、大事大事。正直に答えて」

「いえ、今は特には……」

「そうかあ」

そういつて少し身を乗り出す英治の鼻先に、ティーポットが突き付けられた。

「はい、お茶」

「うわっと、沙羅、あぶねえじゃねえか」

それには答えず、良い薫りを漂わせるカップをテーブルに二つ置いた。

「あら、あなたが頼んだんでしょ」

「メイドならもつと丁寧にしろって」

「あら、申し訳ありません、旦那様」

全然感情はこもってないくせいに、最後の言葉だけはわざとらしく強調する。

「それより、依頼内容とかちゃんと聞けたんでしょね？」

まるで大人のような口調だが、ませているといった感じは微塵も無かった。むしろ冷めたような口調だ。

「こ、これから聞くとこだよ」

「え？　じゃ、今までの質問は……」

「ああ、気にしない気にしない。ま、前置きだと思って。じゃ、こ

ここに来た理由、教えてくれるかな、最初から」

「は、はい……」

なんとなく腑に落ちないものを感じながらも、幸人は本題に入った。

第一章 消えた姉 - 4

小学生の時に両親を相次いで失った幸人にとって、三歳上の美由紀は姉であり母でもあり、時には父でもあった。

姉は中学を卒業してすぐ、夜学に通いながら昼間は仕事をして二人の生計を立てていた。それまで育ててくれていた遠い親戚は優しく、二人が高校や大学を出るまで面倒を見ても良いと申し出ていたのだが、なにぶん高齢であったので姉の方から辞退したのだった。

自分から援助を辞退しただけあって、姉はすっかりしていた。家事もほぼ完璧にこなし、夜学でも良い成績を収めた後、中小企業で事務職に就きながら幸人を大学に通わせてくれた。

姉の負担を減らそうと、バイトの出勤日数を増やそうとした時は、姉は学業を優先させると厳しい口調で注意してくれた。

優しくもあり、厳しくもあった姉。

「…… 良い話じゃねえか」

「……」

涙もろいのか、眼を潤ませる英治。それとは対照的に表情一つ変えていない沙羅。

「その姉が消えたのは、一週間前です」

バイトを終えて夜九時過ぎに帰宅した幸人。姉と共同で借りているアパートの一室に戻ると、既に夕飯の用意が二人分テーブルの上にあった。

仕事が遅くなりそうな時、姉は昼休みに一時帰宅して夕食の用意をすることがあった。職場が近いとこういう時便利ね、と言いながら留守番電話が二件入っていた。おそらくいつものように夕食を先にとるよう伝言が入っているんだろう。

そう考えながら再生した。

一件目。やはりいつもの通りだった。十時には帰る、と伝言を残しておきながら、いつものように十一時頃になるのだろうと思いが

ら二件目を再生した。

「『逃げて』、だって？」

「はい」

「……」

英治がソファに沈めていた上体を起こした。沙羅の眉が僅かに動いたのがわかった。

最初は何の事かと思った。本当に『逃げて』と言だけだった。幸人でなければ声の主が分からなかっただろう。姉の切羽詰った声だと。

一瞬、冗談だと考え、次の瞬間にはその考えは頭から消えた。まじめな姉がそんな事するはずがない。

携帯にかけたが繋がらない。ナンバーディスプレイが確かに姉の携帯からであることを示していた。職場にもかけたが、残っていた社員から九時半には出たと言われた。

夜通し待ち続けた。朝になっても、昼近くになっても戻らない。昼休みに電話がかかってきたが、それは姉の職場からだった。無断欠勤など初めてだとその社員も電話の向こうで首をかしげていた。

悪いと思っただが、姉の部屋を調べてみた。が、なくなった物は無かった。身につけているであろうと思われるもの以外は。

姉の友人に当たったが誰も知らないという。恋人もつくらずにいたため、外泊は皆無だった。念のために以前世話になっていた遠い親戚に連絡したが無駄であった。

結局一睡もせずに電話から二十四時間後、警察にかけこんだ。

「警察は？」

沙羅が口を開いた。

「一応探してくれているみたいです。留守電の内容から事件の線でも当たってみるとは言ってくれましたが……」

「進展は無し、か」

英治がまたソファにもたれかかった。

「はい」

「ここを紹介された、と言ってたな」

「ええ。警察は当てにならないんじゃないかと姉の友人が探偵事務所を紹介してくれたんです」

「そこでは？」

「部屋まで来て調べてくれました。でも……」

「でも？」

「人員が割けなくなった、とか、うちより適任がある、とか言っていて……それで代わりにここを紹介してくれました」

幸人がデイバッグから大きな封筒を取り出して英治に手渡した。

「これが資料です」

「……」

無地の封筒だった。普通の企業なら社名が書かれているのだろうが、それは探偵事務所という職業柄、そして渡す相手も探偵と言う理由だからだろうか。

無言で中身を確認する英治。写真が一枚添付されたA4用紙数枚に何やら途中経過がまとめられている。写真は証明写真の余りだろうか、正面から幸人の姉、美由紀の顔が写っていた。幸人に似ている、つまりは女性ではかなり美形の方だ。ボブショートが似合っている。その写真を一秒と眺めずに書類からはずす英治の後ろから沙羅がレポートに視線を合わせていた。いつの間にも移動したんだ、と考えた時には英治はレポートを封筒に戻していた。

「何もわかんねえじゃん、これ。どこの事務所？」

「それは言わないでくれ、と。商売敵だからとか何とか……」

「……なんだか貧乏クジみたいね、これ」

沙羅がぼそりと呟いた。

「本当、こんな仕事とってくんないよ」

英治が沙羅に一瞥をくれて愚痴を垂れた。

「あら、事務所に通したのは私じゃないわ」

「じゃ、誰だっけ言うんだ？ この事務所は探偵とそのアシスタントしかないないぜ」

「そこまで分かってたら計算できるんじゃない？ ニマイナスで残った人しかないわ」

「やなガキンちょ」

「あら、仕事以外の理由で仕事を受ける大人よりマシよ」

「あ……あの」

幸人がためらいがちに割って入った。

「その……お願いしますっ！！」

幸人がテーブルに手をつけて頭を下げた。

「姉さんを探してください！！ 僕にとって姉さんはたった一人の家族なんです！！」

「おっと、そんなに頭下げなくていいよ。クライアントは君だ。さっきのは失言だ。冗談だと思って聞き流してくれ」

「は、はい……でも……」

「何？」

「その……実はあまり蓄えが無くて……最初の探偵事務所の分だけで精一杯だったんです。うち、姉と自分のバイト代で何とか生活しているくらいですから……で、でも、その代わりお手伝いできることなら何でもします」

「何でも？」

「は、はい……」

顔を上げた幸人に、やたら眼を輝かせて念を押す英治。

「わかった、君の熱意に負けたよ」

そう言っただけで幸人の両手をとる英治。

「姉を思う一途なその思い、いや、立派立派。やっぱ、男は見た目だけじゃなくて芯の強さつても大切だよな。そうでないと落としがい」

「あ、あの……落としがいて……」

「ああ、いやいや、聞き違いだろ？ とにかく、手伝ってくれんだったらお金はいつでもいいから」

「は、はあ……」

「じゃ、早速契約書を……えっと、どこだったかな？」

デスクに戻って引出しをまさぐる英治。

それを呆然と見送る幸人に、沙羅が近づいてきた。

「幸人さん」

「は、はい」

何故かこの少女の前だと敬語になる。

「英治と二人きりにならないように気をつけてね」

「えっ？」

その言葉の意味に、幸人は言いようの無い身の危険を感じて来た時よりも寒気を感じていた。

第一章 消えた姉 - 5

それは奇妙な取り合わせだった。

事実、道行く人々の何人かはその三人組がどういう関係なのか想像つかなかったであろう。

右側には、浅黒い肌の背の高い男。がっしりした体格は、どこかのスポーツインストラクターを思わせた。

左側には、眼鏡をかけた青年。彼も結構背が高いのだが、右側に立つ青年が一回り身長も体格も大きいせいか、少し線が細く見える。この取り合わせだけなら、友人同士に見えなくもない。

が。

彼ら二人を割ってはいるように小さな姿が一人。

二人の腹部辺りまでの背の少女。正確に言うならば『美』少女。

腰まで伸びる黒髪と対照的な白い肌。それこそ『お人形さん』のような整った顔立ち。

この三人目の存在との組み合わせが、道行く人が見えれば頭に疑問符を浮かべながら通りすぎる理由だ。

歳の離れた兄二人と妹？ いやいや、三人とも全然似ていないし。親戚同士か何か？ 多分、そうだろう。

気の長い暇人でも、そこで適当にケリをつけて通りすぎるのみだった。

そのどちらも正解ではないが。

「あのなあ、沙羅。何だつてついてくるんだよ？」

「あなたじゃ頼りないから。それと、ボディガード。幸人さんの」
「ぼ、僕のですか」

正解は、ちぐはぐな探偵コンビ二人とそのクライアント依頼人。当たった人がいたらそれは天才かよっぽど想像力のある人だ。

事務所から最寄の駅で電車に乗り、私鉄を含めて2回乗り換えて電車を降りた。今彼らが通っているアーケードを抜ければ、幸人が姉

と借りているアパートまで五分とかかるまい。

「ボディガードなら、俺だけで十分だろ」

「あなたが一番危ないから」

「何のことかな？」

「あ、あの……」

これ以上自分の見に危険について考えたくない幸人は、敢えて話題を変えることに。

「沙羅……ちゃんは何で探偵事務所に？」

なぜかおらずと尋ねてしまう。特に彼女の前だと『ちゃん』をつけるのもためらってしまう。そのほうが自然なはずなのに。

「アシスタントだから」

それだけ返す沙羅。それ以上でもそれ以下でもなく。

「な、なるほど……」

口ではそう言ったものの、納得なんてするわけが無い。探偵事務所でアシスタントする小学生の女の子、なんてそれこそマンガだ。

いや待てよ、今は夏休みだから知り合いか親戚である英治の所に、ちよつと手伝いで……いやそれも結構ありそうでなさそうな話だ。

「そうだ、沙羅、てめゝなんであのカツコしないんだよ？ 一日中、あのカツコで過ごせって決まりじゃねえか」

英治が思い出したように言う。

「ちゃんと約束は守ったわよ。罰ゲーム終了から丸一日二十四時間、あの恥ずかしい格好だね。事務所を出る時にちよつと二十四時間経ったじゃない」

「ちつ……」

罰ゲームってなんだろう？ というか、この二人の関係は？ 親戚

……まさか歳の離れた兄妹でもないし。っていうか、何でメイドの服なんて用意してるんだろう？ コスプレ……って、それをさせる英治って人はなんかヤバんじゃないや。いや、既に僕自身が言いようの無い身の危険を感じてるし。この沙羅ってコもなんか変わってるよな。素っ気無いつて言うか大人びてるっていうか。罰ゲームでメイ

ドの格好させられて怒ってるからかな？ でも今の格好だってちょっと雰囲気違うよな。今時の小学生の女の子がどういうおしゃれるのか良くわかんないけど、なんとなく男の子みたいな、いやちよつとミリタリー系入ってる格好だし。この暑いのに長袖で暑くないんだろうか？ 汗一つ掻いてないけど……

幸人のまとまりの無い疑問はそこで途切れた。

「あれ？」

いつのまにか商店街を抜けていた。それは別にどうって事は無いのだが、方向が違っていた。このままだとアパートから外れてしまう。場所を教えていたとはいえ、この二人にとっては初めてのはずだ。考え事しているうちに道を間違えたか、と幸人は英治に向き直った。

「黒崎さん、あの」

「何だい？」

道間違えましたね、というより早く英治が幸人の肩に手を回した。

逃げる暇も無く、英治の口が幸人の耳元に近づいてこうささやいた。

「つけられている」

「えっ？」

「静かに。商店街からだ。この先に分譲マンションの展示場がある。今日は休みの、な。そうだろう」

幸人は眼でそうだと合図を送った。そこまで調べていたのか、という驚きも付け加えて。

「このまま進んで。君は俺が守る」

「俺達、でしょ」

二人の下で沙羅がかすかに届く程度の声で言った。

「そう、俺達、だ。まあ、それまで自然に、な」

幸人の背筋を冷たいものが走った。つけられていると聞かされたため、と言いたい所だが、英治が離れ際に耳に息を吹きかけたのが一番の原因だ。

不安を覚えながらも、近所に住む自分でさえうる覚えの展示場に脚を進める幸人。それに案内されるように英治と沙羅が続く。しかし、

例え幸人が忘れていたとしても二人は迷うことなく目的地に着いていただろう。

五分としないうちに目的地に着いた。それまで無言でいた幸人にとつてはやたらと長く感じた。尾行される、というドラマまがいの経験が自分に振りかかるうとは想像もしていなかったからだ。

展示場は三棟がコの字を成し、通りに面したコの空いた部分が駐車場になっていた。いつもなら五台入れば満杯のスペースも、休みの今はやたら広く感じる。

英治が駐車場入り口のチェーンをまたいだ。続いて幸人、沙羅。

「そろそろ出てこいよ」

駐車場のちょうど真中に立った英治が、正面にある奥の展示ハウスを見据えて言う。

「……良く分かったなあ、探偵さん」

ハウスの影から男が現れた。尾行されているから、後ろからくるものと思っていた幸人は声も出なかった。

男は小柄ではあったが、遠目にも筋肉質であることが分かった。今時、本物のその筋の者でも身につけないような派手な柄のシャツを身につけ、そのはだけた胸元から分厚い胸板が覗いていた。ガムを必要以上に音を立てて噛みながら、肩をいかせて英治の三メートルほど前方で睨み付けていた。

「まあな。つけるのは得意だからな。つうか、それが仕事だ」

「そうかいそうかい。でもよ、俺はあんたにや用事はねえんだよ。

そっちの兄ちゃんに用事があるんだわ」

男が幸人に視線を向けた、というか睨み付けた。幸人にもその目つきが穏やかな物でない事は一発で分かった。

「そういうことだからよ、このまま引き取ってくんねえかな、ええ？」

「嫌だと言ったら？」

英治の口元は僅かににやけていた。

「んなもん決まってるわな、こういう時に言う台詞。俺は誰でも容

赦しないぜ、そのチビだつてな」

それこそ小学生ならそれだけで泣き出しそうな声と視線を沙羅にま
で向けた。

「！？ あんた、なんてこと言うんだよ」

幸人が沙羅をかばうように前に出た。微動だにしない沙羅が、恐怖
で固まっていると感じて。

「…… 幸人さん、ありがとう。でも、心配しなくていいから
いつもと変わらぬ声が、幸人の背中越しに聞こえた。

「それに、あなたは私を守るって言わなかった？」

男が、けけけ、と下卑た笑い声を立てた。

「お嬢ちゃん、やせ我慢が上手だなあ、ああん？」

「二対一で勝てると思ってんの、おっさん」

沙羅の代わりに英治が割って入った。

「なにっ、おっさんだと！？ こう見えても俺はまだ二十代だっ」

意外と歳を気にする奴らしい。

「そう吠えるなつて。計算ぐらいできるだろ？」

英治の挑発を男は堪えた。そして代わりににやけた上唇を舌で湿ら
せた。

「…… お前はバカか？ その青白い兄ちゃんに何ができる？」

「俺は別にクライアントを頭数に入れてないぜ」

一瞬の間。そして男は今度は腹を抱えて笑った。

「ひゃひゃひゃ……、お前正気か？ そんなガキに手伝ってもらっ
気か？」

「こいつは結構一人前だぜ。ま、口だけは十人前くらいあるかな」

「何だつていい、ここまで俺をバカにするとはなあ……」

男の声が据わった。

「でもよお、あんたの計算、それでも間違ってるぜ。二対一じゃな
く」

男がガムを吐き出した。

「二対百だああっ！！」

同時に二つの感覚が幸人を襲った。

風圧が幸人の頬を襲うのと、背中を誰かに押された事と。

その風圧が男の上段廻し蹴りが起こしたものであり、そして幸人のすぐ横にいた英治を狙っていたこと。背中を力強く押して風圧の威力を軽減させたのが背後にいた沙羅であつたこと。

それを理解した時、男と英治は入って右手側の展示ハウスに向かつていた。

幸人は混乱しかけた。男と英治の距離は三メートル以上はあつたはず。近寄る瞬間は見えなかった。瞬きしていたのか、それともその筋の者はそれだけの能力を持っているのか。

その幸人の視界に、黒髪の背中が入ってきた。

「大丈夫、英治なら、ね」

幸人の不安を察していたのか、どことなく力強い。

（でも……）

ほとんど呟きに近い沙羅の声は幸人には届かなかつた。

「おらよっ!!」

必要以上に怒気を含んで男が正拳突きを繰り出す。それを、英治は半身に後ずさりながらかわ躲す。

「へへへ、どうした、まだ全然本気じゃねえんだぜえ」

「出し惜しみするなよ、老け顔の二十代」

英治が涼しい顔で挑発。

「抜かせえええっ!!」

怒号とほぼ同時に、工事現場でしか聞いたことのないような音が響いた。

「なっ!?!」

幸人は眼を疑った。

追い詰められる格好になつた英治が、展示ハウスの外壁を背にしていた。

そのすぐ右脇で、男の右腕が肘まで外壁にめり込んでいた。

「動きだけはすばやいな、ああん？」

男が右腕を抜いた。抜き切ったと同時に、コンクリートの破片が音と埃を撒き散らして地面に降り注いだ。

仮設の展示施設とはいえ、外壁は本物と同等、つまりは防音のコンクリートを使用している。それに素手で穴を空けていた。

「その動き、空手をかじっているな、おっさん」

「まあな。でもかじっているのはそれだけじゃないぜ」

男が今度は前蹴りを繰り出した。今度は力を抜いてスピード重視にしたのだろうか、壁面に穴は空かずヒビを入れた。が、それをかわ躲した英治も英治だ。

「ひひひ……かじっているというより、『しゃぶっている』とでも言った方がいいか」

男が舌なめずりをした。その口元を見つめる英治の目つきが変わった。

そして、沙羅も。

「……なんとなく臭いと思っていたが、そっち絡みだとはな」

「ええ」

英治の声は男ではなく沙羅に向いていた。そして、沙羅も確実にそれに応えた。

「何俺を無視してやがる？」

男が今度は左正拳突きを繰り出した。ハウス自体を震えさせる轟音と共に肘までめり込んだそれを、英治は前転で躲し、建物と男から離れた。

「脳がたりねんじゃねえの、動きが単調単調」

前転し、肩膝立ちになった英治がズボンの裾から何かを取り出して右手に構えた。

「けけ、そんなナイフ一本でどうする気だ？」

男が手を突っ込んだ姿勢のまま、横目でその動きを追った。

英治の手に握られているのは刃渡り十五センチほどのナイフだった。鈍く銀光を放つ刃が、途中からハンドガードを兼ねて伸びていた。ハンドガードも凶器と化したまがまが禍々しくも美しいデザインは、

トータルで三十センチ近くの危なっかしい刃の塊でもあった。

「まあ、そっちがそうなら、こっちもそうするか」

男が左腕を引き抜き出した。同時に、外壁が右腕の時よりも大きい音を立てて震えていた。手首まで抜いたところで男は動きをいったん止めた。

「そらよっ！！」

男が一気に手を、いや、手と何かを抜いた。

「！？」

「伏せて」

幸人は声さえあげられなかった。沙羅が腕を引き寄せなければ腰を抜かしていたであろう。

英治を狙ったそれは、しゃがんだ姿勢からの側宙で英治に躲かれ、後方の幸人の頭上を飛び過ぎて残った展示ハウスの窓をぶち破った。伏せた姿勢から、破片が僅かに残る窓ガラスから生えるように突き刺さっているそれが鉄柱であることを幸人は確認した。

「惜しいな」

男の台詞に幸人は向き直った。

男の背後で、薄いとはいえ耐火コンクリート壁を丸一面打ち破られて風通しの良くなった展示ハウスの惨めな姿があった。

「そんなバカな……」

やっと意味のある言葉が口から出た。しかし、目の前の状況を表現するにはそれで充分であった。

いくら怪力で空手を習っていても、あそこまでやれるのか？ それに、男に痛そうな表情は微塵も浮かんでいない。まるで紙で出来た模型を散らかしているように涼しい顔をしている……

「幸人さん、考えないことね」

「え？」

「考えると、混乱するだけよ」

沙羅のいつもと変わらぬ口調が、逆に幸人に落ち着きを取り戻させた。

「おっさん、あんまちらかすなよ」

「ああ、跡形残らんようにしてやるよ」

「できるかい？」

英治がナイフを逆手に持ち替えた。

「そっちのチビもだ……眼鏡の兄ちゃん、あんたは安心しな。お前は殺すなって言われてるしな」

「ぶぶ……情報もらしてやんの」

「何？」

「そこまで聞けばいいか。そらよっ！！」

英治が足元まで転がってきていたコンクリートの破片を投げつけた。それは男を狙った物かと思われたが、軌跡は男の横を通り過ぎ、後ろの壊れかけの展示ハウスの剥き出しの柱に当たった。

瞬間、支えを揺さぶられたハウスは轟音と埃と破片を派手に立てて崩れ落ちた。

「てめえ、何を……」

「いくら休みでも、街中でこんな派手に暴れて誰も気づかないと思つてんの？ ましてやこんな派手に家を壊しちゃ、警察が来る前に近所から野次馬が集まるに一分とかからないぜ」

「畜生……」

事実、どこからか「こっちだ」とか「何の音だ？」と早くも声が聞こえ出した。

「まあいい、まだ時間はある、次に会った時は覚えてやがれ……」

怒気を含んでいない分、その捨て台詞は逆に凄味を増していた。それだけを後に残し、男は崩れたハウスを尋常ならざる速さで飛び越えて視界から消えた。

「た、助かった……？」

思わず声に出してへたり込む幸人。だが、その前に沙羅が腕を引っ張った。

「何のんきなこと言ってるの。英治の言ってる意味、わからなかったの？」

「へ？」

「そうそう、俺達だってこんなところにいたら疑われちまう。とりあえずさかるう」

「で、でも、脚に力が……」

「何なら、俺がおぶってやろうか？」

「い、いえ結構ですっ……！」

本当に背中を差し出そうとした英治の横を、幸人は飛び越すようにかけ抜けていった。

第二章 隠れた存在 - 1

「部屋を出たほうが良い」

「え？」

幸人の先に行く英治が振り返らずに言った。

あの夢の中のような乱闘を繰り広げた展示場から走ること三分、幸人は英治の猛烈なスピードについていくのがやっとだった。体力の限界を感じ始めた瞬間、英治は初めてその足を止めた。

息を整えてから胸中の数々の疑問を口にする前に、先手を打たれて幸人はその一単語を言い返すのがやっとだった。

「そうね」

次は声を返す余裕がなかった。幸人が振りかえるとそこには沙羅が立っていた。幸人が膝に手をつけて肩で息をするほどの全力疾走だった。前に行く英治が涼しい顔をしているのはともかく、目の前の少女は汗一つかいていない。直接確かめたわけではないが、沙羅も自分の後ろからついてきたはずなのに。

「……あ、あの、君達はいつたい……それに、あれは……」

まだ激しい息を整えながら声を絞り出す幸人。

「いずれゆつくり話す。先に、部屋に行つて荷物を取りに行く」

「それと、調べ物も」

二人はそれきり口をつぐんで歩き出した。幸人は何か言葉を返そうとした。実際、口だけは開きかけたが、それはすぐにあきらめのようなため息に変わった。沙羅はともかく、いつもは軽い口調の英治が目つきまで鋭くなっていたからだ。

一分もせずに自宅アパートに着いた。

二階建ての階段を上がつて一番奥が幸人と姉の部屋だ。

「鍵を」

それだけ言つて英治は幸人の差し出した鍵を受け取る。

ノブに軽く触れ、それからゆつくりと鍵を差し込んで廻す。

その間、沙羅は扉に背を向けるようにして周囲をうかがう。

幸人はただ見守るしかなかった。自宅でありながら、入り込めない雰囲気があった。

「一分待つて」

声だけを残し、ドアをほんの少し開けた状態で英治が踏み込んだ。入る、と言うより踏み込むという表現が適切だった。

「OK」

きっかり一分後、英治の声が聞こえた。幸人よりも先に沙羅がドアを開け、首をかしげて部屋に入るように促した。普通なら小生意気にも見えるその仕草に押されるように幸人が部屋に入り、最後に沙羅が周囲を一瞥してから部屋に入った。

昼間だというのに薄暗い。出る前にかけておいたベランダのカーテンを引けば良いのだが、そのカーテンの下で英治が膝について床に視線を走らせている。

近寄りがたい雰囲気には躊躇している間に、沙羅が声をかけた。

「着替えと身の回りの物を用意して。バッグ一つに納まるようにね。出来ればデイバッグで。なければショルダーバッグでもいいから。

十分以内に」

「う……ん」

幸人の返事を待たずに、沙羅は台所に面した窓を調べ始めた。

二人に声をかけることはあきらめて、幸人は自室で荷物をまとめ始めた。

着替え、洗面用具、筆記用具などを押入れにあった少し大きめのデイベッグに詰め込む。

まだ何か用意する物は、と部屋中に視線を巡らした時、本棚の一番端に収めている物で視線が止まった。

「アルバム……」

アルバム、と言っても家庭で保存するようなハードカバーの大判ではない。焼き増しの際に店からもらえる安物のフォトアルバムが一冊。

幸人はほぼ無意識にそれを手にとった。さほど観光気分写真を撮ることも少なかったため、今まで撮影した写真がこの一冊に収まっているはずだ。

姉と自分の思い出が。

「幸人さん」

アルバムを開こうとした指は、感傷にひたる前に背後からかけられた声に動きを止められた。

「用意、出来たよ」

時間が来たのかと思い、急いでアルバムをバッグに押し込んで返答した幸人。

「こつちへ」

しかし、沙羅の言葉とかしげた首は玄関とは別の方向を指していた。バッグを手に向かった先に、英治の直立不動の姿があった。

電話を見下ろしたままで。

「幸人君」

視線は下を向いたままだ。

「はい」

「留守電、クリアしてないよね？」

「ええ」

姉の声を消したくなかったから、と心の中で付け加えた。

「あれ以来、留守電は？」

「いえ、全然」

「留守中に入ったようだ」

「あ……」

電話の液晶ディスプレイを見た。

留守電件数が三件に増えていた。

確認を、と横にいた沙羅の視線がそう言っていた。

幸人は再生ボタンに触れた。

一件目。

姉の『帰りが遅れる』と言う伝言だ。元気な姉の声。懐かしくさえ

感じる声。

二件目。

『逃げて』の一言。今まで幸人も聞いたことのない切迫した姉の声。そして、三件目。

『……幸人』

「姉さん!？」

間違えようが無かった。それは姉の声だった。

そして、先の二件とも違う姉の声が聞こえてきた。

『御免ね、心配かけて。でも、もう大丈夫だから。それより、大事な話があるの。明日、夜十時に、横須賀の久里浜港に来て。一度、ドライブで行ったことあるでしょう……詳しくは着いたら私の携帯に電話して……待っているから』

そこで録音は終わった。

ディスプレイに表示されたのは、間違い無く姉の携帯の番号。

「ちっ」

受話器を取りながら幸人は自分の運の無さを呪った。もう少し早く帰って着ていれば姉と話せたのに。

リダイヤルしたが、また電話は繋がらなかった。ついさっきなのに、なぜ? という疑問ともう一つの疑問が頭に浮かんだ。

間違い無く姉さんの声だ。でも、どこか雰囲気違っていた。最初に自分の名前を呼んだ個所では、なんとなく姉の安堵のため息が聞こえてきそうな口調だった。なのに、それ以降はまるで感情がこもっていないかった。

姉さんは一体

「時間よ」

沙羅の声が幸人の思考に突き刺さった。

その声は、姉の声と同じく無感情だった。

第二章 隠れた存在 - 2

東京都千代田区霞ヶ関。

日比谷線、千代田線、丸の内線など、各種の営団地下鉄の路線が交わるこの駅を上がってすぐ、日比谷公園の道路を挟んで向かい、中央合同庁舎第5号館。

厚生労働省

モノリスの小型版のような灰色のプレートのほぼ真中に、ゴシック体でプリントされた文字を見ていた。

霞ヶ関 日本の省庁の中心地。

厚生労働省だけではなく、農水省、国土交通省、警視庁、経済産業省など、ありとあらゆる庁舎が道行く人を見下ろす場所。

自分とは縁の無い場所、と思っていた場所に幸人は立っていた。

しかし、自分よりもっと縁遠いと思われる存在が傍らにいた。沙羅だ。

大学生と小学生の二人組が、庁舎の前にいる。

学生の幸人だけなら、夏休みを利用して見学に来ているという説明は容易につく。が、社会見学の団体でもない小学生がここに来るのは、よっぽど夏休みの自由研究で他人とは違うことをやりたいのだな、という想像ぐらいしか一般人には浮かばない。

部屋から出た後、英治は幸人の荷物を受け取って探偵事務所へと戻った。後で落ち合おう、と言いながら。最初は幸人と一緒に行くことを主張していたが、沙羅の『子供に重い荷物持たせる気?』という一言でやり込められてしまった。

で、落ち合う場所となったのがなぜか厚生労働省の十九階。

訳も分からぬ幸人に、沙羅は、

「そこで全部説明するから」

の一言で幸人の質問の口を封じてしまった。

ここに、一体何があるっていうんだ?

威圧的に見下ろす建物を見上げる幸人。

「行くわよ」

幸人が視線を下げた時、沙羅は庁舎入り口のゲートに向かっていた。

「調子は？」

ブラインドを下ろしたままの窓際の事務机で、初老の男が訊いた。
スライド式書架が並ぶ薄暗い部屋にいるのは、彼ともう一人だけだった。

「なんとか」

机の前で彼と対面しているのは、皺一つ無い緑のスーツを完璧に着こなした女性であった。

古臭く言えばおかっぱとも言つのだろうか、コンマミリ単位で切りそろえられたショートヘアに、銀縁の眼鏡。ほっそりとした顔立ちに似合わず、胸元はスーツを窮屈に内側から押し上げていた。野暮ったい眼鏡と髪型でなければ街に繰り出す度にナンパされそうなほどの美形だ。

初老の男は、少し薄くなりかけた銀髪をオールバックでごまかす様に塗り固めていた。視線は鋭く女性の胸元 には行かず、きつくりと眼を見つめていた。

専務とその美人秘書、と言えばぴったり来るのだろうか。

「で、用件とは？」

女性のその口調は、秘書が受け応えるのとは違っていた。

「ハンターが入国した 武器も一緒に」

「……またですか？」

ため息で間を置いてからでた女性の声は、触れると切れそうなシャープさがあった。

「海保は何をやってるのかしらね？ 人の流れは食い止められなくても、武器さえ食い止めてくれれば変なごたごたも減るのに」

海保、とは海上保安庁のことだろう。武器とは、もちろん日本では非法のものばかりを指している。

「今回は海保の責任じゃない。武器は空路で運ばれた。判明したのはおろしたあとだ。どんな方法で通ったかは不明だ」

「ふん……ハンターもハンターよ。自分の国で古臭い英雄ごっこやっていればいいのに、わざわざ他の国まで出向いてくるなんて。迷惑も良いところだわ」

「そうとがるな。ハンターは呼ばれて日本に来たらしい。今のところ判明している情報はここに入れておく」

男は事務机の上に封筒を置いた。

「分かりました。できるだけこつちでやってみます。あの子達は別の仕事が入ってますから」

女性は封筒の中身を確認せずに傍らの鞆に入れた。

「別？ どちらのだ？」

「本来の方、ですよ。多分そろそろ」

女性の背後でノックする音が聞こえた。

返事は無かった。

厚生労働省、中央合同庁舎第5号館、十九階。

ずらりと並ぶ灰色のドア。そのうち目の前にある四番と表記されたドアだけが開放されていた。

厚生労働省図書館。

平日は第四木曜日を除いて開放されている公共の施設だが、休日に開放しないと利用しにくいんでは、と幸人はお役所的な考え方从前から思っている不満を思い出した。

しかし、沙羅はそこから外れて四つ隣にあるドアに幸人を導いた。何の表記も無い いや、ただ『0番』とだけ表記がされていた。なぜか沙羅はノックしかけた手を戻し、幸人に無言でその役目を譲った。

いつものことながら無口・無表情なのだが、どことなしにため息を漏らしそうな感じがするのは気のせいかな。

反応が無いので二回目のノックを試みようとして手を伸ばした時、中か

ら声がした。

「どうぞ」

女性の声だった。それも、最近どこかで聞いたことのある。

「失礼します」

大学入試の面接のような緊張感で、幸人はノブに手をかけた。

「こんにちは、幸人さん」

「！？　あなたは……」

幸人は声を詰まらせた。

切りそろえた髪型、銀縁眼鏡、そしてシャープなスーツの着こなし。それは彼が最初に依頼した探偵事務所　加嶋探偵事務所の探偵だった。

第二章 隠れた存在 - 3

加嶋冬美 幸人はもらった名刺にかかれていたフルネームを思い出した。

三日前。

「申し訳ありませんが、この件の捜査は当方では打ち切りとさせていただきます」

「え？」

夕陽が窓を通して室内を染める。

窓に貼られた『加嶋探偵事務所』のテープの反転した影が室内に、そしてソファの幸人にも伸びていた。

「こちらも人員不足でして」

事務機の傍らに立つ加嶋冬美の口調は、それが当たり前だと言わんばかりだ。

「じゃ、じゃあ姉さんの捜索は……」

幸人がソファから腰を浮かした。

この探偵事務所はその業界ではかなり有名なところらしく、所長である加嶋の他にもエージェントを十人抱えているらしい。その十人分の机が全部空席であるところを見ると、確かに多忙であることは窺い知れる。

「ご安心下さい」

柔らかい、と言うよりも腰を浮かせる幸人の動きを静止するような冷たさが言葉に含まれていた。

「有能な事務所を紹介します」

夕陽を背にした冬美の目が、どこと無く笑っていた。

「そう、特にこの件に関しては適切な、ね」

「何で、あなたがここに……」

ここで全て説明される、と沙羅が言っていたが幸人は余計に混乱す

るばかりであった。

姉の謎の失踪、凸凹探偵コンビ、人間離れた怪力の男、厚生労働省。

そして、最初に依頼した探偵事務所の女。

全てを線で結べるほど、幸人の脳内シナプスは柔軟ではなかった。

「あら、もう一人いるようね」

幸人の混乱をよそに、冬美は幸人の背後に声をかけた。

そこには沙羅が何故か幸人の背後に隠れるように立っていたのだ。

冬美の問いかけに、半ばあきらめたように　いや実際ため息らし

きものが幸人には聞こえたのだが　沙羅が姿を現した。

「……どうも」

「まああっん、沙羅ちゃんじゃないっ!？」

「はへっ!？」

幸人の声は裏返っていた。

無理も無い。有能でシャープで軟派男の取りつくしまも無さそうな冬美が、沙羅の姿を見たとき急に黄色い声を張り上げたのだ。声だけでなく、両手を胸の前で組んでくねくねさせている。

幸人そっこのけで、いや、実際に幸人を押しのけて沙羅に駆け寄る冬美。

それを一瞬よけようとして、そしてそれが無駄であることを悟ったのかあきらめたように立ち尽くす沙羅。

「もおおん、沙羅ちゃんったら、来るんだったら来るって言うてくれれば良いのにい。そしたらおよーふくとかお土産、いっぱい用意するんだからあ」

「……結構よ」

「……」

押しのけられた幸人は別の次元で自分の中に混乱する要素が出来てしまった事に頭を痛めた。

冬美はいつの間にか膝立ちで沙羅と同じ視線になると、その頭を両手で抱え込んでほおず頬擦りし始めた。沙羅は相変わらず無表情だ

が、その眼があきらめの色でそっぽを向いている。

「まあ、沙羅ちゃんたらまたそんな男の子みたいな格好しているの
お？ ダメじゃない、この前贈った服はどうしたの？ ティディベ
アがついたのとかあ、きれーなりボンとかいっぱいあったでしょ？」

「……仕事に邪魔だから」

「沙羅ちゃんはそのなこと気にしないでいいの。アシスタントだからって、仕事ばかりしてちゃだめよ。きつーいお仕事は、あの変態に任せておけばいいんだから」

「……だれが変態だった？」

そうドアを開けて入ってきたのは、ここで落ち合う予定であった英治だった。

「あら、いたの？」

英治の姿を見た途端、冬美の表情が元に、いや元以上にシャープになった。口調にはいらだたしささえ感じられる。

「俺のどこが変態なんだよ」

「あら、誰もあなただなんて言っていないけど」

「あなたの態度のほうがよくばど変だぜ」

「あら、立ち聞き？ その上ノックもせずに入ってくるなんて、しつけがなっていないワンちゃんね」

二人のトゲだらけのやり取りに、ちょうど間に挟まれる形になっていた幸人はほとんど腰を抜かしていた。嫌な汗も背中を伝っている。
(……もう、なんなんだろうこの人達？)

半ばやけになつてその雰囲気にも身だけを置いていた幸人。

「……まあまあ、加嶋君も黒崎君もそれくらいにして」

咳払いで一呼吸置いてから、少し疲れたような低い声が聞こえた。それが窓際の机に座った初老の男の物だと、幸人ははじめて気がついた。いや、そもそもその存在自体だった今気がついた。影が薄いのか、冬美や黒崎の存在感が圧倒していたのか。多分、両方だろう。

「そ、そうだつ、それよりも説明して下さい！！」

幸人は本来の目的を思い出して立ちあがった。

「姉さんは行方不明になっちゃうし、変な……その、家を素手で壊しちゃうような男が襲ってくるし、それに、何であなたがここに？ いや、それよりも厚生労働省が姉と何の関係があるんですか？」
『あなたが』と言う個所で冬美を向けられた以外、幸人の声は部屋にいる全員に向けられていた。

そんな幸人に全員の視線が集中していた　沈黙の眼差しで。

「幸人さん」

最初に沈黙を破ったのは沙羅だった。

「説明してあげるわ……分かっていうことは全部」

それを合図にするように、ドアの傍らにいた英治が鍵をかけた。

「でも、どこから話したらいいかしらね」

「そ……の」

「そうね、まずはここが何かを説明した方が良さそうね」

幸人の回答を待たず、沙羅は窓際の初老の男に声をかけた。

「五十嵐課長、お願いできるかしら」

子供が自分の祖父でも通用しそうな相手に言う口調ではなかったが、五十嵐と呼ばれた男は気にした風も無く席を立った。

「そうだな……」

そう言いながら、机に置いたシガレットケースから葉巻を取り出すと、専用のVカッターで端を切り落とし、柄の長いマッチで充分に火を点してから啜えた。

幸人にはそれがじらされているようで苛立ちさえ覚え始めていたが、逆に心構えの時間として受け止めた。
が。

「吸血鬼、という存在を君は信じるかね？」

煙と共に吐かれた台詞は、まさしく彼を煙に巻いていた。

第二章 隠れた存在 - 4

「吸血鬼……ですって？」

「そう。吸血鬼、だ」

吸血鬼。

言葉は誰もが知っているが、その存在の本当の姿を知る者は果たして何人いるだろうか。

最初からフィクションとして創られた存在で有名なのは、かのドラキュラ伯爵。小説を元に映画・テレビ番組・コミックに派生し、そのうえ派生した先でも派生元である小説の分野でも、吸血鬼はその存在を広げていった。その中には、元の存在からかけ離れた者もいた。やたら怪物じみたものから果ては宇宙人まで。

だが、それはあくまでも想像の産物ではないはずだ。

「それが……いる、と？」

ふざけるな、と言いたい幸人の台詞は、口から出るどころか胸の奥まで押し戻されてしまった。課長もそうだが、英治、冬美、そして沙羅の目も冗談で無いことを語っていた。

「その前に……君は『吸血鬼』と言われてどんな言葉が浮かぶ？」

どんな名称が？ どんな特徴が？」

「それは……やっぱり『ドラキュラ伯爵』とか、太陽や十字架に弱いとか、蝙蝠に変身する、とか……」

そこまで言つと課長の口から押し殺した笑いが短く漏れた。

「な、何ですか」

「いや、失礼。あまりにも模範的な一般人の答えをするものだから。悪気は無いんだよ」

一息つくように煙を漂わす。普通のタバコよりきつい薫りに、幸人はむせそうになった。

「確かにそれは正解だ。フィクションの世界なら、ね」

「フィクションなら？」

「そう、フィクションの世界なら、だ。そこには君の言う吸血鬼は存在する。『血を吸う鬼』として。英語なら『ヴァンパイア』だが、語源をたどるとスラヴ語圏の言語の『吸う』と言う単語が使われているらしい。ま、これは今でも研究中らしいが。しかし」

課長は灰を灰皿に落とした。

「そのような者は存在しない、この世の中には」
「はあ？」

幸人の声は裏返った。散々じらしておいて、答えがこれだと言うのか。

「じゃあ、最初の質問は何なんです？　まるで吸血鬼がいるような言い方だったじゃないですか」

「そう、確かに『血を吸う存在』はいる。この世の中に。だが、君が言うような吸血鬼は存在しない。いや、便宜上『吸血鬼』という呼び方もするがね。我々はそれを『吸血症感染者』と呼んでいる」

「吸血症……感染者？」

初めて口にする言葉に戸惑う幸人に、今度は冬美が説明を始めた。

「そう。正式には『急性吸血症候群感染者』。ここ　厚生労働省・医薬局・『吸血症候群対策課』ではそう定義しているわ」

急性吸血症候群感染者　または吸血症感染者。

この世の中には『血を吸う』衝動が抑えられない人間が確実に存在する。それは人間の血のみならず動物の血を欲する病気であり、むしろ精神病に分類されることが多い。

公に認められているのはそれだけだ　表向きには。

しかし、これらとは全く違う血を吸う存在がいる。

それが『急性吸血症候群感染者』だ。

どこが違うのか。それは肉体的にであった。

吸血症患者は見た目は全く普通の人間と変わりはない。夜しか歩けない、ということも無く、普通の人間とほぼ同じ生活が出来る。しかし、中身は丸つきり別の物となる。

人の数倍、いや時として数十倍の筋力を発揮し、驚異的な新陳代謝・自己治癒力により、通常なら死に至るような外傷も異常な速さで完治する。その上、一度感染するとそれ以降老化現象が完全に止まってしまう。そして、その肉体を維持するには、個体差はあるが定期的に人血を摂取しなければいけない。

フィクションとも異なり、かつ普通の人間とも異なる不老の存在。そのメカニズムは今だ不明だ。

「でも、何でその吸血鬼、っていうか吸血症感染者を厚生労働省が？」

一通り説明を終えた冬美に幸人が尋ねた。

「元は『厚生省』にあったのよ、この課は。まあ、その頃からあくまでも隠された存在として設立されたのだけど。感染者と同じように」

いつから感染者が存在していたのかは定かではない。しかし、フィクションや伝説で語られる『吸血鬼』のうち、ほんの少しでも『吸血症感染者』を元に創作された物があるとしたら、その起源はかなり古いことになる。

日本で急激に感染者数が増え始めたのは戦後頃からだと推察されている。

事実、日本では『吸血鬼』に類する伝説は少ない。怪談で語られる妖怪変化の類は多かったが、『血を吸う人間』に関する伝承は極めて少ないことは、日本に感染者は少なかった事を暗に表していた。

そして、名実ともに国際化が始まった時期に増え始めたことは、海外から感染者が流入し、広まったことを意味していた。

「同じ厚生労働省に『麻薬対策課』があるのはご存知かしら？ 国内の麻薬犯罪および海外からの流入を取り締る部署。それと同じように当時のお偉方は分類したのね。まあ、日本らしいといえば日本らしいけど」

「はあ……」

幸人はどことなく力が抜けたように感じていた。『吸血鬼』のイメ

ージが、自分が想像していたものとかなりかけ離れていたからだ。確かに力があり、不老であると言う説明は自分が考えていた『吸血鬼の特徴』と一致していたが、それを除けば映画や小説で語られるような神秘さや幻想的なイメージからは遠い存在であったからだ。それに。

「あ、と言うことは……僕達を襲ってきたのは？」

幸人は思い出した。彼らが言う『吸血症感染者』に符合する存在を。

「そ。あれは間違い無く感染者だな」

「あの動き、スピード、そして有り余る力を手に入れたばかりの感染者特有の傲慢さ。間違い無いわね」

英治に続いて沙羅が補足する。

「英治さん、それに沙羅ちゃん……君達は一体？」

幸人の問いに、冬美は待つてましたとばかりの満足げな表情で説明した。

「彼らは吸血症候群対策課公認のインスペクター。まあ、捜査官と言ったところかしら。ねえん、沙羅ちゃん」

冬美が沙羅に向けて放ったウィンクは、離れてみていた幸人にも分かるほど艶かしげだった。

第二章 隠れた存在 - 5

「……疲れた……」

下がベッドでなければ大怪我するくらい重力に体を任せて幸人は倒れこんだ。

しかし疲れていたのは肉体よりむしろ精神であった。

（吸血鬼、か）

吸血鬼ではなく『吸血症患者』であることを心の中で訂正し直しながら、幸人は数時間前までの出来事を思い起こした。

「インスペクター？」

「そう。といつても、正確には吸血症候群対策課公認の民間人、という位置付けだけだ」

幸人の問いへの回答、というより冬美の説明の補足をするように沙羅が続けた。

「本来なら麻薬捜査課のように正式な職員になるべきものだが……相手の存在を公に出来ない以上、職員から人員を割くことは難しい。それでごく少数の正式職員を除いては、彼らのように捜査に適した民間人に権限を与えている」

課長が葉巻を消しながら説明した。

「捜査に適した？」

「ふふ……まあ、そのうち分かるがね」

捜査に適した民間人、とはどのような民間人を指すのか。その幸人の胸中の疑問を見透かしたのか、あえて局長はそれを軽く流して話を続けた。

「念のため断っておくが、我々の仕事はあくまでも吸血症患者の管理、いや正確には吸血症患者がらみの犯罪の監視と対処、だ。映画のように吸血鬼を見つけては滅ぼす、と言うのではない」

「なぜなら、彼らは『人』であるから」

「……沙羅ちゃん？」

沙羅が呟くように、しかしどこか幸人に言い聞かせるような口調で言った。

「『例え血を吸い、不老の存在であつても彼らは人であり、人権を有する』だつたかしら、五十嵐課長？」

「吸血鬼症候群感染者に対する基本条項……そらんじているとはさすがだな、沙羅くん」

「やゝん、沙羅ちゃんてば顔だけじゃなくて頭もいいからますますカワイイわっ！！」

それこそ二重人格者のようにコロつと声を変える冬美に、慣れない幸人はビクつくばかりだ。

「ほんつと、どこかの変態さんとは大違いね」

「あんだよ、その冷たい視線はっ！？」

「あら英治くん、気のせいじゃないの？ それとも頭だけじゃなく眼も悪くなったのかしら」

「何だと、俺だつて条項くらい言えるっつーんだ。確か続きはだな、『ただし感染による能力で故意に社会の安全と規律を乱すことがあつてはならない』」

いきり立つ英治とは対照的に沙羅が淡々と続ける。

「『この場合は公的に定められた機関およびその機関に所属する者が感染者の捜査・逮捕・懲罰を行うことが出来るものとする』」

「ま、早い話が『悪いことしなけりゃいいーけど、やった時は俺達が黙っちゃいないぜ』つてとこかな」

「じゃ、あの探偵事務所は……」

「ありや隠れみの蓑だ。まあ、探偵課業自体もきちんとやっているけどな。幸人くんが来たように。それに、感染者の情報つかむにも都合がいいからな」

きちんとやっている、というのには疑問を感じる幸人。

「！？ ちょっと待ってください」

幸人の頭の中で点が線で繋がりはじめた。

同時に、考えたくない結論が出来あがった。

「もしかして、その……姉さんは吸血鬼に……」

「なっちまってるかもしれない……最悪の場合は」

「……」

絶句、というものが何なのか、幸人は始めて体験した。

「でも、それは最悪の場合。少なくとも今のところはなさそうね」
「フォローするつもりなのか、冬美が言葉を挟んだ。」

「何でわかる？　っていうか、あんたが何でここにいる」

英治が冬美の言葉に反応する。

「あら、いちや悪い？」

噛みつく英治をさらっと流そうとする冬美。

「とぼけんなよ。確かにあんたも公認のインスペクターだ。ここに来ること自体はだれも文句を言わねえ。でもよ、何で幸人くんがあなたの顔見て驚くんだけ？　始めてじゃなさそうだったぞ」

「あら、盗み聞きだけじゃなくて覗き見までしてたの？」

「ごまかすな」

「幸人さんが最初に行った探偵事務所、冬美さんのところでしょ」
「ふふ、おバカさんは誤魔化せても、沙羅ちゃん誤魔化せないわね」

「俺も誤魔化されてないつつの」

英治を無視して冬美が続ける。

「私も、最初はあるきたりの失踪事件かと思っただわ。でも、調べていくうちに色々普通とは違う点が浮かび上がってね。それで、もしかしたら、と思ってそっちに振ってみたの」

「けっ、それで連絡も無しで俺達に押し付けたのかよ」

「別に悪いことしたつもりは無いけど？　どうせあなたの事務所、万年開店休業でしょう。それに、本当に感染者絡みだったら余計にあなた達向きだと思ったから。どちらに転んでも感謝されこそすれ、恨まれる覚えはないわ」

「ふん」

「……」

幸人も沙羅も何も言い返せなかった。いや、沙羅は言い返さなかった、と言った感じが。

「黙っていた事は謝るわ、幸人さん。でも、それは確証が無かったから。まだお渡ししていない資料も彼らに預けるし、こちらも援助を……幸人さん？」

幸人の眼は完全に上の空であった。

（姉さんが吸血鬼に？）

「幸人さん？」

「あつ、はい？」

再度の呼びかけで現実世界に引き戻された幸人。

「まだなっているとは限らないわ」

「えっ？」

沙羅の言葉は幸人の心中を見透かしているかのようだった。

「すぐに感染者になるわけじゃないから　例えばそう望んだとしても」

睡魔が襲ってきた。

吸血鬼に襲われたかもしれない、と告げられた時の衝撃と同じくらい抗し難い睡魔の波が。

「どういう……？」

沙羅の代わりに五十嵐課長が説明を始めた。

「吸血鬼の噛まれた者は吸血鬼になる、というのがフィクションの世界だが、実際には違う。現実には感染者に血を吸われた者が、一定の期間を経て自分の血を吸った感染者の血を摂取することによって始めて感染する。互いの血を吸って始めて感染すると言うわけだ」「一定の期間？」

「そうだ。まだ調査中ではあるが、感染者が相手の血を取りこむこ

とによって、相手を同じ感染者にするために必要な成分を自分の血液中に造り出すらしい。その成分を生成するには時間がかかる」

「ど、どれくらいの時間が？」

「個体差にもよるが、短い場合は二週間、長いときは一カ月と言う事例がある」

「二週間……」

姉が消えてからもう一週間経つ。とすると、一番悪く見積もって残り一週間。

「大丈夫だって。留守電にメッセージ入ってたろ？ 明日は姉さんに会えるぞ」

「そう……ですね」

英治が励ましの声をかけてくれた。そこまではつきり覚えているが、その後の会話は自分のも、そこにいた他の者も含めてほとんど覚えていなかった。

なぜなら、言いようのない不安を感じていたからだ。

眠い眼と体を何とか動かしながら、ベッド脇のデイバッグからアルバムを取り出した。

数枚めくると、姉と自分が一緒に写った写真が目飛び込んできた。少し苦笑いする幸人を引き寄せて、子供のようにピースサインをしている。満面の笑みを浮かべて。

知らない人が見れば、恋人同士に見えなくも無い。

実際、撮った人も最初はそう勘違いしていた。

明日、姉に会える。

でも、明日会う時、姉は同じように笑っていてくれるのだろうか。あの留守電のメッセージ。あの時の声。

あれは本当に

「ゆーきーとークン」

間延びした声でドアを開けたのは英治だ。

「シーツ、持ってきたぜ。いくら夏だと言っても……?」

ノックもせずに入ってきた英治のシーツを持つ手が止まった。

「なんだ、寝ちまったのか」

ベッドの上で、幸人は眼鏡も外さずに横になって静かな寝息を立てていた。

「……」

少しめくれあがったＴシャツから、脇腹が僅かに覗いている。

「……ふ」

女性のように少し長く、綺麗にそろった睫毛が眼鏡の奥に光っていた。

「……ふふ」

幸人の静かな寝息とは別に、どことなく下品な息遣いが重なる。

「幸人クン、カゼひいちゃうよん」

普通なら起こす時に使う台詞を、英治は起こさないように小さな声で言った。

「ふふ……寝ている姿もまたイイもので」

身の危険に気づかず眠りつづける幸人に、抜き足差し足で近づく英治。

「まずは、おなかを冷やさないようにシャツを戻して……それくらいなら良いよね」

自己弁護の言葉とは反対に、両手の指はやたらくねくねと動かしている。

「ちよつと味見……ん?」

本音を言いかけて緩んだ英治の顔つきが、元に戻った。

「……さん」

幸人が何か寝言を言っていた。

「……姉さん」

「……」

幸人の手には、アルバムから取り出した写真が握られていた。

英治はシーツを幸人に被せると、音を立てないように部屋を出た。

「何してたの？」

「のわっ！？」

部屋を出た英治を沙羅が出迎えた。

「何だ沙羅かよ。びっくりさせんな」

「別に驚かすつもりはなかったけど。それとも、何かやましいことをしていたのかしら」

「あのなあ、俺はシートを届けに……」

「幸人さんの寝顔、どうだった？」

「そりやもう寝顔もまたオツなもので……」

「やっぱり、やましいこと考えていたじゃない」

「あ、あのなあ、俺はまだ何も」

「まだ？　ということは何かする気だったのかしら？」

「ま、待て沙羅、そう怖い顔をするな」

「あら、私はいつもと同じよ」

確かにいつものように無表情だが、それ故に目に見えない怖さかに
じみ出ているのを英治は感じた。それに。

「いつもと同じ、とか言いながらその手に持っているのは何だよ？」

「包丁。見たこと無い？」

「そうじゃなくて、何でそれを振りまわす？」

「夕食当番だから」

「わっ！！」

妙に慣れた手つきでぶらぶら指せていた包丁が英治の足元に落ちた。
というか、遠心力をつけて両足の間の床に突き刺さった。

「あら、ごめんなさい」

「沙羅、てっめゝわざとだろ」

賑やかなやり取りとは無縁に、夢の中に落ちていく幸人は今宵の探
偵事務所で一番の幸せ者だった。

第三章 二人の犠牲者 - 1

「杉本から連絡は？」

「今のところ、まだ」

男性の声と女性の声。

その内容と組み合わせただけであれば、どこかのオフィスを連想させるものがあつた。

事実、会話が交されているのは東京駅に近いガラス張りのビルの最上階。

しかし、その声の主の片方は場違いに近かつた。

実用性よりも寝ることに使われるのではないかと思われる革張りの椅子に座り、オーダーメイドのスーツに身を固めた男は、明らかにこの部屋の主であつた。まだ若さが残る三十代後半の姿を見れば、彼がベンチャー企業の若社長であることは誰もが想像するところであり、事実そうだった。

もう一方、場違いなのは机の向こうで彼の問いに答えた女性だった。革のパンツにジャケット。幾らオフィスのエアコンが効いていてもこの季節に実用性があるとは言えなかつた。茶髪を時折掻きあげると耳もとのピアスが目立つし、ノースリーブの胸元から覗く左側の乳房に英文筆記体のタトゥーが刻まれていた。

Shoot My Heart (私の胸を撃ち抜いて)

どう見てもオフィスレディーには程遠い。

それでいながら、男は当たり前前のように女と会話し、女は当たり前のようにガムをくちやくちや噛んでいた。

「ずいぶんご執心じゃない」

「お前ほどじゃない」

「あら、嬉しいこと言うわね。いつもそうだったら良いのに」

「無駄口叩くな。早く連れ戻せ。そのためにお前にもお前の仲間にもいろいろ援助しているんだ」

「はいはい、日高祥子、がんばりまっす」

おどけて敬礼する祥子を男は無視して話を続けた。

「それと、尾谷はどうした？ 弟の始末は」

「それがあ、弟クンが探偵雇ったとかで鉢合わせたみたいよ。詳しくは知らないけど」

「早めに始末しろ。探偵が深く知る前にやれ。何ならそっちにお前の仲間を割いても構わん」

「はい」

「それからだな」

そこで切り上げて部屋を出ようとする祥子を男が呼びとめた。

「何？」

「いくら裏口からとは言え、その格好で来るな。ここは俺の会社だ」

「いいじゃん、別にあんたのところの社員には見られてないわよ」

「な……」

続きを聞かずに祥子はドアを閉めた。

「何気取ってんのよ。あんただって……」

最後まで言わずに祥子は非常階段に向かった。

「祥子め……」

部屋に残った男は苛立たしげにガラス越しに東京の町並みを眺めた。
（この俺を……桂木慶一をなめてかかりやがる。最初の頃の従順さはどこに言った？）

ほとんど口に出しかけながら、慶一はもう一人の女のことを考えた。

「ま、あいつならうまく操れそうだ……！？」

ガラス窓に映る背後で何かが動いた。ドアを開いて何かが入るのが。ノックも無しに自分の部屋に入る者を、彼は一人しか知らない。

「何だ、まだ言いたいことが……！？」

振り返る前に、彼に何かが風のように忍び寄った。

言葉を上げる前に、背後に回った存在に首を後ろから抱えられた。

社長室に、鈍い音だけが響いた。

第三章 二人の犠牲者 - 2

「電話、繋がった？」

「いえ、それが……」

神奈川県横須賀市、久里浜港。

浦賀水道を通り、千葉県の浜金谷を結ぶ『東京湾フェリー』の発着港として賑わう久里浜港も、あと数分で夜十時を迎える時間となつては閑散としていた。

電話ボックスのすぐ横に止めた車に寄りかかるの英治の問いに、幸人は困惑の表情を浮かべていた。

やっと姉に会える、との思いで自らの車でかつて出た幸人だったが、こつも早く失望に変わるとは思わなかった。

「出ないの？」

車の後方で立っていた沙羅が訊いた。

「いえ、電源が切れているってアナウンスが」

「そうか」

時折通る車のヘッドライトが、彼らを照らして去っていった。

「姉さん……」

「まだ時間はある。もう少し時間が経ってからかけなおそう」

肩を落とす幸人に英治がフォローを入れた。

それは分かっているのだが、その時間さえも彼にはもどかしかった。そして何よりも説明しようのない漠然とした不安が、あせる心をあおっていた。

なぜ、こんな所に呼び出したのだろう。

話しがあるなら戻ってくればいいのに。

背後に何かある、英治も沙羅も同じ意見だった。展示場での一件もある。

「おびき寄せるつもりかもしれない」

英治はそう言っていた。感染者は新たに生み出した同類の親族との

絆を断ち切る事が多いという。法的に人間として定義されていても、不老の身である感染者が普通に存在しつづけるのは難しい。そのため感染者同士が集まって自分達だけの社会を作る傾向が多いという。そして通常の社会から縁を切るために、いや、切らせるために親族を抹殺する

「感染者がらみの犯罪で最も多い事例よ……残念なことに」
補足のような沙羅の言葉が幸人の胸に残っていた。

また一台車が通った。

「!？」

「どうした沙羅？」

最初に気づいたのは沙羅だった。すかさず沙羅が感じた変化に英治が気づいた。

「一瞬だったけど、あいつが」

沙羅の視線の先には港湾区に建てられた倉庫の群れ。昼間ならフォークリフトやトラックが間を行き交うここも、今では月明かりが頼りなく照らすのみだ。

「あいつ、って？」

幸人も眼を凝らしたが、特に人影は見当たらなかった。

「展示場の男。さっき通った車のヘッドライトで一瞬だけど……間違いないわ」

「つつ事はやっぱり畏か」

吸血症感染者であると思われるあの男。あいつがここに。姉と関わりを持つあの男がここに。

あなたは殺すなと言われている

沙羅が昼間に言った言葉がまた浮かんできた。

「そしてもう一つ多い事例が、近親者を仲間に引き入れるパターン。同じ感染者として」

英治も、今回は後者だろう、と苦々しげに付け加えていた。
「行こう」

英治の言葉よりも早く、幸人は倉庫に向かって歩を進めた。

その幸人の右横に沙羅が並んだ。

「焦らないで……気持ちにはわかるけど」

「君に僕の気持ちかわかるのかい？」

口にしてから後悔した。いらだつ気持ちをこの子に当てつけるなんて、と。

「……理解することは出来るわ」

「ごめん」

幸人を挟むように英治が左に並んだ。

「向こうもこっちに気づいているだろうな。罠に気づいていることも。危険だが、君の姉さんの手がかりをつかむためには誘いに乗るしかない」

「はい」

それきり押し黙った三人は倉庫の影に消えていった。

「いないな」

五分ほどしてから英治が沈黙を破った。

見失った、というのが客観的な表現だろう。だが

「誘うにしては少し動きがおかしい」

「ええ。こちらに気づいてないみたい」

「どういう……」

「静かに」

幸人の問いを英治が制止した。

「この音……」

沙羅が次に気がついた。

幸人も耳を澄ますが、何も聞こえない。

「こっちだ」

英治が向かう方向に残る二人もついていく。

その先には月明かりにもそびえる薄汚れた倉庫。倉庫の通用口に英治が耳を当てた。

「……携帯の着信音」

「えっ？」

幸人も耳を押し当てた。

程なく、微かだが確実に電子音がドアの向こうから聞こえた。

「まさか……」

何の変哲も無い標準の着信音。恐らく日本全国の何万と言うユーザも同じ着信音を使用しているはず。だが、それは同時に姉の携帯の着信音とも一致していた。

「俺が先に入る。合図をしたら後に続いて。絶対俺より先に行くな」
わかった、とうなずく幸人に冗談のつもりかりラックスさせるつもりかウイंकを送ってノブに手をかける英治。

始めに軽く触れ、そして廻す。

鍵がかかっていない。

ドアを九十度で開けたまま中に入る。沙羅がガイドするように軽く幸人の右肘をとる。

ドアの向こうは薄暗い廊下が続いていた。数メートル先の角で英治が首をかしげて後に続くように合図をする。それと同時に沙羅が幸人を促して入り、後ろ手にドアを音も無く閉める。

先に進むにしたがって、電子音が大きくなる。

間違い無い、近づいている。姉の元へ。

突き当たりに開け放たれたドアが見えた。その奥がぼんやりと緑色に光っている。

電子音が止んだ。

「姉さん？」

思わず駆け出して部屋に入ろうとする幸人を、入り口脇にいた英治が制止した。

なんとか踏みとどまった幸人だが、心は部屋に入っていた。

「こいつは……」

英治が視線を部屋中に巡らす。薄闇の中に点る緑色の小さな光。それが携帯のバックライトだと幸人も気がついた瞬間、微かな灯火は消えた。

同時に、英治が中に入って左手を動かした。
壁に這わせた左手が目標のものを探し当てた。

「ぱちん、と音が鳴り、一呼吸おいてから青白い光が天井に明滅した。
まぶしさに眼を細める幸人。」

視力が戻った時、英治は部屋の中央で肩膝をついていた。

「これ、姉さんのだろ？」

英治が背中越しに携帯を手にとって見せた。

「あ！？」

駆け寄って引つ手繰るように手に取る幸人。

一世代前の携帯電話に、ストラップがぶら下がっていた
小さなブロックがついた。 六つの

MIYUKI

ローマ字でブロックに彫られた文字。

姉の名前。

「姉さん……」

「ここにはいないみたいね」

沙羅が膝をついたままの英治の傍らに立つ。

床を見下ろした彼女の視線の先にそれはあった。

「！？」

初めてそれに気がついた。そして見るのも初めてのもの。

「そ……の人」

「死んでいる」

三十代くらいだろうか、男が眼を見開いたままで息絶えていた。両
手は宙をつかんだ姿勢で硬直している。

「見覚えは？」

「いえ……全然」

そら恐ろしいほど無表情で尋ねる沙羅に、幸人は姉の携帯を握り締
めて答えた。

「姉さんは……どこに？」

「わからねえ。だが、こいつが何か関係していることは間違い無い」

英治がズボンの裾からナイフを取り出した。展示場で取り出した、あの禍禍しいデザインのナイフ。

「そして、こいつは」

ナイフの先端で軽く死体の頬をつつく。

「え!？」

幸人は眼を疑った。軽く振れた個所からまるで古い石膏像のようにヒビが広がり、砂とも煙ともつかぬ細かい粒子となって崩れ始めた。「感染者だ」

その言葉が終わらぬうちに、人の形をしていたそれは原型を失い、服だけを残して塵の山と化した。

「あ……」

「感染者が死ぬところなる」

「……」

沈黙する三人の間で、中身を失った衣服がずれる音が妙に響いた。

「ちっ……手がかりは無し、か」

「……そうでも無いみたいよ」

沙羅が入り口を振り返った。

そこには、展示場で襲ってきた男が立っていた。

第三章 二人の犠牲者 - 3

「杉本！？」

三人を確認して醜く歪んだ目が、床の衣服の塊を見てかつと見開かれた。

展示場で襲ってきた男。感染者の男。

「探したぜ、もう一つの手がかり」

「ふざけるな、ガキがつ！！」

大股で男が歩み寄る。

「てめえら、杉本をばらしやがったな」

「違う」

英治が前に出ると同時に、沙羅が幸人をかばうように無言で前に出た。

「でなけりや、なぜあいつを追っていた杉本が死んでるんだ？ それにその携帯……美由紀はどこだ？ どこに逃がした？」

「知らねえな。それより、携帯を鳴らしたのはお前か？」

「ああん？ 何わけのわからねえ事抜かしやがる。確かに携帯の音がしたから来てみたがなあ」

「ふゝん。じゃ誰だ？」

英治が大げさに腕を組んで首をかしげる。

「俺をコケにするのも大概にしるよ、人間風情が」

「ほー」

英治が腕を解いた。口調はふざけているようであったが、その眼は厳しかった。男の台詞の最後を耳にしてから。

「俺ら無敵のヴァンパイアに刃向かうとはなあ……この前の一緒にして兆倍で返してやらああつ！！」

男の語尾が妙に伸びた。それが高速移動で英治に寄った際の風圧が影響したものだとな誰か信じるだろうか。

相手が感染者であることを知らなければ。

男が突きを三発、蹴りを二回繰り出す。一秒かからずに三回目の蹴りを繰り出したが、それを英治はバックステップと半身を併用して躲す。

「ひひ」

嫌らしい笑いを残して英治の懷に飛び込む。

「!？」

「逃げるんじゃないよお」

退こうとした右足が動かない。男が踏み出した左足のかかと踵で英治の右脚のかかとに引っ掛けるようにして固定していた。

「ぐっ」

鈍い音がした。至近距離から胸板へ掌底打ち。肘が伸び切らないほどの至近距離であったために威力は半減されているのだが、コンクリートを素手で打ち破る力には関係無かった。

それでも意識を失わないでいる英治に内心驚きながらも、男は右肘と右膝を同時に繰り出した。

「どたま叩き割ってやらあッ!!」

肘と膝で頭を挟み潰す。誇張ではなく、感染者の力を持つてすればそれが現実になる。

だが英治は自らバランスを崩して背中から倒れこみ、後転して難を逃れる。

膝立ちになった英治の背中が硬い物に当たった。剥き出しのコンクリート壁だ。

「やるじゃねえか、人間にしちゃあ、ええ？」

「ふん、感染者が何を意気がつてやがる？ 神様にでもなったつもりか？」

「感染者……だと？ そうか」

男の笑いが引きつったものになった。

「俺達、吸血鬼様を病人呼ばわりするお役所の飼い犬があるって聞いたな……お前らがそうか」

男が口の端を吊り上げた。そこに、異様に伸びた犬歯が光る。

「へへ……二度と俺達に手を出さんよう、見せしめに潰しておくか」
血を吸う鬼。

目の前の現実、感染者などという言い訳は幻想であることを幸人は感じた。

「来い」

英治がナイフを逆手に構える。

刺し違える気が

風が唸った。

その風圧に、いや雰囲気になえ兼ねて幸人は一瞬の瞬きを許した。
そして。

「……ひひひ、かすただけでも大したモンだ」

「……」

静かだった。瞬きする前とたった二つしか違っていなかった。

男と英治の位置が入れ替わっていた 互いに背中を向ける形で。

互いの距離もほぼ同じであった。

そしてもう一つ。互いの右頬に水平に血線が浮かび上がっていた。

「だがよお、そんなナマクラで幾ら切られても……!？」

男が頬に走った血を手を取った。その途端、男の台詞が凍りついた。
「な……」

「どうした、おっさん？ 続き言つてやろうか？」

英治が振り向いた。ナイフの銀光が軌跡を描いた。

「『幾ら切られても、俺達吸血鬼にや効かねえ。あつという間に傷なんてふさがつちまう』ってとこか？」

「こ、いつは……」

始めて喧嘩して血が出た時の中坊のように手が震えていた。

「あんたつくづく頭悪いいな。仲間を殺した、とか言いながら、その相手が感染者の弱点知らないわけねえじゃん……ま、杉本っておさんやったのは俺達じゃないけどな」

「そのナイフは……!？」

「そう。あんた達吸血鬼様が唯一かつ絶対的に苦手な『銀』ででき

てまゝす」

「英治の勝ちね」

「え？」

静観していた、というか静観できるのかという驚きもあったが、幸人は沙羅の言葉に耳を傾けた。

「人間以上の存在になったと思いこむ感染者の傲慢さに揺さぶりをかけて、本来持っている能力を発揮できなくする。見てて、相手の動きを」

「お、俺は……」

引き付けを起こしそうなくらい乱れた息の隙間から言葉を吐き出す男。

「俺は、無敵の吸血鬼だあつー!!」

男が英治に突進を始めた。が、勢いこそあるものの、開始から英治の間に合いに入るまでの動きが幸人にも追えた。

男が手を振り回した。突き、というような綺麗なものではなかった。まるで駄々をこねる子供のように闇雲に手と脚を振りまわしている。「心技体……全てがバランスを失っている。子供が木刀振り回すようなものね。落着いて見れば幸人さんにもよけるんじゃない？」別に相手をしたいと思うわけじゃなかったが、確かに言われる通りだった。

実際、相手をしている英治は妙にニヤニヤしながらのらりくらりと躲けている。それこそ、鼻歌でも出そうな感じで。

「がんばったね、老け顔の感染者。お礼に名誉の傷をいくつか進呈しよう」

英治が右手を振った。その動きは見えず、代わりに楯円の軌跡を描く銀光が二回。

「ぐっ」

男は後方にステップして躲した。いや、躲したつもりだった。

「な……?」

確かに間合いから離れたはずなのに、彼のシャツの胸元は十字に切

り裂かれ、同じ形でうつすらと血が滲み出した。

「俺が別名、何て呼ばれてるか知ってるか？」

英治がナイフを持った右手をゆらりゆらりと漂わせた。銀光が怪しく軌跡を描く。

「あ、知ってる奴、少ねえかもな。名乗ったその日に塵になってんもんな」

動きを止めた。逆手のナイフの柄を、左の掌で軽く抑える。

切っ先が斜め下を向く。

刀身に、自分の眼が映っているのを男は見た 恐怖に満ちた。

「じゃあ自称、といこう……自称『銀の刃』シルバー・エッジ」

銀光が半月を描いた。

「ひいいつ」

両手で頭を抱えて転げる男。

しかし、その必要など全く無かった。始めから英治は切っ先の届かない範囲で振りまわしていただけだった。

「何だよ、おもしろくねえ」

やられる。

お、俺は無敵の吸血鬼だぞ。こんな所でやられてたまるか。な、なんとか逃げるんだ。逃げさえすりゃ……

「！？」

逃げ道を確保しようと視線が室内をさまよい、一点に集中した。

「どうした、おっさん？」

英治が変化に気がついた 男の口に浮かんだ笑みを。

「ひひひ……こんな所にガキなんざあ連れてくるとはなあっ！！」

その言葉の意味に気づいた幸人が、沙羅の前に立ちはだかった。

「逃げっ！？」

瞬間、幸人は衝撃と共に弾き跳ばされた。

「……沙羅ちゃん！？」

「動くな」

起き上がろうとした幸人の視界に、予想していたことの結果が映っ

ていた。

男が羽交い締めにするように沙羅の後ろから首に手を廻していた。余った左手を頭にかけて。

「こいつは人質だ。このカワイイお嬢さんの首をねじ切られなくなかったらそこをどきな」

形成逆転、俺の勝ちだ。

だが。

「ちっ、またおいしいところ沙羅にとられちゃいそうだな」

英治は頭を掻きながらばやいた。

「なっ」「えっ」

男と幸人が同時に声を上げた。

「ふん、どうせ楽するつもりだったんでしょ」

男の腕の下から声がした。微塵の恐怖を感じていない、いや感情さえない声を。

一呼吸あった。

次の瞬間、男は逆さになった沙羅の顔を見た。自分が宙を飛ばされたと分かったのはそれよりも後だった。

「う……ぐ？」

男もそうだが、傍らで見ていた幸人にも信じられなかった。

沙羅がほんの少し姿勢を低くして体を揺さぶった。たったそれだけなのに男の体は人形のように宙を舞ったのだ。

それが『合気』の技であることなど、幸人は知らなかった。いや、幸人よりも合気に関する知識がある男の方が驚きは大きかった。

何なんだこのガキ？

「降参か？」

「！？」

背後の英治の声に飛び起きる男。そして判断力の狂った男は雄たけびを上げて再度、沙羅に突進した。

ま、まぐれだ。偶然だ。あんなガキが合気の技なんて

「沙羅ちゃん！！」

幸人に一瞬視線を合わせた沙羅。そして。

幸人は見た。

沙羅が、右手を後ろ手に廻し、見事なボリウムを見せる黒髪に指し入れた。

白い右手が流れるように黒髪からコントラストを成して現れた。

もう一つの『黒』と共に。

ゆっくりと、そして確実に『それ』を男に向け、左手も添える。

嘘……？

それは沙羅の手にしたモノへの感想か、それともその美しくもこの世の出来事とは思えない一連の動作に対してか。

コルトパイソン357マグナム・6インチモデル。

黒光りする『それ』の正式名称を知らないまでも、それが日本で目にしようとは思わなかったりボルバーの拳銃であることだけは分かった。

男の目にもそれが映った。

が、それが現実であるという認識はもはや無かった。

軽く添えられた指が動いた。

轟音一発。

「!？」

男の右腕に黒点が浮かんだ。

続けて二発。

「あ……あ？」

両腿に黒点を穿たれ、始めて男は現実に戻った。

そして、現実の痛みも。

途端に思い出したように男はつまずき、もんどり打って倒れた。そして絶叫。

「い、痛てえ、痛てえよお、脚が、脚があつ」

子供のように転げまわり痛さを訴える男。

「まだ元気なようね」

冷たい声が男の頭上でした。

涙と鼻水にまみれた顔に、銃口が突きつけられた。

「ひっ、た、助けてっ」

「私、騒がしい人って嫌いな」

「沙羅ちゃん!!」

細く白い指が引き金を絞ろうとするのを、幸人は最後まで見ることが出来なかった。

「…………え？」

かちん、と音がした。が、それ以上は無かった。

「気を失ったみたいね」

既に拳銃の姿は見えなかった。おそらく、黒髪の中だ。

「あいかわらず怖いねえ、沙羅さんは」

英治のふざけた口調には応えず、代わりに幸人に向き直った。

「銀の弾丸って高いから。無駄撃ちしたくないしね。弾倉を一つ戻して空薬莢を叩くようにしたの」

それは言い訳なのか説明なのか。

「で、どうするんだ、こいつ」

「決まってるでしょう。貴重な情報源」

「だとさ」

「へ？」

「というわけだ、幸人くん。お帰りは一名追加だ」

第三章 二人の犠牲者 - 4

夜が明けた。

暁の前に事務所に戻った三人＋一人が仮眠をとるにはちょうど良い時間だった。

が、幸人の疲労を取り除くには充分とは言えなかった。

特に精神的には。

知識としては説明されていたとはいえ、感染者の能力を目の当たりに、そしてそれを超える力と技を持つ二人のインスペクター。

だが、それ以上に姉の消息が知れないことが一番ダメージが強かった。

早く姉の行方を知りたい　はやる気持ちを表面上では抑えていたが、それが余計に疲労を蓄積させた。

事務所で宛がわれた部屋に入った途端、睡魔が襲い……目が覚めたのは昼前だった。

時間を無駄にしたと、自分の不覚を呪いながら二人がいる事務室兼応接室に向かう。

「おはよう」

「よ、眠れたか？」

「あの男の人は？」

挨拶もそこそこに、幸人は現状で最大の情報源の所在を訊いた。

「地下だ」

「地下？」

「そ。ま、コーヒーでも飲みな」

英治は机の上の財布や免許証、時計などに視線を走らせながら片手にコーヒーを飲んでいた。おそらく、あの男の所持品を調べているのである。

対して沙羅はブラインド越しに窓の外を眺めていた。

「そんな、のんきな……」

「焦るなよ。せ急いては事を仕損ずる、ってな」

「でも……」

こうしている間にも、姉は感染者に刻一刻と近づいているというのに。

「尾谷健也」

「え？」

沙羅が背中越しに一つの名前をあげた。

「あの男の名前」

「ああ。持ってた免許証から分かった。偽造かと思ったが、そうじゃない」

「午前中、調べられる事は調べておいたわ」

「あ、はい」

「他の情報も五十嵐のおっちゃんに送ってる。冬美さんも全面的にバックアップしてくれるらしい」

「あ、あの厚生労働省の……」

自分が情けなかった。焦るばかりで自分は何も役に立っていない。

「昨日はお疲れ様。車を出してくれて」

「い、いやこちらこそ」

幸人の心中を察したのか、沙羅の言葉は無表情の中にもどこことなく柔らかかった。

「さて」

沙羅が今日初めて幸人に向いた。

「そろそろ本題に入りましょうか。お姉さんの居所」

「え、もう分かったの？」

「いえ」

肩を落とす幸人。

「でも……後三十分で分かるわ」

「え、何で三十分って？」

「今から私が聞いてみるから……尾谷に」

沙羅が当たり前のように言った。

でも、あの尾谷って半分チンピラみたいなのがそう簡単に口を割るとは……

「沙羅……俺が行かなくて良いのか？」

英治がカップを置いた。妙にまじめな声だ。

「出来るだけ早く聞き出したほうがいいでしょう？」

「ま、そうだな」

英治はそこで諦めたように息をついた。

「それじゃ、行って来るから。英治、幸人さんに昼食を」

「……ああ」

沙羅はにこりともせず事務所のドアを開けた。

「……英治さん」

「何だい？」

取り残された感の二人。

「その……沙羅ちゃん一人で大丈夫なんですか？」

「心配ねえよ。尾谷は身動きできないように縛ってある」

「でも、相手がそう簡単に……」

「口を割るかって？ まあ簡単には割らんだろうな」

「じゃ……」

「沙羅以外なら」

「え？」

「久しぶりだ……沙羅のあんなマジな顔見るのは」

幸人にはいつもと同じように無表情にしか見えなかったが。

「鳥肌が立つくらいだ」

英治の言葉には微塵の冗談も含まれていなかった。

階段下の倉庫。

確かに倉庫には違いなかったが、その奥の床に大きな上げ蓋があった。

後ろ手に倉庫のドアを閉めると、沙羅は上げ蓋の取っ手を引いた。

湿った空気が溢れ出す。

それこそ夏の風物詩、心霊スポットと化した廃病院の死体置場へ続くような階段を、沙羅は臆した様子も無く降りていく。

ちょうど十三段で階段は終わり、目の前に鉄製の扉が立ちはだかつていた。

それが外に音が漏れるのを防ぐために特別に造られた防音扉であるのを知るのは彼女と英治のみ。

無言で扉を開いた。それとは対照的に重いさび付いた音を立てて扉が内側から開く。

「……何だ、飯かい嬢ちゃん」

それは感染者　尾谷の声だった。

部屋の真中で、尾谷はスチール製の椅子に縛り付けられていた。また音を立てて扉が閉じた。

十畳ほどの部屋。剥き出しのコンクリート壁は真っ白でしみ一つ無い。部屋の片隅にロッカー、天井には換気口。そして妙に青白い蛍光灯が何のための部屋かを連想させた。

そして、尾谷の前にはスチール製のテーブル。

机の上に白熱灯があれば、まんま刑事ドラマの取調室だ。

「ちっ、飯じゃねえみたいだな」

手ぶらで入ってきた沙羅に、子供ならそれだけで漏らしそうな鋭い視線を送る。

「嬢ちゃんよ、これとつてくれねえか？　とつてくれたら嬢ちゃんだけは助けてやるぜ」

昨夜、沙羅の向けた銃口の下で涙と鼻水を垂らしていたことは記憶に無いのか、尾谷は体を縛り付ける極太の鎖をガチャガチャ言わせて脅しにかかった。

「おい、聞いてんのかよつ、ああっ！？」

無言のままでロッカーに向かう沙羅に、無視されたと思ったのかさらに鎖をガチャガチャ鳴らして罵声を浴びせる。

それでも沙羅は無視してロッカーから工具箱らしき物と、白い布切

れを一塊りを取り出してテーブルの上に置いた。

「何だよ……これ」

「あなた、おなか空いてるの？」

初めて口を開いたが、尾谷の問いに答える内容では無かった。

「そうだよ、聞いてなかったのか？ 飯だよ飯」

「今、どっちが欲しいの？」

「あん？」

「血？ それとも普通の食事？」

「飯に決まってるだろ、このガキ。血なんて力をつける時に飲むだけだ」

「そう。そして哀れな犠牲者を増やす時」

「俺は遊んでいる暇ねえんだよ、何訳わからない事言っただやがる？」

「普段は人と同じ扱いを求め、そして都合の良い時だけ血を貪る。」

吸血鬼様が聞いて呆れるわね」

「はあ？」

さすがに尾谷も困惑するしかなかった。沙羅の言葉の意味など、最初から考えるつもりも無かったが、ここまで来ると理解する気など起こらず『おかしいんじゃないか、このガキ？』としか考える余裕が脳細胞には無かった。

「……さて、本題に入るわね。幸人さんのお姉さんはどこ？」

「？」

バカのようにきょとんとしていた尾谷の顔が、徐々に歪んで含み笑いを起こし、ついには堪えきれなくなつて体全体で声と音を立てて笑った。

「……ひ、ひひひっ……何かと思えば結局それかよ。それも、こんなガキ一人よこして俺の口を割ろうとはなあ……ひゃあはっはっ、腹がいてえぜ」

「……」

笑い転げる まあ、椅子に縛られているので本当には転がらないが 尾谷を横目で見ながら、沙羅はテーブルに置いたものを広げ

始めた。

最初に工具箱を開けた。そこには予想通りのものではなく、型抜きされたウレタンを緩衝材にして透明なガラス製の器具や液体の入ったビンなどが納まっていた。

そして、純白の布を広げると、沙羅はそれについている紐で体に装着し始めた。

最後に残った小さな布を口に当てた。

「くくく……今度は医者さんごっこか、お嬢ちゃん？」

下卑た笑いが混じっているが、尾谷の表現は正しかった。

沙羅はご丁寧に白衣とマスクをつけて尾谷に向き直った。もともと、沙羅の背格好を考えると小学生の給食当番に近いのだが。

「まあ、そんなところかしら」

意外に沙羅が肯定の返事をした。そのうえ、箱からは注射器を取り出して。

「なんだなんだ、まさか自白剤ってわけじゃねえだろうな？」

「その通りよ。どう、話す気になった？」

それを聞いて今度は涙さえ浮かべて笑い転げた。

「ひやはひやははっ……本当に甘いな、嬢ちゃん？ それとも上の奴らにそうやって脅せって言われたのか？ 言つとくがな、俺達吸血鬼は傷だけじゃなく毒だって体内で中和できるんだ。自白剤だつて同じだ。んなモンで口を割ろうって土台無理なんだよっ!!」

「そう……」

その言葉をどう捉えたのか、尾谷は含み笑いを続けた。

「ねえ、あなた達吸血鬼の弱点は？」

含み笑いが消えたタイミングで沙羅が訊いた。

「あん？」

「確か……銀、だったわね」

「だ、だからどうした？」

尾谷の額にうつすらと汗が浮かび始めた。

「ま、まさか銀で切り刻む気じゃあるめえな？」

尾谷は今更になって昨夜の記憶を呼び戻した。

「いいえ。そんな野蛮なことはしないわ」

そう言いながら、沙羅は注射器に銀色の液体を詰め始めた。

「う……そ、それ……もしかして銀……？」

動けないのは充分承知しているにも関わらず、尾谷はなんとか後退しようと脚をばたばたさせた。

「残念」

沙羅が向き直った。マスクをしているため、余計に表情は見えない。見えない分、恐怖が増した。

「銀の融点は約九百六十。常温では固体よ。これは水銀。常温でただ一つ液体の元素」

教科書の解説のように淡々と続ける。

「や、やめ……そんなの、し、死にまう……」

昨夜、銃口を向けられた時のように、いやそれ以上に顔中を涙と鼻水で濡らして懇願する。

「大丈夫。元素が違うもの。即死はしないわ。銀ならすぐにあなたの細胞が石化してその活動を止める。でも、水銀は似て非なるもの。銀ほどじゃないけれど、あなた達吸血鬼、いいえ、吸血症患者の細胞を蝕む」

沙羅がゆっくりと歩み寄る。

「でも、さすがは感染者、といったところかしら。蝕まれても死には至らない……肉体的には。でも、神経は同じように蝕まれるから苦痛だけは人並みに、いいえ、それ以上に脳まで伝達される。そちらの方がつらいかしらね」

「あ……あ……」

「それと、私が白衣でいるのは伊達じゃないわよ。この前試したら全身から血が吹き出したの。それも全身の毛穴から。返り血浴びて大変だったわ。だから白衣なの。わかる？」

妙に優しい沙羅の口調。

「……っ……ひっ……」

もはや尾谷の声は呼吸音でしかなかった。
「さあ、お注射の時間ですよ、患者さん」
針の先端から銀色の液体が飛び出した。
尾谷の絶叫は、分厚い鉄の扉に阻まれた。

第四章 ハンティング&サーチング - 1

何てこった。

俺は杭撃ち銃についたゲージでガス圧を確認した。

充分だ。今のところは。

やっぱ、日本はサムライの国か？ 拳銃もろくに持ちこめねえ。カタナで叩けって言うのかよ。

まあ、それでも無理やりバラして何挺か持ちこんだがな。

それに、止めのこれがありやヴァンパイア退治は何とかできる。

しかし、これだけってのはちょっとやばいかもな。

「おい、カーツ、今どこだ？」

イヤホンマイクに向かって叫んでみたが、応答が無い。

「カーツ。お……」

「聞こえてるぜ、ジャン」

「おう、生きていたか」

へへ、そう来なくちゃな。俺が把握した限りでも三人もおっち死んじまいやがったからな。慣れない国とは言え、残った俺達だけでも何とかしねえとメンツがたたねえ。

俺は周囲を警戒した。周りにはシートを被せた建築資材や、造りかけのよくわからねえ建物が並んでやがる。これなら隠れる場所にいと欠かねえ。

確か、途中で放棄されたテーマパークだか何だかと言ってたな。

「おい、どうしたジャン」

「おっと、すまねえ」

ほんの一瞬だと思ったが、結構間が開いちまったようだ。

「ジャン、今どこだ？」

「ちょうど敷地のド真中、妙に細長いタワーの近くだ。そっちは？」

「じゃ、入り口を六時にして、あんたから四時の方向だ」

「他の仲間は？」

「分らん、応答がねえ」

畜生、もしかして俺達二人だけか？

「武器は？」

「それだけは安心しな。イングラムもショットガンもある。弾もばつちしょ」

けっ、それはお前が応戦してないって事じゃねえのか？

「ようし、一旦退くぞ。俺が通りの真中に出て奴をおびき寄せる。

奴の姿が見えたら弾をありったけぶち込め」

「ラジャー了解……ハンターに栄光あれ」

「ああ、ハンターに栄光あれ」

そうだ、俺達はヴァンパイア・ハンター。こんな極東の島国で死んでたまるか。前金はたんまりもらっている。全額欲しいところだが、こんなところで朽ちるよりマシだ。

「行くぞ」

俺は杭撃ち銃を手に通りに踊り出た。おそらくメインロード。このまま行けば出口まで一直線。ヴァンパイアにすぐに気づかれるが、それが狙いだ。

へへ、来いよ、ヴァンパイア……いや、さっきチラッと見たシルエツトからすると女吸血鬼か？

まだか？ もう二十歩も歩いたぜ。

「カーツ、奴は？」

「……見あたらねえ」

よく探せよ。うまく行きや俺がコイツで心臓一刺しして終りだ。そうすりゃ残りの賞金だって山分けなんだ。

入り口のアーチが見えた。残り十フィート。

五フィート。

四フィート。

三フィート。

アーチが俺の頭上にそびえたつ。

ちっ、食いついてこなかったか。それとも逃げたか？

「おい、カーツ、退却だ。奴さん、逃げたようだ」

「……」

「おい、カーツ？」

雑音だけが空しく耳に響く。

まさか。

「！？」

上か？

アーチの上から何か落ちてくる！！

俺はとつさに躲してそれに銃口を向けた。

「何！？」

人型をしたそれは、空中で体制を立て直すかと思いきや、おもいきり地面とキスしやがった。

「！？ カーツ！！」

ボディアーマーの前後が逆だ。首をへし折られている？

「そう、これであなた一人よ」

「！？」

ジャップの吸血鬼のくせに、バカ丁寧に英語でしゃべりくさって。

「どこだ！？」

「ふふふ……」

しかもパーク内に設置されたスピーカーを通してやがる。くそつ、これじゃどこにいるのか……

奴が来るとすればどこだ？

後ろか？

前か？

物陰からか？

銃口を全ての方向に向けるが、動くモノは何もない。

「まさか？」

俺は上を向いた。

畜生、気づくのが遅かった！！

頂点に達した太陽を背に、そいつがアーチの上から降って来た。

「ち……くしょ……」

馬乗りで奴は俺を押さえ込んだ。逆光で顔が見えないくせに、犬歯だけ目立って光ってやがる。

「さあ、お遊びは終りよ……勇敢なハンターさん」

こうなったら……

「!？」

逆光でも表情が変わったのが分かった。形成逆転だ。

「へへ……悪魔め……」

くく、形成逆転だ。最後に勝つのはハンターだと決まってるんだよ。どうだい、女吸血鬼？ 至近距離で十字架を突きつけられちゃ手も脚も出まい？

俺は首に下げた十字架の鎖を引き千切って、さらに奴に近づけた。

「何のつもり？」

「なっ!？」

奴は十字架を素手で掴むと、片手で握りつぶしやがった!？

「な……ぜ？」

「さすがは西洋の吸血鬼ハンター。用意が良いわね。でも、十字架を恐れるのは西洋の吸血鬼だけ。なぜなら、彼らは元の信仰の教えに背いた事に、心の奥底で罪悪感を感じる。禁忌とされる吸血行為をね。その教えが遺伝子にまで染み込んでいるから無意識に十字架を恐れるだけ。でも……」

「ぐ……」

く、首が……息が……

「その下地がない東洋人には無理よ。それに」

かすむ俺の視界に、握りつぶされた十字架が放られるのが映った。

「どうせ突きつけるなら純銀の十字架にしなさい。安物のメッキ品じゃなくてね。本物なら、私にも効いたかも」

静かな園内に、骨の折れる鈍い音だけが流れた。

第四章 ハンティング&サーチング - 2

「あ、沙羅ちゃん、お帰り」

「……ただいま」

部屋を出ていたとは言え同じ敷地内の地下にいたのだし、しかも予告どおり三十分しか席を外していないのだから『お帰り』も何もないのだが、幸人にはそれ以外に言葉が思いつかなかった。

「沙羅ちゃん、その……」

「何？」

「大丈夫？ その……あんな怖そうな人相手に」

一瞬間が空いた。

「あら、心配してくれたの。優しいわね。大丈夫、彼、非常に協力的だったから」

「そ、そう」

もし地下でのやり取りを見れば大丈夫じゃないのは幸人の方だっただろう。

「それより、有力な情報がつかめたわよ」

「え！？ ほ、本当かい？」

幸人の顔が明るくなった。やはり、一番聞きたい事はそっちだったからだ。

「ええ。奴らが出入りしている場所、判明したわ。準備をしてすぐにでも……英治は？」

そうだった。一番騒がしいこの事務所の主がいなかった。

「それが、ちょっと前に電話が入って……」

そこまで言うてから幸人は身震いした。ついさっきまで自分の身に降りかかろうとしていた危険を思い出したからだ。

三十分前。

「英治さん？」

そう、あの騒がしい英治がさっきから押し黙っている。『鳥肌が立つくらいだ』と言った後から、椅子に座り机に背を向けた格好で微動だにしない。

心配になって近づいた。

「え？」

よく見ると、英治は椅子の上で両手で体を引き寄せるようにして震えている。後姿にもそれがわかった。

そういえば、幸人は彼や沙羅、そして二人の関係について詳しく知らない。アシスタントだ、と英治は沙羅のことを言っていたが、本当にそれだけのだろうか。第一、本物の銃を持っている子供がこの日本のどこにいる？ 沙羅のあの大人びた口調や態度も、真剣になった（らしい）沙羅に怯えるのも、何かただならぬ過去があるのでは。いや、そもそも、厚生労働省公認のインスペクター、それも吸血鬼の、というところからして謎だ。

一度きちんと訊いておかないと、と幸人は思った。

「英治さん、その、大丈夫ですか」

「……ふ」

「英治さん」

「……ふふ、ぐふふふ」

「え、英治さん？」

肩の震えが、笑いで上下するのが分かった。

「……今なら邪魔が入らない」

「……え？」

邪魔……とは沙羅のことか。

沙羅の言葉が脳裏に浮かんた。

英治と二人きりにならないようにね。

「あ、あの、ちょっと……？」

「ふふふ……沙羅も甘いよね。たかが三十分、されど三十分」

「ひ？」

英治が立ちあがって振りかえった。

正直言つて、スポーツインストラクターでもやれば女性の利用者が
ごった返しそうなほどの美形。スポーツマン系の。

でも、今は眼だけが違っていた。まるで獲物を狙う獣のように鋭く、
そして期待で笑っている。

やばい、やばすぎる。

身の危険を今こそ最大限に感じて逃げようとする幸人の肩に手がか
かる。

「どうした幸人くん」

「い、いえその」

軽く抑えているように見えて万力で固定されているように動きが取
れない。

「なに、ちょこっと深いコミュニケーションを図ろうとしている
だけさ」

女性向け十八禁コミックに出てきそうな遠まわしの台詞が、余計に
恐怖をあおる。

（さ、沙羅ちゃん）

助け舟は別のところから現れた。

「ん？」

（で、電話……？）

机の上の電話が早く取れとせかすように電子音で訴える。その音が
幸人には頼もしくも思えた。

「あ、あの英治さん、電話ですよ」

「ちっ……もうちょいだったのに」

（た、助かった……）

「はい、こちら黒崎探偵事務所」

平静を装っているが、やはりどこことなく苛立ちが見え隠れする。

『あら、沙羅ちゃんじゃないの』

「何だ冬美さんかよ。せつかくいいところだったのに」

『ご挨拶ね。こっちこそ沙羅ちゃんが出てくれると思ってドキドキ
してたのに。今日最初の電話があなただなんてサイテー』

「うつせ、用事ないんなら切るぞ」

『あるに決まってるでしょ……例の件よ』

「そっか」

英治は受話器を持ちなおし、耳にしっかりと当てた。ここまでは受話器の向こうの声が幸人にも聞こえていたが、その後は英治も『そうか』『わかった』を繰り返すだけで内容は分からなかった。

「で、出かけたわけ」

「うん」

幸人は簡単に説明した。英治が迫ってきた事は言わなかったが。

「仕方ないわね。帰ってくるまで待ちましょう……どうしたの？」

幸人が浮かべた不思議そうな顔に沙羅は気づいた。

「う、ううん、なんでも無い」

そういつて首を振る幸人。

（どこに行ったかとか訊かないのかな……まあ、行き先は言わなかったけど）

第四章 ハンティング&サーチング - 3

「いいんですかい？」

「何が？」

昼過ぎでも満席のファミレスの一角、妙にごつい男達五人と女一人のグループ。訊いたのは男で応えたのは女。

ファミレスとは不思議な場所だ。二十四時間年中無休という特殊な、そして多様化した現代では必要不可欠とも言っている場所に、それこそ多種多様な人間がテーブルについて食事をし、話を弾ませる。

そう、家庭では家族の人間がばらばらに食事をし、例えば時間が合ってもテレビだけが雑多な情報を流し、それに見入るだけのご時世に「尾谷の事っすよ」

別の男が訊いた。先の男は横にごついが、こいつは筋肉質で本当の意味でごつい。そんな多種多様なごつい男達は、示し合わせたように革のベストをTシャツの上に着こんでいる。そう、いかにもイージーライダーを気取ったような出で立ちで。

「気に食わないの？」

それに応える女も同じように革のベストを羽織っているが、こちらはごついというより色香が漂っていた。ノーススリーブのはだけた胸元がそう感じさせるのかも知れないが。その上、豊満な胸には英文字のタトゥー。

Shoot My Heart

日高祥子だ。

「いや、ま、姉御のやることに文句はねえっすよ。それに、尾谷の奴も気に食わなかったし」

「後の方が本音でしょ？」

「ええ、まあ」

他の男達も同意の印に一樣にうなずいて見せた。

「でも、あんな奴等いたんですね。吸血鬼を狩る……ヴァンパイア・

ハンターってんですか」

「そりゃ、本物がいるんだもん」

「そうっすよね」

別の男がスキンヘッドをなでながら言った。ついでに、一番通路よりの彼がウェイトレスに追加のコーヒーを頼む。頼まれたウェイトレスは事務的スマイルを返しながらも、コーヒー一杯で粘るんじゃないわよ、と心の中で愚痴っていた。

「それに、あいつらハンターとはちょっと違うみたい。お上公認の調査員だつてさ。まあ」

祥子が艶っぽい唇を開いて一呼吸置いた。

「似たようなモンでしょうけど。この前バラした外人みたいに」
歯先が覗いた。特に目立つ少し伸びた犬歯が妙に光っていた。

「姉御、お、俺達も早く……」

一番こつい男が、体に似合わず懇願するような声を出した。

「そうね……じゃ、そいつらバラしてくれた人からしてあげようかな」

「本当ですかい？」

声を出したのは尋ねた男一人だったが、他の男達の胸中も同じだったに違いない。

ちょうどウェイトレスがコーヒーのお代わりを持ってきた。が、祥子の最後の『してあげる』という言葉の意味をどう捉えていたのか、妙に赤くなっている。

それに構わず祥子は片手人一振りで高校生らしいバイトのウェイトレスを下がらせた頃、携帯の着信音が鳴った。

祥子はジャケット取り出した携帯に出ると、向こうの話しだけを聞いて何も言わずに切った。

「ふふ……動き出したみたい。相手は一人。まずはこれをバラしてくれた人から本当の意味でお仲間にしてあげるわ。誰が行く？」
祥子の問いに、男五人全員が手を上げた。

東京湾にぐるりと沿うように走る高速湾岸線。

そこを横浜方面からベイブリッジを渡って爆走する黒のシルエット。
ホンダCBR1100XX『スーパースポーツブラックバード』。

戦闘機を思わせるフルカウルのパラメタルボディのこのモンスターバイクは、積載した1137ccの4ストローク・四気筒エンジンの潜在能力を発揮すれば、時速300キロオーバーの怪鳥とも言うべき速度で地を疾走する。

しかし、今はむしろその黒いボディを誇示するかのごとく、時速100キロにも満たない速度で流れていった。

その大柄ボディでさえ標準サイズに見せてしまうくらいの大男が一人ハンドルを握る。

英治だ。

マシン同様、ガンメタル調の黒いフルフェイスのヘルメットを被り、薄くスモークがかかったシールドの奥から鋭い目つきが覗いていた。
「……もう少しだな」

メットの奥でそう呟いたのは、東京湾トンネルを抜けて、湾岸線と並走するモノレール『ゆりかもめ』が右手に見えた頃だった。

数十分前。

『尾谷が出入りしていた場所、わかったわ』

『ほっ』

幸人に言い寄ろうとしていた彼の邪魔をした一本の電話。邪魔されて不機嫌な英治が取った受話器の向こうは、これまた沙羅が出るものだと思っただけ期待外れで不機嫌な声の加嶋冬美。

『幾つかあるけど、その中でここ最近出入りが激しいのは……』

冬美はゆりかもめの停車駅の一つを上げた。

『そのすぐ近くに途中で建設が放棄されたテーマパークがあるの。あと十キロもいけばデイズニールランドがあるって言うのに、よくそんなの対抗して作る気になったと思うけど』

『まあな』

『美由紀さんが行方不明になる少し前からだから、かなり重要な場所だとは思っけど、確証はないわ。まあ、尾谷を直接問いただして確認したほうが良いとは思っけど。急いては事を仕損ずる、っていうし』

「ふっ」

『何よ』

「いや何、俺がさっき幸人クンに言った言葉だと同じだと思ってな」
『もー、あんたの声聞いただけでもユーウツなのに、その上同じ台詞まで？ 私、あなたと同じ思考だと思われるの、いっちゃんイヤ』
「俺もだ」

『とにかく、今のところの情報は流したわよ。沙羅ちゃんにくれぐれもよろしくね。協力は惜しまないわ』

「それはそれは」

『言つとくけど、あなたのためじゃないのよ。沙羅ちゃんのため。私、沙羅ちゃんのためならなんでもしてあげるから。そう言っついて』

「へいへい」

『生返事ね。とにかく、焦って駆けつけたりしないでね。それなりに準備を整えてから。いい？』

「ま、考えとく」

『ちよ……』

受話器の向こうの冬美の姿を想像しながら、英治は電話を切った。

インターを降りて一分。

黒い怪鳥と騎手は人影の無い寂れた道を徐行していた。

たまに大型トラックが通過するものの、そうでない時はトラックに合わせて施工された幅の広い車線が余計に寂寥感を起こさせる。

英治は路肩にバイクを寄せた。

リッターバイクにしては意外にも静粛なエンジン音が途絶えると、真の静寂が辺りを覆った。

「……」

ヘルメットを脱いだ英治は、冬美から告げられた場所 建設放棄

されたテーマパーク跡 の入り口に視線をやった。

無機質で巨大なアーチが一人と一騎を見下ろす。

英治はアーチにかかる傾きかけた太陽の光をまぶしそくに睨みつけてから、バイクを手押して移動させた。

第四章 ハンティング&サーチング - 4

砂埃を含んだ風が、微かに潮の匂いを運んできた。英治はそれを頬と鼻で感じながらアーチをくぐった。

目の前にはただっ広いメインストリートが奥まで続き、その先にはこのテーマパークのシンボルとなるはずだった高い展望タワーが寂しげに立っていた。

建材に被せられたブルーシートが時々風で煽られる音以外は静かなものだった。静か過ぎた。

ここに尾谷が出入りしていた 冬美は確かにそう言っていた。冬美は表はもちろん、裏でもその情報収集・分析能力は高い評価を得ている。

そう、他ならぬ英治でさえそれは認めていた。

だから、ここで何らかの手がかりが得られるはずだ。時を間違わなければ。

今はその時だろうか？

情報の提供主である冬美も『準備を整えてから』と忠告していた。だが、英治は单身ここにいた。

「……」

メインストリートを進んでいた英治の脚が止まった。

微かに潮とは別の匂いが、いや『臭い』が混ざってきた。

そして気配も。

人ではない。

かつて人であったモノの気配だ。

気配を隠そうという動きは無かった。ただ英治めがけて一直線にこちらに向かっていく。

前方に三体、後方に二体。

前方を見る英治の目つきが陰しくなった。

「こいつは……」

気配の主が姿を見せた。建材の影から異臭をまとわりつかせて。それらの一つと視線があった。

元は青かったが、今は白く濁った眼をこちらに向けて。

「……おお……」「ううっ……」「ああ……」

顔と同じ土色の両手を、闇の中での手探りのように前に突き出し、それでいて確実に英治に向かっておぼつかない歩みを進めていた。口元からは人とも獣ともつかぬうめき声と共に、地に届くほどの唾液を垂れ流しながら。

「まさか……ゾンビとはな」

英治はボディバッグから銀のナイフを取り出して構えた。ゾンビ。

まさしく映画の中と同じ姿が、現実として目の前にあった。

だが英治は臆した風もなく悠然と構えた姿勢のままで立ち尽くす。

「こいつ等？」

視線だけを走らせていた英治があることに気がついた。

今でこそ濁った眼と土色の肌をしているが、その体格、顔つきからして彼等は白色人種であったことに。

そして。

「……ガンホルスターに、ボディアーマー、古典的な銀の杭……そうか、冬美さんが言っていた外国のヴァンパイアハンターとはこいつ等か」

誰に聞かせるわけでもないのに、確認するように呟く英治。

「狩る奴が、狩られる側になるとはな。しかも、殺されてから感染させられた哀れなゾンビの身として」

ゾンビと吸血鬼。一見、全く別の存在であるようだが、その根本は同じであった。

フィクションの世界では、吸血鬼とは、吸血鬼に血を吸われた人間がその同族となることであり、ゾンビとは死んだ人間が魔術などによって意思持たぬ食人鬼として人を襲うというのが一般だ。

だが、伝承、特に欧米での伝承では吸血鬼とゾンビの起源は同じであった。

火葬の習慣が無い欧米では、現代のように医学が発展していない中世時代、仮死状態のまま埋葬される事が多々あった。

このため、仮死状態から目覚めた人間は、閉塞された棺の中から半狂乱の状態で土の中から這い出してさまよう事があったという。そして時にはその半狂乱の状態で人を襲い、餓えにさいなまれて手当たり次第に噛みつく。

人血を口から滴らせたその姿は、当時の人にとっては伝承の『吸血鬼』であり、また地から這い出す姿を見たものに取っては『ゾンビ』として映ったことであろう。

だが、実際の吸血鬼⇨吸血症候群感染者とゾンビの間には決定的な差があった。

それは前者が生きて感染するのに対し、後者は死後に感染すると言うことであった。また、前者はお互いの血を飲む事により感染するが、後者は感染者の血が死者の血に交わることによって感染する。

今、英治の目の前に立ちはだかるのは後者の例であった。

彼を包囲するゾンビの輪が狭まる。

「ちっ……どうせならもつとギャラリーが多い時に暴れたかったもんだぜ。ここんどこ、沙羅にいつもおいしいところとられてるかな」

既に彼を囲む輪は半径二メートルに満たないと言うのに、英治は空いた左手で頭を掻きながらばやいた。

「ま、いつか!」

銀光が彼を中心に円を描くように走った。頭上から見て半径約二メートルの円を。

「おお」「うう」

少し遅れて元ハンターのうめき声。さらに遅れて彼等の足元に五つの物体が転がった。

手首だ。切り落とされてもまだ指を蠢かすゾンビ達の手首。

すでに死んでいる彼等に痛みなど感じないはずなのに、そのうめき声は最初の時とは違って聞こえた。

一瞬動きを止めたゾンビ達の間を縫って包囲網から抜け出す英治。

「ちっ、こういう時に銀のナイフは使いにくいよな。モノホンの感染者と違って銀が決定打とならねえもんな。奴等なら心臓に一刺しで終りなのによ」

それは事実だった。現に、ゾンビ達は左胸から濁った血が吹き出ているというのに、英治に向き直って餓えて濁った眼で歩み始めた。皮肉なことだった。感染者唯一の弱点である銀。しかしそれを克服できるのは人間として死んだ後に感染した状態　ゾンビ　でないといけないとは。そしてそれはもはや人でも感染者でもなく、単なる『動く死体』でしかない。

「さ、どうすっかな英治くん。逃げるのは簡単だけど、このまま人目に出られても困るしなあ。かといって体をばらばらに出来る重火器持ってきてないし」

相変わらず誰に聞かせるでもない独り言を連発する英治。

その間にも手首を失ったゾンビ達が、英治を『餓えを満たす存在』として迫っていた。

「しょうがねえ、ここは一つ、ギャラリーに協力してもらおうとしますか!!」

英治があろうことかゾンビの群れに向き直って突進した。

それを無意識に好機と捉えたゾンビ達が、うめき声をさらに張り上げて両手を差し出す。

「おおお？」

感情を持たないはずのゾンビの声が微妙に変化した。両手の届く範囲に入った英治に掴みかかろうとした瞬間、英治は残像を残して消えた。

最初の一体が英治の姿を求めて顔をめぐらす前に、英治は別のゾンビの眼前に移動し、再び残像を残して別のゾンビに向かって移動する。

それを五体分繰り返し、ゾンビ全員が右往左往する頃には、英治は彼等から十メートルも離れた所に立っていた。

「ひい、ふう、みい……しめて十本か」

手にしていた物を数えながら。

それは銀の杭だった。人の肘の長さほどもある銀の杭が十本。そしてそれは元ヴァンパイアハンターだったゾンビが腰に付けていたものであった。

英治が高速で移動しながら奪い取ったのだと考える思考も無いゾンビ達は、英治の姿を視線と臭いで捉えて一斉に向き直った。

「さ〜と。じゃ、ギャラリーに特別参加してもらいますか」

そう言つて英治は手にした銀の杭を一本、右手に取り、それを槍投げの要領で思いつきり上空に投げつけた。

銀光一閃。

地面に対して四十五度の角度で唸りを上げて飛翔する銀の杭。その先にはあの朽ち果てた展望タワーが。

展望タワーの頂上に設置されたガラス張りの展望台。そのガラス窓を銀の杭が突き破るけたたましい音に悲鳴が混じった。

「どうせ観るなら近くで見たほうが良いぜ、お客さん」

そう言つて今度は無造作に二本目の銀の杭を投げつける。さほど狙いを定めたように見えないのに、銀の杭は先ほど破られた窓を通つて展望台の奥に吸いこまれた。距離にして四十メートル、高さ二十メートルの展望台に。

再び悲鳴が聞こえた。間髪入れず英治は二本の杭を同じように展望台の中に正確に投擲した。

遠目にも展望台の中でそれを避けようとする人影が覗いた。しかし、四本もの杭が正確に投げ入れられたことに恐怖を覚えたのか、人影は展望台の奥に消え、代わりに階段を駆け降りる騒々しい音が響いた。

「くそ」

展望台タワーの基礎、チェーンをかけられた入り口から男が飛び出

してきた。革ジャケットのいかにもイージーライダー風の男が、首にかけた双眼鏡を揺らし、たすきがけにボディバックを背負った格好で息を切らせていた。

「な、なんなんだあいつは」

脂汗と冷や汗を額に浮かべながら、背を向けて逃げ出そうとする男。しかし、踏み出した右足から僅か三十センチ前方に上空から飛来したものが突き刺さった。

「うつ？」

ほとんど尻餅をつきかけた格好で飛びのいた男が息つく暇もなく、次の杭が上空から飛来し、男は慌てて後ずさった。

「ひっ」「うつ」「がつ」

次々と飛来する杭を、ほとんど言葉になっていない悲鳴で避け続ける男。

それが六回続き、ほとんど息が上がっていた男は次の七本目が限界だと覚悟した。

が、七本目は無かった。

「助かった……」

そう呟いて振りかえった男の前に、ぬうと立ちはだかる人影。いや。

「おおお」「うつ」

人ではなくゾンビだった。

「ひっ!？」

ゾンビ達は新たな獲物に食指を動かされたのか、唾液を垂らした口から歓喜のうめき声を上げてにじり寄る。

「く、来るなっ!」

恐怖で顔面蒼白の男は、背中のバッグからもどかしい手つきで何かを取り出した。

途中でバッグの中で引っかかりながら取り出したもの。それは鈍く黒い光を放つショットガン『SPAS12』だ。日本でもエアーガンで製造されているが、この切迫した状況でエアーガンを出す奴はいない。

「うおおッー!!」

ほとんど自棄気味にショットガンの引き金を引き、ポンプアクションを繰り返す。

「……うつ……」「うーおおー」

それに合わせてゾンビ達が体に血の華を咲かせ、うめき声と共にのけぞる。

それでも目の前の獲物ににじり寄ろうとするゾンビに、男は予備の弾薬を装填して引き金を絞る。

「死ね、死ね、死ねっ!!」

ゾンビ相手に矛盾した言葉を吐く。

予備の弾丸も含めて計十発の薬莢を空にした時、彼以外に動くものは無かった。

「ひ、ひひ……助かった」

辺りに血臭と硝煙が漂った。幾ら不死身に近いゾンビとはいえ、頭や心臓を吹き飛ばされては動くことは出来ない。事実、男が撃ちまくった散弾を食らったゾンビ達は血の海の中で残った手足を痙攣させているに過ぎなかった。

「いや、お客さん、お見事でしたよ」

「!?!」

男はその声のした後方にショットガンを向けて振りかえった。だが、引き金を絞る前に銃ごと腕を逆手にひねられ、男はうつぶせに地面に抑えつけられた。

「ぐっ……てめえ」

「俺にだって名前はあるんだよ。黒崎英治って立派な名前がな」

右手一本で男の腕を一層ひねり上げ、英治は空いた左手に握ったナイフを男の後頭部にピタリと突きつけた。

「な、何で分かった?」

「へっ、そっちから質問かい。まあいいや、教えてやる。あのゾンビ、元はハンターだった奴等だ。なのに銀の杭以外の武器が抜き取られていた。ホルスターだけ残してな。武器が欲しいだけならここ

に放置しない。それなら海にでも捨てればいい。そうしないのは待ち伏せにゾンビを使いたかったからだってな。それに、幾らゾンビに相手させるって言っても後始末をする奴が要る。それがお前さんだ」

「なぜ場所が……」

「見えないように隠れてたつてのか？ そりゃそうだろうな。俺も最初から分かってて投げつけたわけじゃねえよ」

「何？」

「へへ、でも予想はつくぜ。安全かつゾンビの確認しやすいところはあの展望台しかねえ。第一、高みの見物にはもってこいじゃねえか。な、お客さん」

「ち……カマかけやがったな」

「おめーみたいなブ男、だれがカマ掘るかってんだ。俺もついてないねえ、ゾンビの次はブ男の相手、さみしーねー」

「はあ？」

「つと、んな事どうでもいい。さ、こつちがしゃべったんだ。あんたも洗いざらい吐いてもらおうか」

英治がナイフの切っ先に僅かに力を入れた。

「くくく……」

「！？ 何がおかしい」

「……腕が立つようでも、今一步つてとこだな」

「何？」

「俺なんかに構ってる暇なんかあるのか？ 一人でのこのこ出て来やがってよお」

「！？ まさか？」

「ひひひ、やっと分かったな。お前達の行動なんて筒抜けなんだよ。うまく尾谷を締め上げてこの場所を知ったみたいだが、もうシマは替えてるさ。今頃、姉御があんたのところにご挨拶にいつてるぜ」

「ちっ」

英治は腹立たしげにナイフの柄で男の後頭部を殴った。

気絶した男とゾンビの死体を残し、英治は停めであるバイクへと向かった。

第四章 ハンティング&サーチング - 5

「開いてるわよ」

最初のノックで反応がなかったため、幸人が二回目のノックの手を上げた瞬間、ドアの向こうから沙羅の声が聞こえた。

「おじゃまします」

ノブに手をかけて遠慮がちに中に入った。沙羅は『入って』とは言っていないが、言葉にはそういう雰囲気だめられていた。

「うあ……」

幸人は息を呑んだ。

何となく予想はしていた。沙羅の事だから普通の女の子の部屋とは違っただろう、ということ。

しかしここまでとは。

八畳ほどの部屋には窓はなく、天井の蛍光灯がメインの光源だった。入り口からみて左手の壁には天井まで届く本棚が壁一面を占拠し、さらにその本棚には隙間なく本が並べられていた。その上、まだ読みきれていないのか、別に保管するつもりなのか、口を開けたダンボール箱に本が平積み重ねられている。その蔵書量もすごい、種類もすごい。沙羅のことだから普通の少女のようにコミックを置くことは無いと予想していたが、半分は古典文学を中心とした文庫本、残り半分は実用書ばかり。いや、実用書の種類もよく見てみればミリタリー関係のものがかなりの面積を占めている。

そして正面の壁。ここにはもはや日本じゃ考えられないものがかかけられていた。

銃だ。

壁に打ち付けられたフックに、狙撃銃、アサルトライフル、SMG、拳銃などが数種類づつかけられている。それがモデルガンマニアのコレクションではなく、全てが本物であることはあの久里浜港の倉庫で証明されている。

そして右側。

机、いや、作業机が右側に据え付けられている。間違っても小学生が入学式で親に購入してもらうような勉強机ではない。左側には製図に使うようなアーム式ライトと拡大鏡のセット、右側には無骨な工具箱が二段重ねてある。

そして当然のごとく机の前に沙羅がいた。

幸人が入っても一度も振り返ることもなく、机の上でバーナーにかけた小型の坩堝の中身を型に流し込んでいる。よく見ると傍らには空の薬莢が数個と黒光りするリボルバー　コルトパイソン357　マグナム。

作業机に合わせたのか、背の高い椅子に腰掛けて両足が床に届かない姿は何となくかわいらしいものがあつたが、それが無ければ昔堅気の職人の工房を思わせる風景。

「適当に座つてて」

やはり振り返らずに沙羅が『指示』した。

一応、部屋の中央にはガラスのローテーブルとソファアのセット。やっと生活感を感じるものを見出し、幸人はソファに身を沈めた。

「……」

「……」

沈黙が一分。

沙羅は黙々と作業を続ける。

幸人は少し後悔した。

ただでさえ会話が弾みそうに無い上に、こんな窒息しそうな部屋で一分以上じっとしていられるほど幸人の神経は鈍くない。

沙羅から『姉の居場所を訊き出した』と告げられて、すぐにでも姉の元にかけてつけたかった。だが、その前に英治はどこかに行ってしまうし、それを聞いた沙羅も帰りを待つと言って部屋に籠ってしまった。確かに、英治がいない状態では動けないとは言え、指をくわえて待っているほど神経は図太くない。それで沙羅に詳しいことを訊こうとドアをノックした訳だが、いきなり話すきっかけをくじか

れてしまった。

思わず立ちあがって本棚の本を手取る。

が、もともと本をあまり読まない幸人には、背表紙の群れを眺めるだけでも目が痛くなった。その上、天井近くにある文庫本は勉強に不熱心の大学生には半分も思い出せないようなタイトルの古典文学ばかりだ。

仕方なくハードカバーの実用書を手取る。タイトルからしてミリタリーものらしく、幾つかめくると銃器の使用法や屋内での戦術がイラスト入りで入っていた。

「？」

奥付でふと眼が止まった。初版以降、版を重ねていないのはマニアックだからと理解できるが、日付が昭和になっていた。

英治が購入したお古だろうか、と思い直して本を戻し、今度は銃器類をかけてある壁の前に移動する。

（本物……なんだろうな）

幸人は真中にかけてあるSMGに手を伸ばした。

「むやみに触らないで」

「！？ は、はい」

後ろに眼でもついているのか、沙羅の背中越しの声に幸人は手を引っ込めた。

最後の壁。

幸人は沙羅がいる作業机に向かった。それでも邪魔をしてはいけなという考えと、近寄りがたい雰囲気を押されて沙羅の左後方に突っ立っているのがやっとだった。

それに気づいているのかいないのか、沙羅は坩堝の溶解した金属を型に流し込む作業を続けていた。

長く整った睫毛の下で、深く黒い瞳にバーナーの青白い炎が映える。呼吸をしていないようにも見える閉じた唇は、子供特有のほんのりとした艶を浮かべていた。

白い肌は、シャンデリアに照らされる大理石を思わせ、それでいて

血のぬくもりを僅かに表に出していた。
美しい　掛け値無しに幸人は思った。
かわいいのではなく、美しいと。

「もうすぐ終わるわ」

「えっ？　うん……」

その考えを見透かされたようで、英治は柄にも無く顔を赤らめた。

「さてと……何か御用？」

バーナーを消した沙羅が初めて幸人に向き直った。

「え……と」

沙羅の瞳がこちらを向いている。誰にも見透かすことが出来ないであらう黒い瞳で。

「それって、やっぱり本物？」

口にしてから後悔した。本当に訊きたいことは他にもいっぱいあるはずだというのに。

「そう。警察にでも訴える？」

「い、いや、そんな」

「冗談よ」

僅かに沙羅の表情が動いたような気がした。

「日本で銃の所持を認められているのは警察か自衛隊、そう思うのが一般的だけど、他にも多いのよ。例えば私達と同じ厚生労働省の麻薬対策課とかね」

「はあ」

「感染者には銀の弾丸が一番有効だけど、コストの関係で最低限度に使用は限られているの。代わりに、銃器の種類はあまり問われ無いけど」

だからと言って、ライフルやSMGまであるのはどうかと幸人は思った。

「気になる？」

「え？」

「私みたいな子供が、こんな銃器を使うこと」

「それは……でも、感染者相手には武器が必要なんだろう？」

「本当にそう思っている？」

「う……」

幸人は一瞬詰まったが、白状するように言葉を継いだ。

「その、むやみやたらに銃を扱うのはどうかなって……。確かにこの仕事危険なことは分かるよ。何となくだけど。でも、君みたいな子供が、それも女の子が銃を持つなんて……」

「世界中には、私ぐらいの年代で鉛筆の代わりに銃を手にする子供はいっぱいいるわ。生き延びるために……。他の選択肢が無いために」
「で、でもここは日本だよ。沙羅ちゃん銃を持って戦うことは無いんじゃないかい？ 普通の生活できないわけじゃ……」

幸人はそこで息を詰ませた。

別に沙羅が制したわけではない。沙羅は一步も動いていない。が、何かが急激に変わったのを幸人は感じた。沙羅の何かが、まるで空気を温度が伝わるように。

「……出来ないって言ったら？」

それは問い掛けでなく答えだった。

「その時は……」

「その時は？」

「……僕が代わりになろうか」

幸人は自分が何を言ったのか自分でも理解できなかった。その答えを選んだつもりも、考えるつもりも無かった。ただ無意識に出てしまった。言った後で、これほど自分自身に理解できない部分があるのかと思っただくらいだ。

「ふふ……」

「え？」

沙羅が笑いを表に出した。

心底驚いた。

沙羅が笑ったこともそうだが、そうさせた原因がおそらく自分の言葉であることにも驚いた。

「おもしろいこと言うわね、幸人さん。英治でも言えない冗談だわ」
「そ……かな」

「で、代わるって、具体的にどうするつもり？」

「例えば、俺が代わりに銃を……」

「銃を取って守ってくれるつもり？　優しいのね。でも、止めておいたほうがいいと思うわ」

「何で？」

「武器を持つのはね、臆病者のすることよ。それは強さや勇気の証じゃない。臆病者の証明書を見せびらかすようなもの。まあ、それに頼るしかない私は……世界一の臆病者かもね」

どこと無く自虐的な言い回しだった。だが、皮肉なことに沙羅の感情が一番垣間見えたのもこの瞬間だった。

「さ、休憩しましょう。お茶でも入れるわ」

その頃。

高速湾岸線を黒い怪鳥スーパーブラックバードが車の間を時速二百キロオーバーですり抜けながら南下していた。

「やっぱ、出ねえか」

バイク用に販売されている携帯電話のハンズフリーのセット。いくら走行中に操作も可能とはいえ、それを時速二百キロのバイクの上でやる奴なんてメーカーも考えなかったに違いない。

「手伝おうか」

「ありがとう。でも、ゆっくりしてて」

キッチンに立つ沙羅の背中に声をかけたが、反応は予想通りだった。コーヒーと一緒に菓子でも用意しているのか、踏み台の上に立つ沙羅の後姿はそれだけ見れば歳相応の可愛さを幸人は感じた。

「沙羅ちゃん、コーヒー入れるのうまいね」

何と無しに声をかけた。

「そう？」

「うん」

「ありがとう」

「いつも沙羅ちゃんが入れるの？」

「今はね」

「今は？」

「前は……いれてくれる人がいたから」

「え？」

背中越しに、沙羅の素顔が見えたような気がする。悲しい顔が。

「……家では、お姉さんがコーヒーを入れてくれるの？」

「え？ うん」

沙羅の方から話題を変えた。

「どっちがおいしい？ 私が入れるのとお姉さんのと」

「え……」

少し答えに躊躇する幸人。沙羅の背中が何と無しに笑っているように見えた。

「どっちもおいしいよ」

「そう。じゃあ、お姉さんの方が上ね」

「え？」

「味は一緒なら、家族が入れてくれた方がおいしに決まってるわ」
沙羅が振り返った。

「さあ、休憩したら、英治と連絡取りましょう」

「うん」

トレーにポットと二つのコーヒークップ。テーブルに持ってくるまで、ポットの液体表面は水平を保ち続けた。見事なバランス感覚。それが 傾いた。

「伏せて!!」

「!？」

トレーを放り出して幸人に駆け寄る沙羅。

ガラスが割れるけたたましい音。ポットのだけではない。窓ガラスを突き破って何かが床に突き刺さった。英治の脚があった位置に。

「クロスボウ？」

それは幸人の言葉かそれとも沙羅か。

どこに忍ばせていたのか、沙羅は両手にそれぞれ小型の拳銃を握り、手首で交差させて窓の外に向けた。

デリンジャー・モデル1。

装弾数二発、両手で四発しかないこの護身用小型拳銃では、外の相手には役不足だった。

「うつ」「がつ」

それでも窓の外で二人のうめき声が聞こえた。見えない相手二人の。しかし外にはそれ以上の数。気配を隠す様子は無い。圧倒的人数で攻める気が。

応戦のため、自室に駆け寄ろうとした沙羅の視線に、幸人の姿が映った。

ソファの影に隠れる幸人。が、その首筋から額に向けて何かが走っている。

赤い光点。

それが幸人の額で止まった。

「離れて!!」

「え？」

その声に驚いて振り向く幸人。その瞬間、幸人の額をポイントしていた光点が不意に消えた。

「!？」

沙羅の眼に疑念の色が混じった。

そして。

光点が沙羅の胸元に出現した。沙羅もそれを確認した。罨だ。

幸人を狙う振りをして沙羅をおびき出す。

「くっ」

方向転換する前に、黒い物体が窓の外から飛来した。

「沙羅ちゃん!!」

沙羅の胸にクロスボウの矢が二本突き刺さっていた。その瞬間が見えず、幸人には沙羅の胸に矢が生えたように見えた。

「逃げ……」

それでも健気に立ちあがり、近寄ろうとする幸人を制する。しかし。

続けて五本の矢が沙羅の胸と腹部に突き刺さり、沙羅は声も上げずに床に伏した。胎児のように少し丸まった姿勢で。

黒髪が、沙羅の顔を隠して床に広がる。

美しくさえあるその姿に、朱が混じった。

沙羅の胸元を中心に、床に血の海が広がった。

「沙羅ちゃん!!」

駆け寄ろうとする幸人。しかしそれを合図のようにして窓やドアから男達が跳び込み、あっという間に幸人を床にうつ伏せにして縛り上げた。

「ちよつと手間取ったわね」

「!?!」

痛みと悔しさの涙に歪む視界に、黒いブーツの足元が見えた。

見上げると、革のジャケットの下にノースリーブでぎりぎりの所まで豊満な胸を誇示する女性。その胸の谷間の向こうに茶髪の顔が覗いた。

その女性が日高祥子であることなど、幸人はその時知る由も無かった。

「あの探偵がいない隙狙ったつてのに、こんな被害出るなんてね」

「す、すいません姉御」

祥子よりもふた廻りは体のこつい男達が頭を下げる。

「ま、任務は果たせたわけだし。それに、あんな手痛い反撃あるなんて思わなかったし。それにしても……」

祥子が片膝について沙羅に手を伸ばす。

「止める!!」

幸人の台詞など完全に無視して祥子が沙羅の黒髪を掻き上げた。

「あら、なかなかの美少女ね。大人になったらすごい美人になるんじゃない？」

「こ、このガキが二人も？」

「みたいね。手に握ってる銃が証拠。それにしても恐ろしいガキんちよね。あの二人のクロスボウだけ撃ち抜くなんて。どういう育ち方したのかしら。でも」

黒髪を元に戻した。

「ちよっとおいたが過ぎたようね。殺すには惜しいけど、まあお仕置だと思つてあきらめなさい」

「！？ あんた沙羅ちゃんを……！？」

無理やり置きあがろうとした幸人の台詞は、後頭部のきつい一撃で中断された。

「じゃ、後は頼んだわよ。弟さんを丁重に運んであげてね」

「アネさんはどうするんですかい？」

「ちよつと用事がね。ま、五分もすれば戻るから」

祥子はドアを開けて階段を降りていった。

「あら、ちよつとやせたんじゃないの？」

「あ、しょ、祥子？」

薄暗い地下の一室に二人の声が響いた。

「た、助けに来てくれたのか」

尾谷の質問とも要望とも取れるその言葉を無視して、祥子は机の上に放置されている工具箱を手につった。

「早く外してくれ、こっから出してくれ」

尾谷はチェーンをがちゃがちゃ鳴らした。まだ椅子に縛り付けられたままだったのだ。

「しゃべつたわね」

祥子が工具箱の中身を確認して冷たく言い放った。

「お、俺は何も……」

「嘘つくんじゃないわよ」

おもむろに尾谷に近づくと、祥子は尾谷の髪の毛に指を突っ込んだ。
「ひいひい泣いて叫んだの、しっかり聞こえてたわよ」

祥子は指につまんだ物を尾谷の鼻先にかざした。

「それは……」

「盗聴機。すごいわね、最近のは。髪の毛より一回り大きいだけなんてね」

祥子が鼻先で振ったそれは、オモチャのモータの先端にでもついているような数ミリ程度のゴムキャップにしか見えなかった。

「し、仕方なかったんだ。あのガキ、俺に水銀の注射しやがるなんてマジでいいやがって……」

「で、喋っちゃったの。いけないコね。根性だけが取り柄のあんたが、根性無くしちゃったら終りじゃない？ それに……」

祥子は手に持っていたもう一つのことを鼻先に突き出した。銀の液体の入ったアンプル。その封を切って臭いをかいだ。

「……これ、水銀じゃなくて銀色の塗料じゃない。プラモデルとかで使うような」

「な……」

「まんまとだまされたわね。でも、こっちは本物よ」

祥子が銃を取り出した。沙羅が使っていたコルトパイソン・357マグナムを。弾丸はもちろん、銀だ。

「お、俺を殺す気か？ そんな事してみろ、桂木さんが黙っちゃいないぞ」

「桂木？ ああ、あの若社長気取った奴ね。あんた、あいつがまだトップだと思ってるの？」

銃口が尾谷の左胸にポイントされた。

「何？ ってことはお前等、裏切ったのか？ 杉本の奴をやったのも……まさか、桂木さんまで？」

「いいえ、今は死んじやいないわよ……そのうちそうなるでしょうけど」

なぜか祥子は思い出したような含み笑いを漏らした。

「そろそろ戻んなきゃ。あの人が待ってるから」

「ま、待ってく……」

「問答無用」

パン、と一発の銃声がしたきり、尾谷は動かなくなった。

「私ってなんて優しいのかしら。苦しまずに死なせるなんて。もう
ちよつと楽しんでも良かったのに。ふふふ……」

第五章 変わるもの変わらないもの - 1

八月上旬。

JRの新橋駅からモノレール『ゆりかもめ』に乗ること約二十分の『国際展示場正門前』。

駅名そのものよりも、『東京ビッグサイト』の最寄駅として名を知られている。

数々の業種の展示会場として使用される、並べたピラミッドを逆さにしたような独特の外観の建物に中に吸い込まれていく人々の累計は計り知れない。

が、この時期が特にその何割かを占めている事は、人の波を見れば明らかだった。

駅から会場までの陸橋をほぼ間断無く続く人の群れは、その数もさる事ながら独特の雰囲気が他とは規模が違うことを示していた。

普通の人の群れ ほとんどが十代から二十代の に混じって、明らかに日常では着ないような派手な格好をした人々。時折みる空のカートと折りたたんだダンボールを引きずるように足早に会場に向かう人。

同人誌を売る側、買う側、そして遠方からの買いつけ、コスプレ、それを撮影するカメラ小僧。なかにはそれら複数の分類を併せ持つ人々。

これが夏と年末の年に二回行われる、日本最大の同人誌即売会に向かう人達であることは、とりわけ関東では周知の事実に近かった。中には乗り継ぎ駅である新橋辺りからコスプレのままゆりかもめに乗込み、上京したばかりの人達の度肝を抜くのもこの時期ならではのことであった。

ビッグサイトの入り口手前、陸橋と会場をつなぐ広場のように広いスペースは人山で溢れ返っていた。会場に向かう人波、それを整理する誘導員、飲み物や軽食、使い捨てカメラの出店。周辺でたむろ

したり腰を降ろしているのは待ち合わせなのか、人ごみを避ける人達か。

が、そのたむろする人の中に、眼鏡の奥から入り口に鋭い視線を送る一人の男がいた。

年の頃は二十代前半だろうか、シャツに綿パン、手にはポーチだけの軽装は、この会場ではまさに軽すぎた。購入した同人誌の山を入れるバッグやキャリーも持たないその姿は、まるで降りる駅を間違えて物珍しさに会場を眺めているようにも見えた。

だが、男の目的地はまさにこれであった。

コスプレイヤーの年代相も幅も広くなった最近では、その姿をカメラに収めることに没頭する人種も多くなってきた。いわゆるカメラ小僧というやつだ。

なぜか超望遠のレンズをつけたカメラを首に下げ、それでも持ちきれないカメラ機材やフィルムを下げて会場を徘徊するその姿は別の意味で目立っていた。

一時期は被写体とのトラブルが多発したが、最近では主催者側の努力と参加者のマナーによって互いに気持ち良くこの年二回のお祭りを楽しんでいる。

男はこの部類に入るのだろうか。

ポーチのジッパーを開けて中を確認する。そこには銀色の直方体、デジタルカメラが入っていた。

ポーチの中にいれたままでバッテリーの状態を確認し、満足げにポーチの口を閉じた。

カメラという存在だけ見ると男も『カメラ小僧』という分類に入るのだろうか。いや、彼は純粹な撮影目的でそれを持ってきてはいなかった。

(……今年もレベルが高い)

男はこの会場では最も性質の悪い輩の一つ スナイパー 盗撮者であった。

この世の中には盗撮を専門とする雑誌が公然と売られている。それが被写体に許可を得ているとは到底思えないのに。

最近は自主規制をしている出版社も多いが、ネットのアンダーグラウンドの世界ではまさしく関係の無い世界であった。

それこそ、被写体の顔つきできわどい角度から撮った写真を同好の者に配信、もしくは高値で売りつける。ネットとは自己顕示欲の手軽な提供の場でもあり、悪趣味な小遣い稼ぎの場でもあった。

それだけでも犯罪なのだが。

（しかし、みんなメジャーなのが目立つな。その分、質も高いがこれじゃ他の奴等も狙うだろう。ここは一つ、マニアック狙いを……）

男は視線を巡らした。どこかの格闘ゲームの女性キャラ、小学生魔法使いのキャラ、一見女子高生の制服のようできて微妙に違うコスプレ

「お……」

男は思わず息を漏らした。

年の頃は小学校中学年ぐらいだろうか、銀縁の眼鏡の奥から切れ長の目で会場を見つめる一人の少女。

いや、美少女　男はそう確信した。

髪の毛は二つのお下げにしているが、それと眼鏡の組み合わせが逆に奇抜な髪型が多いアニメ・ゲームのキャラとは一線を引いていた。その清楚さや世間知らずなお嬢様の雰囲気を増させるかのように、少女はピアノの発表会にでも出るようなダークブラウンのドレスに膝上までのスカート、その下からは黒いタイツに包まれた細い両足だが、それと同じように眼を引くものがあつた。

少女が傍らで支えているものだ。

少女の身長とほぼ同じ高さ、途中でくびれたデザインの黒いケースを記念撮影でもするかのように並んで立てている。それがチェロという、バイオリンを巨大化したような弦楽器が入るケースであることは、男の乏しい音楽知識でも何とか理解できた。

（こんなキャラいたっけな？）

盗撮のために資料を見まくった男の知識でも、すぐにはそれが何のコスプレであるかは検索できなかった。

そう考えあぐねているうちに、一陣の風が会場周辺を巡った。

（おっ！？）

歓喜の声を口に出さなかったのを、男は自分でも感心した。

風は当然の如く少女の周囲にも届き、そして当然の如くスカートの裾を翻させた。その瞬間、男はその奥にある物を確認した。

（タイツじゃなく、オーバーニー……萌え萌えだ）

さらにその奥にあるものは確認できなかったが、それよりもマニアツクなアクセサリであるオーバーニーのソックスに、男は意味不明の言葉で歓喜した。

少女は風で翻ったスカートの裾を押さえることも無く、風が止むとチェロのケースを下げてすたすたと会場に向かって歩き出した。

（逃がすか……あいや良い被写体になる）

男は怪しくない程度の早足で後を追った。

ほぼ同時刻。

黒い車体が、ビッグサイト付近の渋滞をすり抜けて一キロほど離れたとある場所に向かっていた。

CBR1100XXにまたがる黒崎英治の視線が、厳しく、そして苛立たしげに前方に視線を送っていた。

第五章 変わるもの変わらないもの - 2

（くっそ、何のキャラだったかな）

今だ何のコスプレか不明の少女の後を追いながら、男は知識のデータベースに検索を掛けまくっていた。

（小学生が出てくるアニメやゲームであんなキャラいたっけな……いや、まてよ。いい年こいた大人が子供のコスプレやる場合もある。とするとその逆もあるわけだ。でも、あんなでかい楽器のケースを引っさげるキャラなんていたか？）

同人誌即売会場のホールに向かう人の波に、男は少女の姿を見失いそうになった。しかし、軽装のおかげで意外とすんなりと進むことができた。それに少女は自分と同じくらい大きなチェロのケースを抱えているため、その姿は簡単に追うことができた。

（ん？）

ホール同士を結ぶスペースで、少女は足を止めた。スペース、とは言っても同じように休憩している人々で占有されており、尾行していることを感付かれない様に少し離れた場所から様子をうかがうのも一苦労だった。

一分もしないうちに、カメラ小僧が少女に声をかけてきた。最近小学生でもグループを作ってコスプレで来ることも多い。が、この年代で一人で来るのは逆に目立つのか、それともグループに比べて声をかけやすいのか。多分、後者だろう。

しかし、少女は断りこそしなかったものの、どこと無くうつうつとした視線をしていた。表情はあまり変わっていないのだが、遠目に観察している男には逆にそれがよくわかった。

それに気づかないのか、自分の目的を達成したカメラ小僧は無理やり握手して この時は特に少女は嫌そうだったが 嬉々として次の被写体を探し始めた。

（おーおーやだねえ）

自分の事を棚に上げた勝手な考えで男が見ていると、不意に少女がこちらを向いた。

（まじイ）

それでも隠れるような事はせず、自然に視線をそらして会場のパンフに移す。

「……………」

少女は何事も無かったかのように黙々と歩き始めた。

（おっと、逃すかよ）

少女が角を曲がった。が、その先は即売会場でもコスプレ撮影の会場でもない。

（迷ったのか？）

怪しまれない程度に急いで後を追った。もともと、会場の大半は自分の目的の同人誌を買うことに精一杯で他人に構う気も無かっただろうが。

「……………っ!？」

「……………」

角を曲がった途端、胸の前に少女の視線とチエロのケースにぶつかりかけて、男は思わず大きな声を上げるところだった。

（やば……………気づかれたか？）

だが、男は黙っているより自分から話しを進めて煙に巻く選択肢をとった。

「あ、その格好似合ってるね。一枚いいかな？」

おもむろにデジカメラを取り出す。基本的にコスプレで来ている以上、それが似合っているとされて悪い気はしない。本当は元のキャラの名前で呼ぶと一番喜ばれるのだが、まだ何のキャラか男には分からない。

「……………」

少女は沈黙したままだった。

先程のカメラ小僧の時もあり嬉しそうな感じではなかった。コスプレで来ているのに不思議だと思ったが、この方向で行くのは失敗

したか。

「……うん」

「ありがとう。じゃあ、二枚ほど良いかな」

少女の返事を待たずに、男はカメラを向けた。鷹揚の無い少女の声は、それが緊張しているせいだと考えて。

「じゃあ、決めのポーズで」

「……」

元キャラが決めポーズが何かはわからないが、それと一体化出来ることをコスプレイヤーは望むはず。そう考えたが、少女は無表情に記念撮影のようにチェロのケースと並んで立っているだけだ。

（おとなしいコだな。こいつは元々内気だけど無理してコスプレしてきて緊張してるのかもな。だったら、無理に盗撮なんかしないで……）

「そのチェロ重そうだね。撮らせてくれたお礼に持ってあげるよ」

男はカメラを収めて手を差し出した。

「いいんですか？」

少女がか細い声で尋ねた。

「大丈夫、大丈夫」

そういつて自然に少女の手からチェロのケースを受け取った。

受け取る直前、男は心の中でほくそ笑んだが、受け取った瞬間に思わず声を上げそうになった。

（何だこの重さ？）

取っ手を握った瞬間、肩が下がりそうになった。チェロの重量がどれくらいかは分からなかったが、少女が持てるくらいだから見た目ほどたいしたことはないと思っていたが、予想の倍くらいはあった。決して持てない重さではないが。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

少女が歩を進めた。男もそれに従った。人ごみの少ない方向へ。

「ねえ、君、こっちだと会場から離れるよ」

「うっん、こっちです」

待ち合わせにでも行くのか、だとしたらやりにくいな、と男が考えているうちに少女はさらに施設の裏手に向かって行く。人通りが少ない方向に。

（迷ったのか……ならチャンスだ）

男は嫌らしい笑みを一瞬口元に浮かべた。迷ったことも言えないくらい緊張してるのか。だとしたらこのまま人のいないところで好き勝手に撮影できる。あんだけおとなしければ、かなり強要してもかなり危ない思考が現実になりかけた。

少女は非常階段に通じる防火扉を開けた。しかも、男が入るまでわざわざ扉を押さえて。

「どうしたの、休憩？ それとも」

扉が完全に閉まったのを確認して、男はチェアのケースを壁際に立てかけた。一瞬、少女に背を向ける格好で。

「え？」

振り向いた瞬間、少女が彼の胸元まで近づいて見上げていた。まるで抱き合わんとするくらい近く。

神秘的なほどの美しさ　可愛らしさではなく　の少女に、男は視線をそらすことが出来なかった。

その上、少女はポーチのストラップをかけていた男の左手を右手で握っていた。

（おいおい……まいった）

「な？」

男はその瞬間、何をされたのか分からなかった。

少女が僅かに、だが確かに口元に笑みを浮かべた。その直後、彼の体は前のめりに倒れ、うつ伏せに床に伏せられた。

「え？ え？」

男は自分がうつ伏せの状態で後ろ手に関節を固められていること、そして少女が背中に膝で押さえつけているのだと気づくのに五秒は

かかった。

「悪趣味な人ね」

少女の声が背中越しに聞こえた。先程の内気な感じは微塵もない。代わりに氷のような冷たさが刺すように彼の耳に響いた。

「よく分からないけど、普通に現像できないような写真を撮るつもりだったんでしょ」

「う……」

うつ伏せになった彼の目の前の床に、デジカメが音を立てて落ちた。次の瞬間、パン、という乾いた音と共にデジカメが中身を撒き散らして弾けた。

「ひっ……」

破片が彼の頬をかすめた。よけることも出来ない姿勢で、彼は自分の頬から熱いものがにじみ出るのを感じた。

背中と手を押さえつけていたものが離れた瞬間、男は飛びあがって振り向いた。

が、そこには少女の姿は無い。そのまま逃げ出そうとした瞬間、彼の背中に固いものが押し当てられた。

「う……」

壁に立てかけていたチェロが見当たらない。先程の乾いた音、そして背中に押し当てられているものの感触からしてそれは

男は震えながら両手を上げた。

「動機はどうであれ、ここまで荷物を持ってきてくれたから、この辺にしておいてあげるわ」

「き、君は……」

「世の中には、やらなくて良い事、知らなくても良い事があるの。あなたはこれまで前者をやり、そして今は後者に触れようとしている。この機会に両方を忘れなさい。それが長生きする秘訣」

「う……」

「じゃあ、このまま目の前の扉をあけて戻りなさい……振り返らずにね」

背中から固い感触が消えた。

一瞬間を置いて、男はたった今告げられた最後の忠告を無視して振り返ってしまった。

自分でもなぜそうしたのか分からなかった。おそろしい眼にあったばかりだと言うのに。

非常階段を駆け上がる少女の後姿だけが眼に入った。スカートの裾を翻し、オーバーニーから覗く太もをちらつかせながら。

しかし、それを見る男の目に邪心は無かった。

ただ畏れと、美しい者に対する説明できない情念だけが残った。

呆けたように少女が消えた非常階段を見つめる男が扉を開けたのは、それから二十分も経ってからだった。

第五章 変わるもの変わらないもの - 3

最後に大型ダンプがすれ違ったのは五分前だった。

CBR1100XXは、その黒光りする巨体と、それと同様に大柄な男、黒崎英治を乗せて敷地へと入って行った。

まだ建設の初期段階なのか、周囲を高さ十メートルほどのシートで覆った土地に、ブルーシートで養生された建築材やプレハブ小屋が点在していた。どれも、しばらく使われていないらしい。砂埃がブルーシートの皺にたまり、プレハブの横に積まれた鉄板にはさびが浮いている。

ブラックバードは中央の広場のように空いたスペースの真中に停車した。

英治はバイクを降り、脱いだメットをミラーにかけるとつまらなさそうに周囲を見渡した。

傾きかけた太陽が、シートの隙間から射し込み英治とバイクの影を作り出した。

「時間ぴつたりね」

「ああ」

英治の二十メートル前方に現れたのは、おなじみの革ジャンスタイルに身を包んだ日高祥子ご一行だった。

東京ビッグサイト屋上。

本来なら施錠されて入れないはずのここに、一人の少女が風を受けていた。

ダークブラウンのドレスとチェロのケース。

入り口で風にまくられた時と同様、少女は屋上の強風を気にすることなく歩を進めた。

屋上の縁、逆さピラミッドの角に当たる部分で少女は足を止めた。眼下に広がるビッグサイト前の広場。そこから割り出せる高さに臆

する様子も無く、少女は傍らにチェロのケースをおいて蓋を開けた。そこには、チェロのもつ木のぬくもりとは全く異質な物が詰まっていた。

最初にケースとほぼ同じ長さの黒光りする棒が表れた。長さにして一メートルは下らない。続いてそれと同じ位の長さで一回り大きい握りのついた鉄の塊を取りだし、棒状の物と平行に連結。更に逆さV字の脚、黒い箱状の物、自転車のハンドル片側のようなグリップ。そして、得体の知れない物体の正体を決定付ける存在を上部に装着した。

小型の望遠鏡のような物　狙撃用スコープ。

その完成品は、立てると少女の身長よりも一回り高かった。

その先端を少し見上げるように眺めていた少女は、空いていた左手でお下げを解き始めた。

解かれた黒髪が、風を受けてたなびく。

「さあ、いくわよ」

眼鏡を外しながら、少女は決意のように呟いた。

「こんなモン残されちゃ、おいそれと引っ込むわけにはいかないって」

英治はポケットから紙を取り出して祥子に見えるようにかざした。血文字で時刻と場所を示した紙を。

それを手から離して地に落ちるのを、祥子の背後の男達は眼で追っていた。

「で、本当に単独で来たわけ。えらいわね」

祥子だけが視線を落とさずにいた。

「まあ、応援呼ぼうにも、あの物騒なお嬢ちゃんはどうもないし。それにしても、何、あのコ？　あの歳で銃撃ちまくるなんて。おかげで手間取ったじゃない」

「……沙羅のことか」

「あら、怖い顔ね。ひょっとしてあんたのイイ人？　まあ、あれだ

け美人だったら成長したらすごいと思うけど。今更、光源氏計画はないんじゃないの、変態さん」

祥子の言葉に背後のイージーライダー五人が嫌らしい笑い声を上げる。

「ばーか。俺にんな趣味はねえ。要るんだったらリボンでもつけてあんたにあげるよ。それよか、あんたの方こそ趣味悪いんじゃないの？ その後ろのブ男達、汗臭くてしゃあねえつつの。俺にゾンビけしかけた男も、美少年にはほど遠いし。なんなら、俺が見繕ってあげようか？」

英治の台詞に殴りかかろうとする男たちを制して祥子が返した。

「あら……あなたそっちの趣味だったの。嫌ねー、最近そついうの多いわよねー。あんた、あの弟さんを依頼人に選んだの、完全に趣味でしょ」

「……」

「？」

「それより、約束通り幸人君を返してくれるんだろうな」

「……さっきの間は何？」

「まあ、それは置いといて」

「……凶星なのね」

「とにかく、約束通り一人で来たんだ。幸人君は無事なんだろうな」

「はいはい、ちゃんと連れて来てるわよ。ほら」

そう言つて眼で合図すると、男二人が両手を縛られた幸人を連れてきた。特に怪我はしていないようだ。

「英治さん！？」

「幸人君、大丈夫か」

「英治さん、沙羅ちゃんが……」

「分かつてる。心配するな。すぐに助けてあげるから」

「で、でも……」

「なあに、すぐに分かる」

「え？」

「ちょっと、何勝手に話しを進めてるの」

「……そうだな、続きは幸人君を助け出してからにしようか」

英治がミラーにかけていたヘルメットを手にした。

「あんた、この状況わかってるの？」

「分かってるよ。人質押さえて動けない邪魔者の俺を抹殺、ってとこだろう」

「そこまで分かってて何であんな台詞が出てくるのよ」

「決まってるだろう。俺が勝つからだ」

「あなた計算もできないの？ そっちは一人。こっちは私も入れて六人。勝ち目あるわけないじゃん」

祥子が目配せした。すると英治が劣勢であることを強調するかのように、男達がサブマシンガンや拳銃などの銃器類を手にした。

「あの外国人のハンターから奪った奴だな」

「そ。あんたに勝ち目があると思って？」

「なるほど。こっちは約束通り一人で来っただけによ。じゃあ、そっちがそうするなら、こっちもこうしよう」

英治はおもむろにバイクのセルスターターを押し、エンジンをかけた。

「ちょ、ちょっと逃げるつもり？」

「さあて、どうかな」

そう言いながら既に英治はヘルメットをかぶりバイクにまたがった。

「逃がしちゃだめよ！！」

祥子の声に男の一人が銃口を英治に向けた。

「レディー……GO！！」

英治がアクセルを吹かした。それと同時に男がサブマシンガンの引き金を引こうとした。

しかし。

「うがつ！？」

次の瞬間、男の手からサブマシンガンが弾かれた。いや、サブマシンガンは銃身から先が木端微塵になって、その衝撃で男が手を離し

たと言った方が正確か。

「な、何？」

英治がその隙にウィリースタートでCBR1100XXの巨体を発進させた。

「ちくしょ、逃げるぞ」

「撃てっ」

別の男達が次々に銃口を向けた。

「がつ！？」

「いつツ！？」

今度はショットガンと拳銃が破裂した。

（こ、これは……）

祥子だけはその原因に気がついた。

「みんな、物陰に隠れて！！ 狙撃されてるわよ」

一瞬呆気にとられた男達が資材やプレハブ小屋の陰に移動し始めた。まだ銃を持っている二名はもちろん、他の男達も痛む手を押さえながら鉄パイプやナイフを手にした。祥子は縛られた幸人を引っ張って別の資材に隠れた。

「おっと、やっぱそう来るか。よし……」

英治に向かってサブマシンガンが火を吹く。

弾幕をすり抜けながら、英治はメットの内臓マイクに声をかけた。

「右ミラー上。カウント5」

「OK」

イヤホンに見えない通話相手の声。

「5・4・3……」

英治はサブマシンガンを撃ってきた男に向かってバイクを走らせてカウントダウン。男はその突進を食い止めようとむやみに弾をばら撒く。

「……2・1・ゼロ」

「うつ！？」

物陰にいた男のサブマシンガンが弾かれた。その直前、右ミラーの

すぐ上を掠めるように何かが高速で飛来し、プレハブを突き抜けて男の銃に当たったのを確認できる者はいたか。

「な……まさか」

一人いた。祥子だ。まさか、と言う言葉は疑問符をつけられずに確信の言葉へと変わった。

「気をつけて！！ 貫通してるっ、動いて」

祥子の言葉に呼応して男達が物陰から飛び出す。

「へへ、それが目当てだよ。ブ男達は頼んだぜ……沙羅！！」

『了解』

イヤホンの向こうで聞こえたのは、見なくても分かる沙羅の無表情な声だった。

第五章 変わるもの変わらないもの - 4

既に夕陽に照らされ始めた東京ビッグサイト。

帰り始めた参加者のざわめきに混じって、時折重く乾いた音が響いていた。

幾ら騒々しいとは言っても、何人かはこの異音に気づいていた。だが、それはどこかでバックファイヤが鳴っているのだろうと自分の都合の良いように考えるのが普通だった。

その音源が自分達のすぐ上にあるとは。

ビッグサイトの屋上で蠢く二つのもの。

風になびく見事な黒髪と、夕陽が作り出すその影。

アルミ蒸着シートに腹ばいになり、自分の身長ほどの狙撃銃のスコップを覗く少女。

沙羅以外にそんな存在は無かった。

引き金を引いた。

爆音と共に銃身に反動が伝わったが、二脚架が接地面からずれないのは見事というしかなかった。

排出された薬莢が四つから五つに増えた。

狙うは一キロ以上先。

普通なら考えもつかない距離の狙撃を可能にしたのは、狙撃銃の性能と沙羅の腕によるところだった。

バレットM82A1。口径12.7ミリのこの狙撃銃は、銃というより砲に近かった。元々対人ではなく、対物または旅客機のキャノピーなどの障害物越しに狙撃する目的で開発された。弾丸も軍の重機関銃に使用されるものと同じ。事実、湾岸戦争では二キロ以上先の装甲車両を撃破したとも言われている。

しかし、その性能を引き出すのは引き金を絞る人間であった。とは言え、それが年端も行かないような一人の少女が成し遂げしていると想像できる者はいらるだろうか。

『沙羅、ラストワン』

「ええ（yeah）」

再び銃口が火を吹いた。スコープ越しに、沙羅は障害物の向こうの男が手にするショットガンが弾けたのを感じた。

『へへ、沙羅たんお上手お上手』

「……」

『そう怖い顔すんなって』

どうやったら二キロ先でイヤホン越しの相手の顔が見えるのか、英治の言葉は当たっていた。

「ほら、後はあなたの番よ」

『へいへい。じゃ、早めにこっちに来いよ』

「な……何なのよ……これ」

「……」

祥子だけが声を出せた。傍らの幸人は声も出なかった。五人のうめき声が聞こえた。みんながそろったように右手を押さえて。

無理も無い。撃ち抜かれたのは銃本体だけとは言え、装甲車も撃破するような銃弾の衝撃がグリップ越しに伝わったのだ。何人かは指や腕を骨折しているに違いない。

「狙撃だつてのを見抜いたのはすごいけど、それを躲す余裕はお仲間」
間に無かったみたいだな」

停車したバイクから英治が降りた。

「ズルイわよ、狙撃させるなんて」

「あのさー、人質とつてタコ殴りにしようってのはずるくないのか？ それに俺は約束やぶっちゃいないぜ。ここに来たのは俺一人。沙羅がいるのは二キロ先」

「沙羅？」

「え？……」

英治の言葉に幸人も反応した。

「ふふふ……」

最初怪訝な眼が、次の瞬間意味ありげな光をたたえた。

「なるほど、そういうことね。ようやく分かったわ。あの腕つぶしも、ぞつとする位の美貌も……私と同じだからなのね」

「え？ え？」

「ま、美貌つてのは言い過ぎかもな」

幸人だけが状況を把握しかねている。

「でもよ、あんたがそうだってのは見た瞬間に分かったぜ」

「あら、そう？ だったら早く手を引いたほうがいいんじゃない？」

「そうはいかねえ。俺はあんたら専門なんだよ」

銀の切っ先が祥子の鼻先にベクトルを合わせる。

「へえ、そこまで言うんなら、こつちも本気で相手しようかしら」

祥子のジャケットの袖から何かがするりと右手に落ちた。

右腕を振ると同時に空気が悲鳴を上げた。

地を叩く音に遅れて、祥子が右手に下げた物の正体があらわ露になった。

「うわゝ、男の趣味が悪いだけかと思ったら、女王様だったの。あんたも人のこと言えないね」

「ふふん、粹がっているのも今のうちよ」

祥子は右手から垂れ下がる自分の身長ほどのそれ 表面が銀ラメのように光る黒い鞭を後ろ手に廻した。

刹那

「！？」

英治はバックステップで半歩分下がった。結果は後から訪れた。

英治が先程まで立っていた地が土くれを巻き上げた。それは爆発したとも言って良いほどの激しさであったのに、破碎音は後から聞こえてきた。

「あら、惜しい」

祥子が抜け抜けと台詞を吐いた。亜音速と化した鞭の先端で土をえぐる。常識を超えた技能を彼女は右腕一本でやってのけた。

「へへ……感染者だから出来るって芸当じゃないな。感染する前からピシピシやってたんだろ、女王様」

「抜かせ!!」

英治の言葉に激昂した祥子が右腕を立て続けに振るう。

感染者の卓越した運動能力により、祥子の右肘から先は残像としか映らなかった。更に常人でさえ音速を超えることもある鞭の先端は、祥子の手によって無数の超音速飛来物として英治を襲う。

それを右に左に前後にと躲し続ける英治だったが、時間にして三秒が限界だった。

「ぐっ……」

超音速の先端が英治の右脚を掠めた。掠めただけなのに、飛び散ったのは表層のジーンズの生地よりも鮮血が大半を占めていた。

「どう？ 表面に工業用ダイヤモンドをちりばめているの。掠っただけでも肉ごと持っていられるわよ」

その物騒な代物を右手に戻し、祥子は艶やかとも言える笑みを浮かべた。この後に飛び散る血肉の量に酔いしれながら。

「さあ、あと何秒もつかしら？」

祥子が小刻みに腕を振るう。それにつれ空気を切り裂き、時折英治の四肢を掠める音が混じる。祥子の手には明らかに加減がされていが、それでも亜音速の先端を完全とは言わないでも躲す英治の動体視力と運動神経は賞賛に値すると言えた。

だが躲しつづける事は体力の消耗を意味する。ましてや相手が感染者で手加減を加えているとなると、時間の経過がどちらに味方するかは明らかだった。

「ち……」

「息が上がってるわよ。そのナイフは飾り？」

返答は無かった。祥子の指摘は正しかった。どんなに有効な対抗手段を持っても、それを打つためには間合いが遠すぎる。今こそ遠距離狙撃によるサポートが有効となるはずなのだが、祥子一人を残した時点で沙羅をこちらに呼び戻したのは失敗だった。

「じゃあ、そろそろ楽にしてあげる!!」

沙羅のサポートが無いのを悟ったのか、祥子は右腕を大きく振り上げて必殺の一撃を構えた。

「うわあああっ!!」

「!？」

予想外の攻撃に祥子の反応が遅れた。

いや、それは攻撃と言っているのか。

後ろ手に縛られたままの幸人が、祥子に向かって闇雲に突進してきた。

前さえ見ていないようなそのタックルは、逆に不意をつくのには効果的だった。

「ちっ」

「うっ……」

難なくそれを半身で躲し、通りすぎる間際の幸人の後頭部に手刀の一撃。幸人は意識を失いながら地に伏した。

だが、幸人の行動は英治が間合いを詰めるには充分過ぎるほどの功績だった。

「もらった!!」

「!？」

振り向いた祥子の眼前に英治の顔が。

そして切っ先が祥子の左胸を狙う。

二人の体が重なった。

抱擁とも言える姿勢で、先に動いたのは英治だった。

「ちっ」

続いて祥子が後方にステップ 英治の間合いの範囲外に。

「今度こそ誉めてやるわ、深追いしなかったことに」

祥子は左腕上腕を英治に誇示するかのよう上げた。上腕からは鮮血が滴り落ちていた。

祥子は急所への一撃を、左腕を犠牲にすることで防いでいた。さらに左腕に突き立てたナイフを絡めとり、反撃の一手を加えるはずだ

った。

が、瞬時にそれを察知して一步退いた英治も見事であった。

「さすがに血が止まらないわね……これじゃ吸血鬼とも言えども傷が残っちゃうじゃない。どうしてくれるの？」

「知るか」

「こついつのはどう？ 腹いせにあなたにお仕置してあげるの。この鞭でね」

「さすが女王様。やっぱり本性はそれか。でも、俺がおとなしく従うと思う？」

「これならどうかしら」

「何！？」

祥子の鞭がしなった。しかし、それは英治とは別の方向に走って祥子の元へと戻った お土産を持って。

「幸人クン！？」

祥子の鞭は器用にも後ろ手に縛られた幸人の縄だけを絡めとり、大人一人の体重を引き寄せたのだった。

「そう。あなたが抵抗すれば、この美少年の顔が整形でも戻らなくなるようになるわよ」

気絶したまま、力なく祥子の足元にうずくまる幸人の背中を、それこそ女王様気取りで押さえつける。

「さあ、どうする？」

「卑怯な……」

「何とでも言いなさい」

そういつて高笑いする祥子。

歯噛みする英治。

だが。

「うがああっ！！」

高笑いは中断され、悲鳴と絶叫の混声へと変わった。

一発の銃声をトリガーに。

「沙羅」

「間に合ったようね」

「いつもおいしいところとりやがって」

チェロのケースを左手に抱えたまま、沙羅の右手のパイソンが硝煙を上げていた。

祥子が左眼を押さえながら地べたを転がっていた。鮮血が転々と土を染める。

「醜いのはその心？ その赤い血？ それとも両方？」

沙羅が謎めいた言葉で歩み寄る。

「こ……の……」

祥子は何とか立ちあがったが、左眼だけは押さえたままだ。

「どう？ 炸裂式水銀弾頭の味は？」

「私と……同族のくせに……なぜ……」

「今のあなたには理解できないでしょうね。まあ、語る気もないけど」

「……ふふ……気が変わったわ。先にお仕置しなければいけないのは貴方の方ね、気取ったお嬢さん」

「出来る？」

「やってやるわよ……次の機会にね！！」

「！？」

祥子が後ろ手にしていた右手を前に突き出した。瞬間、手に持っていたモノが閃光と轟音を撒き散らした。

「……スタングレネード」

「だな……逃げられた」

二人が眼を開けたのは五秒後。だが、それは深手を負ったとはいえ感染者の祥子が逃げるには充分過ぎる時間だった。

スタングレネード 対テロの特殊部隊等が、テロリストが籠城した建物や乗り物に投擲し、その閃光と轟音で相手をひるませて突入するための標準装備とも言えた。おそらくゾンビ化させたハンターの装備だったのだろう。

「お、タイミングぴったり、かな」

倒れた幸人を抱え起こそうとした英治が、工事現場入り口から射し込むヘッドライトに眩しそうに眼を細めた。もつとも、英治も沙羅も近づく前からその車のエンジン音で気づいていたが。

黒塗りの大型バンが二台、続けて急停止した。

その後部ドアから全身黒ずくめの男達が足早に降り立った。

ケプラー製フード、強化樹脂ゴーグル、防弾ベスト、そして手にしたサブマシンガン『MP5』 典型的な特殊部隊の出で立ち。

その中であって最後にゆつくりと助手席から降りてきたのは対照的な存在の女性。

「沙羅ちゃん！！」

声だけで誰か理解できた。厚生労働省・吸血症候群対策課の加嶋冬美。

が、その経歴しか知らない特殊部隊装備の猛者たちは、黄色い声をあげて沙羅に駆け寄る冬美にどんなテロリストよりも不意をつかれた格好になった。

「もーん、沙羅ちゃん大丈夫？」

「……」

飛びついて膝立ちになって頬擦り。もちろん沙羅は逃げることもあきらめている。それをゴーグルの奥から横目で見ながら、冬美の脇の二名以外はまだ倒れたままの祥子の手下達を捕縛しにかかった。

「まあーん、沙羅ちゃん、今日はドレス着ていてくれたの？ やっぱり私が思ってたとおり、とおーってもよく似合うわよ。写真に撮らなくっちゃ」

「おーい、冬美さん、俺にはねぎらいの言葉も無しかよ」

きやあきやあ一人で話を進める冬美に完全に無視された形の英治。

「あら、いたの」

本当に今気付いたというように名残惜しそうに沙羅から離れて向き直る。

「結構大変だったんだぜ」

「そつみたいねえ」

いつものトゲはどこへやら、妙に愛想良く笑って冬美が歩み寄る。

「そうそ……」

最後の言葉が途切れた。いや、揺れた。

英治にも、冬美の脇の特殊部隊員二名も眼で追うことは出来たがその行動の意味はすぐに理解できなかった。

冬美の強烈な右フック。

プロボクサーでさえ惚れ惚れするような速度と重さで英治の左頬を直撃。英治でなければ3カウントKOだっただろう。

「なっ!？」

反射的に掴みかかろうとする英治を、両脇の隊員が銃口で制止した。

「ぐっ……、冬美さん、どういう……」

「あなた、自分が何したかわかってるの!？」

怒気を含んだ、では表現に足りないほどの激昂。

「言っただでしょう、慎重に行動しろって。焦っても失敗するだけだつて。なのに、確証もないまま単独行動して空振りしただけならまだしも、その隙に事務所を襲われてクライアントを誘拐されるなんて、最低もいい所ね」

「……」

「それに、沙羅ちゃんにあんな危険なマネをさせるなんて……あの子ならちよつと位は大丈夫だと思っただけ? 沙羅ちゃんを囿にしたって言うの? そんな危険な眼をさせるためにあなたに預けている訳じゃないのよ。あの子には……あの子にはもつと普通の……」

「冬美さん」

無言を通す英治に代わって沙羅が声をかけた。呼びかけたただだが、そこには制止の意味が込められていた。

「……今回は、沙羅ちゃんに免じてここまでにしておいてあげるわでも、決して許したわけじゃないわよ」

「……わかった」

「とにかく、このチンピラの後始末はこちらでするわ。感染者じゃない以上、厚生労働省の管轄外。彼等に任せるわ」

「警察？」

沙羅がほぼ確証を得ながらも尋ねた。

「そう、さすがは沙羅ちゃんね」

「自衛隊や海保以外に、これほどの突撃装備をするのは一つしかないわ…… S A T（特殊急襲部隊）？」

「そんなところ」

言葉を濁したのは、縦割り社会の日本で別の省庁に協力依頼したことに引け目を感じているのか。

「それと、あなたを襲ったゾンビ達の方はこちらで調査するから。元ハンターの」

敢えて視線を合わさずに義務的に冬実が英治に告げる。

「感謝するよ」

「勘違いしないで。あなたのためじゃない。沙羅ちゃんの依頼だから」

冷たく言い放った頃、両脇の二名以外の隊員が拘束したチンピラを伴ってバンに消えた。

「戻ります」

踵を返す冬美に、両脇の隊員は無言で返して後を追った。

二台のバンのテールランプが、すでに夜の帳を迎えた産業道路を遠ざかっていった。

「……どうして黙っていたの？」

先に沙羅が訊いた。

「何の事だ？」

「今更とぼける気？ 今回の単独行動はわざとやったって事……相手の裏をかく作戦だったって」

英治は答えず、地に唾を吐いた。右フックで口内を切ったのか、血混じりの唾を。

「最初にあの感染者……尾谷の発信機兼盗聴機に気付いたのはあなた。でも、それを利用して背後の組織を引きずり出そうと提案したのも、囹役をかってでたのも私。あなたはそれにしがったまで」

二重の計略だった。尾谷の発信機には気付かない振りをし、別ルートから尾谷の行動を追う。そうすれば尾谷の背後の組織は待ち伏せをかけることも、奇襲を仕掛けることも出来る。一度に二人を始末できなくても、人質に幸人を押さえれば残り一人の始末もたやすい。それを逆手にとって、背後の組織をおびき出し、戦力を奪う。それに

「あいつにはばっちり取り付けた」

「ええ。確認したわ」

「さすが」

「そうやって話をはぐらかす気？ 素直じゃないわね。冬美さんに説明すれば良かったのに。彼女の印象、ますます悪くなったわよ」

「あんなのに誉められるほうがぞっとする」

「あら」

「それに、賛同したのは俺の意思だ。それで俺が責められても文句はいわねえよ」

「ふふ……そういうところ、あの人に似ているわね」

沙羅の英治を見る眼に、どこか懐かしい雰囲気混じっていた。遠くを見るような眼差し。

どこか戻れない遠くを。

「その話はよせ……あいつの話は」

決まりが悪そうに、英治は気絶したままの幸人を抱え上げた。

第五章 変わるもの変わらないもの - 5

「ほら、幸人、こっちこっち」

春の日差しの中で、姉さんが手招きしていた。
どこだっけ？

そう、確か花見代わりに行った横須賀の観音崎。

「幸人、向こうまで競争よ」

波打ち際で手を振る姉さん。夏の茅ヶ崎は、夕暮れになっても日差しがきつかったっけ。

「すいませ〜ん、写真、お願いできますか？」

姉が道行く観光客の一人にカメラを手渡していた。

あれは 東京湾フェリーで行った、千葉の鋸山の頂上。紅葉で観光客も賑わっていた頃。

「ふふ……」

姉さんが、微笑をたたえて戻ってきた。

どうしたの、姉さん？

「あのおばさん、私達の事、何て言っていたと思う？」
え？

「とってもお似合いのカップルだって」

はは、そんな……

確かにそんなに歳は離れてないけど……そう見えるのかな？

「……幸人」

何？

「幸人は嫌？ 私と恋人同士に見られること」

？ えっと……

「私は……」

？

「うっん、何でも無い」

……

「ねえ、ゆき」

眼を開けると、同じ布団で寝ていた姉さんが自分を見つめていた。そう、まだ自分が小学校に上がったばかりの頃はそうだったわけ。

なあに、おねえちゃん

「ずっと、一緒だよ」

？

「このまま大きくなって、結婚したら、ずっと一緒だよ」

でも、きょうだい姉弟は結婚できないって、おじちゃん言ってたよ

「ええ、そうなの？」

その時の姉の悲しそうな顔。

今更、思い出すなんて。

でも、姉さんなら良いお嫁さんになれるよ

「またあ、おだてても何も出ないわよ」

高校の学生服の詰襟を調整しながら、台所に立つ姉さんが背中越しに答えた。

本当だよ。姉さんくらい料理も家事も出来れば、誰もほつときやしないよ。お見合いで予定表、パンクしちゃうんじゃない？

「そう……」

姉さん？

その時の姉さんの背中が、とても悲しそうだった。

そう、あの時のように。

小さい時に布団の暗がりの中で見せたあの表情のように。

「幸人」

姉さん？

不意にあたりが暗くなった。

「幸人」

姉さん、どうしたの？

「逃げて」

え？

「……さん」

「……ん」

「幸人さん」

「え……」

目を開くと、幸人のぼやけた視線に何かの輪郭が映った。

「姉さん？」

「！？」

今度ははっきりと見えた。

上体だけ飛び起きた幸人の視界に飛びこんできたのは、深い黒い瞳が印象的な美貌の少女。

沙羅だ。

（……姉さんと間違えるなんて。そういや、姉さんの夢を見ていたような）

「幸人さん」

「はい？」

「放してくれる？」

「え……あつ、ごめんっ！！」

幸人は慌てて手を放した。沙羅の両手を握っていた両手を。

「ごめん、沙羅ちゃん、寝ぼけていて」

「別に」

そう言つて沙羅が窓のブラインドを上げた。

朝の柔らかい日差しが差し込む室内。

そこは、黒崎探偵事務所です。幸人に与えられた部屋。

そう、あの襲撃を受けた

「沙羅ちゃん」

「何？」

沙羅が背中越しに答えた。とりつくしまもないほど素っ気無く。そう、まるで何事も無かったように。

あの襲撃も、胸に何発も受けたクロスボウも、何も。

なるほど、そういうことね

祥子の声が胸に去来する。

ようやく分かったわ。あの腕っぷしも、ぞっとする位の美貌も

……

その先は

私と同じだからなのね

「そ……の」

「知りたい？」

「え？」

沙羅の言葉には、決して拒絶の感情は込められていなかった。
でも。

「訊くだけの価値があると思えば……そうしてもいい」

「沙羅ちゃん……」

それ以上は言葉が続かなかった。

沙羅の言葉に感情は微塵も無かった。そう、機械のように。
まるで何度と無く繰り返し返されてきた質問に、無意識に応答するよう
に。

そうなるまで、幾年という言葉をどれくらい重ねれば良いのだろう。

「ごめんなさい」

「え……」

「あなたを騙していて。でも、確実にお姉さんの居所を掴むために
したことなのよ」

沙羅は昨夜の経緯を語った。

たった一つの事実を除いて。

「何？」

英治がデスクトップのモニタに向かって訊いた。

『嘘じゃないわ』

正確には、装着したマイクセットの向こう、加嶋冬美に対して。

『今、情報そっちに送ったわ。画面の左下』

テレフォニーシステムを使用した音声と画像他の電子データの情報交換。大企業のコールセンタ並の機能を流用して、英治と冬美は膨大な情報を共有していた。

「これは……」

棒グラフを波状に羅列したシンボル。その脇に配置された数値や記号の群れ。

『ゾンビ……あの元ハンターのゾンビの死体。残った肉片の血液検査結果。知っての通り、ゾンビを造った元の感染者の血液が僅かに混じっている。そこからゾンビを造ったものを割り出したの』

「この染色体はダブルエックスXX……女か」

『そう』

「ってことは、あの日高祥子って女王様か」

『……そう思うわよね』

「何？」

『私も、そう思って調べたの。でも……今、廻りに誰もいない？』

「？ いないよ。幸人くんも、あんたの恋しい沙羅たんも」

『そう』

「突っ込みなしかよ」

『そんな状況じゃないから』

「どうした？」

『それは……』

その会話が終わったのは、幸人が目覚める二時間前だった。

第五章 変わるもの変わらないもの - 6

真昼だというのに、そのオフィスは闇に閉ざされていた。

パーテーションで仕切られたデスクの整然とした列。全ての机にはモニタとキーボードが備え付けられているところは、外資系かIT系の企業だろうか。

だが一つとして点灯しているモニタは無く、電話のコール音はおろか、ハードディスクの静かな唸りさえ聞こえない。

休日であればその静けさも理解できる。だが、今は平日だ。事実、ブラインドを降ろされたガラス窓の向こうでは、遙か三十階下の歩道をスーツ姿のビジネスマンが携帯電話片手に歩き回っている。

それでいながら、その異常に気付く者はいなかった。社員だった者を除いては。据付の電話機の代わりにPHSを社員にあてがい、外部とのやり取りの大半はメールで行う。そのような先進のビジネス形態が、ビルの一角を占める新鋭企業の『死滅』という異常事態に外部が気付くのを遅らせる原因となった。

「ひいっ」

闇で何かが呻いた。続いてカーペットを何かが這いずり回り、僅かにドアの下の間隙から漏れる人工光が照らすエリアに移動した。

「わ、わたしだって一生懸命やったわよ」

尻を着いた姿勢で後ずさりしてた背中が、ドアにぶち当たった。

日高祥子だ。

「まさか、あんなガキがいるなんて……」

包帯で顔の左半分を隠した顔が、暗闇の中の存在を見上げていた。

「それに……」

続けて言い訳を口にしようとした祥子の口が硬直した。目の前の存在に圧倒されて。

どんなに目を凝らしても、常人にはその暗闇に居るモノが見えなかったであろう。だが、確実にそこに居た。そして、祥子はそれに怯

えていた。

「つ、次こそは必ずやるから……」

怯えが、懇願に変わった。

いや、懇願と言うには表現が綺麗過ぎる。まるで捨てらるのに気付いた子犬が鳴く時のような悲痛さがそこにはあった。

言うなれば『哀願』か。

「お願い……私を捨てないでよ、ね？ 何でもするから。わたしは……わたしだけはあんな風にしないで……お願い……」

その声に反応したのか。

あんな風に、と侮辱された事にはもはや永遠に気付かない存在が、闇の中で蠢いた。

祥子が怯える存在の背後で、ひとつ、ふたつ。

そして、数え切れないほどの存在が、呻き声を上げて。

死んでいながら死に切れないもの達の悲痛の叫びが、混声の合唱となつて祥子を責めたてた。

だが、闇の中の存在が、気迫だけでそれを制した。

「……許してくれるの、ねえ、許してくれるのね？」

ほんの数時間前まで英治相手に鞭を振るっていたのと同じ人物とは思えないほど、祥子の声は情けなかった。

部屋が一瞬明るくなった。

それが窓の外の強烈な稲光によるものだということは、一秒遅れて窓を振るわせた音で判明した。

「許して……くれるのね？」

雷光が再度部屋を明滅させた。

無数の虚ろな眼球と、一つのにやけた口元から覗く歯が暗闇に光った。

「何やってんだ？」

後ろ手に閉めた防音ドアに持たれかかりながら、英治はとりあえず訊いてみた。

「見て分からない？ 射撃訓練」

まさしく英治が予想していた答えが返って来た。一発の銃声と共に。
「ま、ここは射撃訓練室だし、沙羅たんがそこで訓練するのはいつも通りだけど」

また銃声が響いた。

「けど？」

手ぶらの沙羅が英治に向き直った。

「だから、何で幸人くんが銃を握ってんだよ？」

乾いた音が二人のやり取りと関係無しに続いた。

黒崎探偵事務所の地下室。とは言っても、沙羅が尾谷相手に注射器を握っていた部屋とは別の空間。

地上にある建物が占める面積の約半分ほどの空間が、コンクリートと防音材の壁で区切られていた。

奥にはレールで前後できる標的が五枚吊り下げられ、反対側、一つしかない防音扉側には射撃台がパーテーションで仕切られている。いつもなら沙羅以外は立つことの無いこの場所に立つのは、リボルバーを両手で支え、イヤープロテクターとゴーグルを装着した幸人は英治が入ってきたことに気付かず黙々と標的めがけて引き金を引いている。が、その努力も空しく、標的の表面は綺麗なままだ。

「どういう風の吹き回しだ？」

「私も、最初は反対したわ。でも」

「でも？」

「え？」

幸人の言葉を聞いたとき、沙羅でさえ声に一瞬戸惑いが混じった。

「だから、僕にも銃の使い方を教えて欲しいんだ」

「なぜ？」

「僕も、姉さんを助けるために何かしたいんだ。なのに、あの女の人に捕まったり、英治さんが助けに来た時だって何の役にも……」

「そんなことは無いわ。言ったでしょう、あれも作戦の内だって。あの時だって、幸人さんが体当たりしてくれたおかげで英治も命拾いしたようなものよ。胸張って良くくらいだわ。むしろ、作戦とは言え黙っていたことを謝るのは私達の方」

「……だったら、その代わりに教えてくれないかな？」

幸人の幼稚ともシンプルとも言える交換条件を無視して沙羅が続けた。

「言わなかった？ 武器を手にするのは臆病者のする事だって」

「それでも構わない。今は、それしかないから。少なくとも、今はそれしか選択肢は無いって思ってる」

少し痛いところを突かれた。自分が過去に言った台詞で返されるとは。

何よりも、幸人の眼の奥に潜む決意の深さに負けた。その奥に、何か別の理由が 幸人本人でさえ気付いてないような別の理由が見え隠れしたような気がしたが、少なくともこのままでは引き下がりそうにないと思っただ沙羅はとりあえず方法だけは教えることにした。

「まあ、本当に幸人さんに加勢を頼むつもりはないけど。ハワイにでも行って射撃体験しているのだと思ってもらえればいいわ」

「……」

「英治？」

「……」

英治は一心に標的に視線を送る幸人の横顔に見入っていた。

「うーん、ああいう真剣で男らしい表情、いいねえ。いつもじゃないくて、時折見せる、ってのがいいんだよね」

「……英治」

「おっと、どうした沙羅、怖い顔して？」

「別に。それよりも訊きたいことがあったんだけど」

「何だ？」

右の耳だけで沙羅の言葉を聞きながら、視線は幸人の方を向いてい

る。

「ビッグサイトに行かせたの、なかなかうまい作戦だったわよ。あの時期、同人誌の即売会とかでコスプレ、っていうのかしら、個性的な格好している人が多かったし。バレットをケースに入れてうるうるしていても怪しまれないしね。でも、あの格好って何？ あれも何かのコスプレなんだろう？」

「は？」

「は、じゃないわよ。そうでもなければ、あんな恥ずかしくて目立つ格好させるわけないでしょ？」

「そっか、今、そういう時期だっけ。忘れてた」

「え？」

沙羅の声が強張った。

「いや、あの格好、冬美さんが贈ってきた服の中にあっただけどさ。どうせ沙羅のことだから着ないと思ったんだけど、この前の罰ゲーム、あれで降りてのは俺的に納得いかなかったからさ。とりあえず嫌味のつもりでケースの脇に置いておいたんだけど、沙羅が律儀に着てくれるんで俺も驚いたよ」

「……」

沙羅のすぐ近く、いや沙羅の方から何かがちぎれたような音がしたが、彼女の表情は硬いほど変わらなかった。

「そっか、コスプレか。今度あのカツコして冬美さんところ行くか？ そんで写真撮ってもらえよ。それをネットで掲載したら、結構人気出るかもな。結構マニア受けするかもよ、自分よりでかいビオラのケース持って、オーバーニーとめくれたスカートの間に覗くフトモモなんて、萌え萌え要素かもよ？ なーんてな、ひやはは……って、こら沙羅、何でこっちに銃を向ける？」

いつのまにか取り出したバレットの銃口を、沙羅は銃本体よりも冷たい視線と共に英治に向けた。

「どうせ練習するなら、動く標的の方が良くなくて？」

「おい、沙羅たん、何怒ってんだよ」

「私はいつでも冷静だけど」

どうみても後コンマ一ミリで引き金を完全に絞りきるところまで力を込めていた指が、不意に緩まれた。

「やった!!」

幸人がイヤープロテクターを外して歓声を上げた。

「見て、沙羅ちゃん、当たった当たった!! ど真ん中じゃないけど……あれ、英治さん、居たんですか?」

その英治の命を、図らずも救うことになったとは露知らず、幸人は英治にも最高の笑顔を送った。

「幸人くん、君は命の恩人だ……」

空気が抜けた風船状態でへなへな崩れる英治。

「え? そんな、昨日のお礼はもういいですから」

「いや、その……」

「呑み込み早いわね、幸人さん。お疲れ様」

「そうかな?」

そう言いながらも照れて頭を掻くところはどちらが年上か分からない。見た目の上では。

「まあ、区切りがついたところで風呂でもはいつてくるかい? 沸いてるぜ」

「はい。じゃあ、ちょっとお先に」

余程嬉しかったのか、鼻歌交じりで地下室を後にする幸人。

「あら、後を追わないのね」

「あのなあ、俺のことをどう見てんだよ」

「ありのまま」

「どういう意味だよ」

「それより、何の用? ただ様子見って訳じゃないでしょう? 話でもあるの?」

「さすが」

「何年組んでると思ってるの。それくらいわかるわ。それに、幸人さんをさりげなく追い出したりして」

「そこまで分かってりゃいいか。ま、ここじゃ何だ、上に行こう。風呂から上がったも、まだ俺達二人が戻ってないんじゃないや逆じゃ怪しまれる」

「そうね」

階段を上がる二人。英治がいつも以上に慎重なせいか、どこことなく緊張した雰囲気 flowed。

「ん？」

先にそれを解いたのは英治だった。

「雨が来るな」

雷光が一階の踊り場を照らした。程なく乾いたアスファルトに黒い染みが点々と広がり、面積を増した。

耳朶を打つ雨音。それが一層激しくなる頃には、英治と沙羅の姿は居間にあった。

「幸人クンの努力は無駄になるかもしれねえ。いや、無駄に終わるようにはしなきゃいけない」

唐突に切り出す英治の声を、沙羅は窓を激しく叩く雨粒を背景に耳を傾けた。

第六章 シルバー・エッジ - 1

また夢か。

夢を見ているって事は、僕は眠っているって事なんだろう。

適度な疲労が熟睡をもたらす、って言うけど、こうやって夢を見るって事はそれほど疲れていないのかな？　沙羅ちゃんの指導、結構きつかったと思うんだけど。いや、夢は誰でも見るけど、目が覚めた時に覚えていることが少ないんだって聞いた事もあるし。

「いい？　ただ銃口だけを標的に向けてはだめ」

沙羅ちゃんだ。

「っていうと？」

その横には僕が居る。それを自分が見ているということとは、やっぱりこれは夢なんだろう。

「支えた両腕と銃口でつくるベクトルが、まっすぐに標的を狙うように。片手で撃つなんてのは余程慣れてる人がやること」

昼間の台詞と全く同じだ。

「さあ、やってみて」

「うん」

遠くで見えていたはずの自分が、いつの間にか沙羅ちゃんの横で銃を握っている自分に代わった。

引き金を絞った。

「やった」

「呑み込みが早いわね」

ここらへんは現実と違うのも、夢ならではの。

「じゃあ、次は動く標的が良いわね。あれなんてどうかしら？」

「え？」

夢を通り越して悪夢に変わった。

「姉さん？」

暗闇の向こうで、姉さんの後ろ姿がぼうつと映った。

「どうしたの？ 姉さんを助けたいんでしょう？」

「どうしたのって、あれ、姉さんじゃ……」

「それで姉さんを助けられると思って？」

「そんな、矛盾してるよ沙羅ちゃん。」

「傷つけない事が助けることなの？」

何を

姉さんが振り返った。

姉さんは悲しい顔をしていた。

ええ、そうなの？

小さい頃布団の中で見せたような。

そう……

台所で背中越しに見せたような。

ゆっくりと自分に近づいてきた。

悲しい表情のまま。

銃口が、姉さんの胸に触れた。

久しぶりに姉さんの顔を間近で見たような気がする。

夢なのに、現実よりもリアル感じた。

姉さんの口が開いた。

「っ！？」

幸人が眼を覚ました時も、雨はまだ降り続いていた。

窓ガラスを叩く雨の音は騒々しく、時折響く雷鳴は窓を更に震わせた。

夏だというのに、気味の悪いほどの冷や汗が額を伝った。

幸人は頭を振った。

夢の中身は良く覚えている。射撃訓練をしていたことも、姉が出てきたことも。

だが、最後だけが思い出せない。

引き金を引いたのか、引かなかったのか、それとも引けなかったのか。

そこだけが。

「二時半……」

傍らの目覚まし時計で時刻を確認した。確認して二つの事に気がついていた。

「……いつのまに寝たんだろう？」

風呂から上がると、英治と沙羅がテーブルに食事を並べていた。どっちが作ったのかは聞いていなかったが、多分英治だろう。その後、英治の勧めでビールを飲んだような気がする。そういえば、沙羅が妙に慣れた手つきでお酌をしてくれたような。

そんな事をぼんやりと考えながら、幸人はもうひとつ気がついたことを確認しに居間に行った。

テーブルの上には食器が並べられたままだ。三人分の食器のうち、空なのは一人分だけ。残り二人分はほとんど盛られたときのままだ。

「沙羅ちゃん？ 英治さん？」

返事は無かった。沙羅の部屋も、英治の部屋も鍵はかけられていなかった。一応ノックはしたが、反応がないだろうということは勘でわかった。

「こんな夜中にどこへ？」

玄関や窓はきちんと施錠されていた。ということは、二人が外出したことは確かなのだが、その理由が分からない。

幸人は事務室に移動した。そこだけぼうつと光が漏れていた。

光っていたのはモニタだった。英治が時々何かの調査で使用してらしい。今は標準のスクリーンセーバーがかかっていた。

何気なくマウスに手を伸ばす幸人。

「これは……」

元に戻った画面を、幸人は憑かれた様に見つめていた。

第六章 シルバー・エッジ - 2

東京都大手町。

東京駅から徒歩三分、さらに複数の地下鉄が交わるこのビジネス・センターも、終電を過ぎて一時間もすればさすがに人通りもまばらとなる。

特に今夜のように雷雨という条件が重なれば、終電を逃してタクシ―を待つ行列が数割増える分、道行く人の影は皆無と言って良い。そんな雨の帳の中を、二つの影が通り過ぎて行く事に気付く者はいなかった。

極端に高さの違う影二つを。

ましてやその影が、明りの絶えたガラス張りのビルに入って行く事も、そしてそのビルのどんな用事があるのかさえも。

どのようなマジックを使ったのか、その二つの存在は優に三十階は超えるビルの電子ロックされた通用口を開けて中へと入った。

「以外と手薄ね」

小さいほうの影が、雫の垂れるレインウェアを脱ぎ捨てながら言った。

「いや、こういうところは意外と電子ロックに頼りすぎて、人の警備がおろそかになってるもんだ」

背の高いほうが同じくウェアの雫を払って返した。

「なるほど、英治の十八番ってわけね」

「沙羅もそのうち勉強したほうがいいぜ。アナログも良いが、今のデジタル社会に対抗する手段もな」

幸人が探していた二人 英治と沙羅 はここにいた。無論、探されているということに二人が気付く余地はなかったが。

「あら、そうしたらあなたの存在価値が無くなるんじゃない？」

「良く言うぜ」

英治はヒップバッグから十センチ四方の板状のものを取り出した。

軽い起動音と共に片面にグリーンの光点や線が浮かび上がった。

「動いてないな。奴等、さすがに俺等が同じ手で返すとは思っちゃいないらしい」

英治が手にしているのは探知機であつた。祥子に取りつけた探知機。英治が祥子との直接対決の際に取りつけた物であつた。確かに、全く同じ手で返すとは相手も思わない。確かかつ最短の方法と言えた。

「どこ？」

「上だ……頂上の三十階」

「エレベータは大丈夫？」

「ああ。警備室のモニタは入るときに細工しておいた。こういう時、どの端末からでもホストセンターに繋がってるのは良くねえよな。どんなにプロテクトかけてても、手間さえ惜しまなければ幾らでも破る方法はある」

最初の言葉が終わらぬうちに、沙羅が右手側にあつたエレベータのボタンを押した。

ものの五秒と経たない内にエレベータの扉が開き、中の照明が二人を照らした。

「……いいの？ 幸人さんに真相を知らせずに」

三メートル四方の鉄の箱に閉じ込められて五秒後、珍しく沙羅の方から問いかけた。

「知らせてどうする？ どうせこの仕事が終わったら忘れてもらうつていつても、無闇に真実を知らせて混乱させる必要もねえだろ」

英治の応えは硬かつた。

「そうかもね。でも、いつか彼がそれに向き合つとしたら？ 真実に直面する必要があるとしたら？」

「……おまえらしくもねえ。いつものお前ならこう言うだろうな。

『世の中には知らなくても良いことがある。知らないほうが良いこともある』ってな」

横に並んだ姿勢のまま、二人の視線は明滅する階数のデジタル表示

を見つめた。

「そうかもね。でも、今回はそれに当てはまらない気がする」

表示が二十階を過ぎたところで沙羅が遅れて応えた。

「沙羅にしては面白いぶん弱気だな？　沙羅特製の睡眠薬で幸人くんはしばらく起きない。幸人くんが眼を覚ます頃には全て終わってる。沙羅たんががんばってくれるから、ぼくちん出番ないかも」

「変に突っかかるわね」

「そりゃそうさ。あんなに沙羅においしいところばっか持って行かれてるもんさ。沙羅はアシスタント、メインは俺だつてのによ。傷ついちゃうぜ、ふんだふんだ」

英治の当て付けにも動することなく、沙羅は返した。

「そう……なら……」

二人の乗った空間が減速を始めた。

「この階で振り返り咲きつてのはどう？」

エレベータが停止した。目的の階の一つ下、二十九階で。

「なるほど。向こうも一気には行かせてくれないみたいだな」

エレベータの扉が開いた。

「そうね」

完全に消灯したフロア。エレベータからの光が届かない範囲は深遠の闇に包まれていた。

そこに

二つ横に並んだ光点が浮かんだ。

四つ浮かんだ。

六つ浮かんだ。

そして、無数の光点が闇に蠢いた。

「ゾンビ……ここの社員全員か……強烈だな」

英治が右手に銀のナイフを握った。

「死んでも死にきれっていい彼等の苦しみ……出来るだけ早く抜いてあげることも主役の条件じゃなくて？」

沙羅が髪に隠れた背中からパイソンを取り出した。

「そうだな……二十秒でどうだ？」

構える英治に、一番手前のスーツ姿のゾンビが両手を伸ばしてのたり、と脚を踏み出す。

「じゃあ私が後始末でそれ以上の時間が掛かれば、あなたは見事主役に返り咲き、でどう？」

両手で銃を支える。

「いいだろう」

英治が闇の中に飛び込んだ。

第六章 シルバー・エッジ - 3

銀光が弧を描く。

始めの二秒でゾンビの首が三つ、胴体から離れた。

二列の机で挟まれた狭い領域を、ゾンビが一行になつて英治に迫る。緩慢でありながら確実に英治に両手が伸びる。

それを机の上に一列になつたモニタノ上を二つ置きにステップで躲しながら、英治が列の端まで駆け抜けるのに五秒。

ゾンビ達は前から順番に呻き声を上げながら首を落とした。

机の、いやモニタの上からふわりと降りた英治に、ここぞとばかり左右から別のゾンビが襲いかかる。

それを英治はナイフを回転させながら右手のゾンビの首を落とし、返す刀で左手のゾンビも同様に落とす。

それに二秒。

続いて右側から襲い来るゾンビ四体の間をすり抜ける英治。ゾンビと位置が重なった瞬間にのみ英治の姿が残像として瞳に映ったのを、ゾンビ達の壊死した脳細胞は頭ごと床に落ちてても理解できなかった。それで五秒。

恐れとも怒りともとれる死者の呻き声を上げて、最後の一体が英治に向かう。

五メートル先のその到着を待たずに、英治は一・五歩で懷に跳び込み、次の半歩で通り過ぎる。

その二歩で三秒。

「……合計十八秒」

英治が肩膝を付き、ナイフを右足首の鞘に収めて宣言した。

彼の通った後には、首を落とされてもなお獲物を求めて千鳥足で動き回るゾンビが十八体。

驚異的といえた。それは一体につき一秒というその速さではなく、ほとんど出血を起こしていない見事とも言つべき切断面に対してだ。

「なら、私は十七秒でいこうかしら？」

沙羅が勝利予告を宣言した。

「ほう、やってみなよ」

英治の台詞に重なって轟音の三連射。

胸に大輪の紅い華を咲かせたゾンビが三体倒れるより早く、沙羅の小さな影は残像となつて首なしゾンビの輪の中に跳びこむ。

右足を軸にして半回転。その間にパイソンに残った三発の弾丸を容赦なく右側のゾンビにぶち込む。

背後にゾンビが迫る。残弾数ゼロ。

沙羅が後方に跳躍した。バク宙の沙羅の頭と首なしゾンビの肩までの垂直距離は僅かに二十センチ。

背後に降り立った沙羅が引き金を引く。衝撃で床に伏したゾンビの体に、小さな光が六つ降り注ぐ。

それが空中で沙羅がリロードした排莖莢だと誰が信じ得るか。

着地した瞬間で七秒経過。ここまでは英治とタイだ。

ジャンプで沙羅の姿を見失ったのか、首なしゾンビの動きが各自ばらばらになった。

動き回る必要が無くなったさらには、冷たい視線に余裕さえ浮かべてパイソンのベクトルを機械的にゾンビに合わせて引き金を引く。

五体のゾンビが倒れる前に、弾丸をリングに取り付けたリロード用アイテム　クイックローダーですばやく弾丸を補充。

残り六体。経過時間は計十一秒。

僅かに沙羅がリード。

硝煙と僅かに混じる血臭の中で、沙羅は眉一つ動かさず残りの作業に取り掛かる。

右手のパイソンを支える左手を僅かに支えなおす。

五体のゾンビが向き直った。

その瞬間、間髪入れない連射音が部屋を埋める。

残り一体。英治の記録に三秒余裕を残して。

「私の勝ちね」

敢えて英治に視線を送って十八回目の引き金を引こうとした。

「!？」

「何？」

部屋の奥から何かが空中を唸り声を上げて這いまわり、ゾンビに絡みついた。

その刹那、ゾンビの体は血煙をあげて四散した。

「……まったく、役に立たないゾンビね」

暗闇に紅い光点が一つ浮かんだ。

「ちよつとはあんたの困った顔が見れると思ったのに……ねえ」

声が近づくと共に、光点を宿した輪郭が徐々に浮かんできた。

「……小憎たらしいお嬢ちゃん」

嫌らしく尖った犬歯を唇から僅かに覗かせて、日高祥子は燃えるように赤く光る右眼で沙羅を睨み付けた。

「これはこれは、女王様のお出ましか」

英治の嫌味にも眉一つ動かさず、祥子は沙羅だけを視界に収めていた。

「銀ならまだしも水銀を使うなんて……どうしてくれるの、この左眼？ 一生ただれたままじゃない、ええ？」

「あら、ならその一生、早く終わらせてあげてもよくてよ」

沙羅の銃口がまっすぐ祥子の左胸を向いた。

Shoot my Heartと彫られたタトゥーが浮かぶ豊満な左胸に。

「ふふふ……いいわねえそういう台詞。まるで本物の大人みたいよ、お嬢ちゃん。でもねえ」

右手に下げていた物を前に突き出した。無数の工業用ダイヤモンドでコーティングした鞭。ゾンビを瞬時に四散させる威力を秘めた。

「そういう台詞は体も大人にならないと似合わないわよ」

「……」

沙羅が僅かに眼を細めた。

「あら、ごめんなさい。あなたは一生大人になれないのよねえ。ね

え、本当は私のこの体、羨ましいと思ってるんでしょう？ ふふふ

……」

空気が一変した。

「……言いたい事はそれだけ？」

沙羅の言葉に、動いたのは英治の方だった。

「お、俺は先に行かせてもらうぜ……巻き添え食って死にたかねえからな……沙羅ちゃん、あとヨロシクね」

台詞はふざけているが、声は本気で震えていた。

たつぷり十秒はかかって後ずさりし、非常階段の奥に英治が消えても祥子は動かなかった。

いや、動けなかった。

「……くうっ……あんた、何者よ？」

祥子の体も小刻みに震えていた。

外気との温度差ではなく、心胆を凍結させる内部との温度差に。

「あら、そんなに震えていてはこっちが有利になるわね。じゃあ、こう言うのはどう？」

僅かにかかった数本の前髪の下で、沙羅は右目を閉じた。

「どう？ ちなみに私の利き眼は右よ」

その言葉の意味するところに気がつき、祥子の体の震えは激昂によるものへと変わった。

「もう容赦しないっ、あんたの白い肌が見えなくなるまで細切れにしてやるっ！！」

沙羅の右前にあった机が縦に割れた。

引出しの中身を撒き散らし、音速の黒蛇と化した鞭の先端が沙羅に躍りかかる。

それを沙羅は半身になって躲した 確実に。

だが。

「！？」

沙羅の右上腕に、うつすらと赤い筋が浮かんだ。

「ふふふ、鞭本体はうまくよけたつもりでしょうけど、眼に見えな

い物を避けきれて？」

「ソニックブーム……音速を超えたわね」

沙羅が腰を低く落とした。

「ほら、その右手のオモチャはどうしたの？」

声よりも早く祥子の二撃目が沙羅に迫った。

それを沙羅は前に踏み込んで躲した。衝撃波が出来る前に距離を稼ぐ算段だった。幾ら先端が音速を超えたとは言え、鞭全体がそうではない。しなる鞭の変極点にあたる部分は、瞬時で見れば静止している部分が存在した。そこまで距離を詰めれば次の数歩で鞭の有効射程範囲以下となる。

しかし。

「おバカさんっ」

「うつ！？」

沙羅の右頬を熱い物が掠めた。沙羅が直感的に躲さなければ首ごと持って行かれただろう。

「フエイント……」

躲すついでに、まだ無事な机の影に身を潜める沙羅。

頬の一字に割れた傷から、涙のように血が頬を伝った。

祥子は腕の力の全てを鞭の先端に解放せず、幾分腕に溜め込んでいた。そしてタイミングを見計らって残りの力を注ぎ込み、しなった鞭の中腹の軌道を変えたのだ。衝撃派こそおきないが、その不規則な変動が直接沙羅の頬を掠めたのだ。

「ふふ……以外とおいしいわね、同族の血も」

鞭に僅かに付着した沙羅の血を、舌を官能的なまでに嫌らしく伸ばして舐め取った。

「かくれんぼでもして時間を稼ぐつもり？ 無駄よ、机ごと全部こみの山にするのにだって大して時間はかからないわ」

それに構わず沙羅は相手に見えない位置だというのに律儀に右目を閉じたままクイックローダーにセットした予備の弾丸を取り出した。
「そこかっ！！」

その僅かな物音に、祥子自身よりも祥子のもつ鞭自体が反応した。横殴りに沙羅の隠れている机を襲う。

沙羅はそれを縄跳びの要領で躲し、空中でリロード済みのパイソンを構える。

「バカめっ」

人間は空中移動できない。地を離れた時のベクトルに、空気抵抗と重力の補正がかかるのみ。

祥子は宙に浮く標的と化した沙羅に、机を切断中の鞭を捻って下から襲いかかった。

「えっ？」

その声は沙羅のものではなかった。

沙羅は銃口をすぐ下に向けて発砲した。

乾いた音五発に、火花が散る音が五回混じる。

それがダイヤモンドコーティングした鞭を命中率百パーセントで弾丸が撃ち抜いた結果だった。

「ぐっ」

呆然とする祥子の体に何かがぶつかった。

それが沙羅の体当たりだと気付いた時には、仰向けに倒れた祥子に沙羅が馬乗りになっていた。

「……」

無言で右眼を閉じたまま、沙羅は銃口を祥子の左胸に押し当てた。

「……っ」

何か罵声を浴びせようと開きかけた口が止まった。

祥子は沙羅を見ていた。

沙羅も祥子を見つめていた。

計り知れない色をたたえた瞳で。

「あなたも、心のどこかでこの瞬間を望んでいたのかもね」

銃口が祥子の左胸をなぞった Shoot My Heartの
タトゥーの上を。

愛撫と表現しても良いくらい優しく。

「……始めは良かった。あいつに血を吸われてしばらくは……金もくれた。権力だってくれた。でも、結局お遊びに過ぎなかった。あいつの手駒に過ぎなかった。それに気付いた時は、逃げる気さえ失せてた。そんな時、あの人が、あいつを……あいつを逆にねじ伏せてくれた……惚れ惚れするくらい……でも」

「もういいわ……結局、それも次の手駒への過程に過ぎなかった……違う？」

そうだ、と言うように祥子は右目を閉じた。

「厚生労働省・吸血症候群対策課、吸血症候群対策法第十二条第三箇に基づき……」

沙羅が淡々と言葉を連ねた。銃口を左胸の中心に戻して。

「対象に強制排除権を行います」

乾いた音が響いた。

沙羅が見下ろす視線の先に、祥子の顔があった。

母に身をゆだねて寝入る赤子のような表情で。

第六章 シルバー・エッジ - 4

「豪勢だね、さすが社長室ってところか」

最上階の非常口の扉を開けて、英治は開口一番こう切り出した。

事実、他の階なら優に机が縦に二十は並ぶスペースを、大理石の廊下が占めている。

その中央で奥に向かって別の通路が伸びている。角には受付嬢のインフォメーションデスク付きで。平素ならその机の対岸にでも警備員が眼を光らせているのだろう。

奥に通路を進み、目的となる部屋　社長室　の扉の前まで来た。車でも通れそうなくらいの観音開きの。

その扉を、何の冗談か丁寧にノックする英治。

「どうぞ」

扉の材質のせいか、男とも女ともつかぬ声が扉を隔てて返って来た。友人の家にでも上がるように軽い足取りで部屋に入り込む。

「おじゃましま〜っす」

部屋は以外と明るかった。豪雨で真夜中とは言え、総ガラス張りの一面が僅かな光でも最大限に外から取り入れていた。それに、時折照らす稲光が室内の様子を浮かび上がらせた。

バスケットボールでも出来そうな空間を贅沢に使った部屋だった。

実用的な家具と言えば窓際にしつらえた社長机と右手奥に見えるガラス扉のついた書架のみ。

机の向こうに、革張りの椅子が背中を向けていた。

「そうか、あの女王様はあんたが感染させたんだな。それとも、古風に言えば『同族にした』かな？」

「……」

椅子には確かに何者かが座り、重みで傾いていた。にも関わらず、英治が机に近づいても動こうとはしなかった。

「ひょえ、さっすが社長様。いいタバコ吸ってるわ。つつかこれ

は葉巻つてのか？」

机の上のシガーケースから勝手に葉巻を取りだし、手持ちのナイフで器用に吸い口を切り落とし、卓上用ライターで火を点して口に咥えても、椅子の主は背を向けたまま微動だにしない。

「これ、口に咥えているだけでも豪勢な気分だな。いかにもって感じがいいよな、ほんと」

椅子が僅かに動いた。

椅子に座ったの重心位置が変わったため、徐々に椅子が回転して英治の方を向き始めた。

「……あんたがボスのまんまだったら、どんなに気楽な事が」

椅子が正面を英治に向けて静止した。

一際大きな雷光が部屋全体を照らした。

「なあ、桂木慶一さん……幸人クンの姉さんの血を吸ったあんただけだったらな」

椅子の主　桂木慶一は首を不自然に曲げた格好で干からびていた。椅子に縄で縛り付けられ、すべての血を吸われれば、幾ら感染者Ⅱ吸血鬼とは言え生者のままでいることなどできない。

いや、生きながら血を抜かれ、絶命の寸前までそれを見届ける意識があつたことを考えると、それは無限地獄の一步手前に近かった。

部屋が明滅した。稲光ではない。天井の明りが息を吹き返したのだ。「ご心配には及びないわ。あなたのお仕事はすぐ済むから」

入ってきた扉から声がした。女性の声が。

「そうかい？」

英治が振り返った。

「そう。幸人は私と生きるの　永遠にね」

そこには照明のスイッチに手をかけた女性が立っていた。ボブショートに失踪したときのままのスーツ。

そして。

上品に微笑んだ口から覗く、不釣り合いな犬歯の先。
島原美由紀だった。

第六章 シルバー・エッジ - 5

「正直、信じられなかったぜ。もうあんたがなっちまってるとはな」
英治は葉巻を咥えたまま喋った。口が動くたびに葉巻が揺れ、どこかのヨレヨレのコートを着た殺人課の刑事のように高級じゅうたんに灰を撒き散らした。

「まあ、確かに失踪してから数えれば、最短でも完全に感染するまでまだ二日あるから」

美由紀がスイッチから手を降ろした。

「そう。まさか失踪する前にもうやられてたとはな。普通、吸われた人間はショックで当ても無く逃げ出すかふさぎ込むかのどちらかだ。よく一週間も普通に生活できたな」

「ふふ……私には、守る人が居たから」

「幸人クンのことか」

それには応えず、美由紀は英治を通り過ぎて椅子の傍らに移動した。
「この社長さん、本気で私に気があったみたいよ。うちのお得意さんでね、倍近い年齢のうちの部長がぺこぺこ頭を下げていたわ。で、会社に来た時に私に眼をつけたそうなの」

美由紀が干からびた死体の首筋を指でなぞった。自分が付けた吸血痕を。

「吸血鬼になるには、血を吸った吸血鬼の血を吸う必要がある

最初から私を同族にするつもりだったらしいわね。吸ったその直後に教えてくれたわ」

「で、感染した後、すぐに行動を起こしたわけか。最初の留守電の頃だな……『逃げて』とたった一言残した」

「さすがに、人間としての精神が残っていたみたいね。自分で言うのもなんだけど。今から思うとバカらしいけどね」

「二回目の留守電の時、あんたの代わりに尾谷が居たのは？」

「始めは本当に幸人を呼ぶだけのつもりだった。でも、尾谷が私を

探していた上に、あなた達までくつついてきていた。だからぶつけた。あなた達を排除するために」

「でも、うまくいかなかった」

「まさか、私達相手の専門部隊が公おおやけに存在してるなんてね」

「そう公おおやけでもないさ」

「それで、尾谷には祥子さんを通して発信機を仕掛け、私は独自で準備に取りかった」

「外国のハンター達か」

「そう。この会社の情報と組織力を使えばさほど難しいことではなかった」

「なぜわざわざハンターを？ 武器だけでなく」

「どこまで通用するか知りたかったのよ。対吸血鬼のベテランに、吸血鬼の血を吸った吸血鬼がどれほど通用するかをね」

「結果は予想以上というわけか」

「ええ。まあ、死ぬまで吸い尽くしたんですもの」

台詞に似合わないほど爽やかな微笑みを浮かべた。

「そういうわけだから、あなた方は手を引いてくれない？ 勝ち目が無い戦いに挑むのは、公務員の手取りじゃ割りに合わないんじゃない？」

美由紀が両手で両肘を抱える姿勢をした。社長椅子の傍らに立つその姿は、社長秘書に見えなくもない。

「そうもいかないねえ。幸人クンのためにもあなたには消えてもらう。悲しいこったけどな。それに、俺は公務員じゃねえ」

凝った造りの灰皿に葉巻を押しつけ、英治は両手で構えたナイフの切っ先を美由紀に向けた。

「悲しい？」

「そう。あんた、幸人クンも同族にするつもりなんだろう？」

「そうよ。そのどこがいけないの？ 共に永遠に生きる姉弟。素晴らしいじゃない」

「それに気付かないのがだめだってんだよ！！」

英治が一步半で七メートルの距離を詰めた。

「あら、その程度？」

「ぐっ……」

英治の刃は、美由紀の胸元から数ミリのところで食い止められていた。

右手の指二本で。

人差し指と中指でカードを挟むように軽く刀身をつまんでいた。なのに、身長百九十、体重七十五はあろうかという英治がそれ以上踏み込めないでいる。

それどころか、徐々に英治の膝が落ちてきた。

「ちっ」

自分からさらに重心を落し、巴投げの要領で美由紀を投げ飛ばす。しかし、美由紀はそれも予想の範疇であるかのように空中で回転し、あろうことか天井を蹴って倍速で戻ってきた。

「うおっ」

それを躲す英治を、美由紀は軽やかに着地して見送った。

「だめね。そんなんじゃないや夜が明けるわよ」

その言葉に反応して英治が左右にステップしながら接近した。

ジャブのように繰り出す切っ先。一秒で五回は超えようかというその神速の突きを、美由紀は全て数ミリの差で躲す。

「なぜ、なぜそこまでして感染者になりたがる？ 自分から進んで？ 人間のままでも充分幸人クンと仲良く暮らせるじゃねえか」

「ふふ……姉弟として？ それだけじゃないのよ」

「何っ？」

繰り出した切っ先の動きが鈍った。その瞬間を美由紀は逃さなかった。

左手で英治の右手首を掴み、右腕一本で英治の首を締め上げた。

「ぐっ……それだけ……じゃ……」

英治の両足が爪先立ちになった。

「そう。人間でいる以上、私達の間には姉弟という越えられない一

線がある。でも、人間という垣根を取り払い、無限に近い時を生きる存在に、そんなものは存在しない……ただ男と女がいるのみ」

「あんた……まさか……」

「それ以上口にするのは無粋というものよ、探偵さん。いえ、お上に仕える狗いぬといったほうがいいかしら？」

英治の首に食い込む指が力を増した。

その時だった。

「姉さん!!」

決して望ましくない姉弟の再会が、一週間の時を経てここに実現したのは。

第六章 シルバー・エッジ - 6

「姉さん、止めてよ！！ 何で、姉さんが……僕は、僕は人間のままの姉さんでいいのに！！」

走ってきたのか、息も絶え絶えの幸人の台詞に反応したのは英治の方だった。

「何で……ここが……それに」

「端末を消し忘れたからよ。発信機の追跡システムのね」

答えは、幸人に続いて入ってきた沙羅の口から返って来た。

「な……沙羅……なんで止めなかった？」

「ここまで来て止められると思う？ それに、幸人さんの夕食に盛った睡眠薬は調合を間違えたわけでもないわ。確かに効果はあった。それでも途中で起きたとすれば……宿命がそうさせたと言ってもいい」

「ふふ……そんな悠長な事を言っただけなの？ あなたの相棒はもうすぐこの世の人じゃ無くなるわよ？ まあ、あなたも次に逝かせてあげるけど」

事実、二人の会話を聞きながらも美由紀は腕の力を緩めていない。

英治の顔から血の気が引き始めた。

「姉さん、そんな……姉さん……」

「何をそんなに悲しむの？ 老いも病も無く、永遠に生きられるというのに」

力無く膝を付く幸人にかける姉の声は、それでもまだ慈悲というより恍惚に満ちていた。

「そんな姉さんは……姉さんじゃない……優しくて、曲がったことの嫌いなあの姉さんは……どこにいったんだよ」

弟の反抗に、姉は悲哀に満ちた表情を作り、そして微笑んだ 邪悪な微笑みを。

「そう、幸人もそうなの。人間のしがらみに囚われているのね。い

いわ……なら、この二人を始末した後でゆつくりと分らせてあげるわ」

ほとんど虫の息の英治に、最後の一撃を加えようとした。

「……それは無理よ」

「何？」

仲間の危機だというのに、沙羅の声に微塵の焦りも無い。

「見れば分かるわ……あなたの手にしているモノを」

視線を戻した。

唸り声だ。

押し殺した獣の唸り声。

それが瀕死の男が口にするにはあまりにも猛々しく、あまりにも人間離れしていた。

そして。

英治の頭髮が、徐々に脱色し始めた。

それは止みはじめた雨の代わりに、雲海の隙間から覗く月光を浴びて銀色に輝いた。

顔の輪郭が変形した。

口元が突っ張り、犬歯が唾液をまとわりつかせながらせり出し、低い唸り声を上げる口腔には収まりきれずにその全貌を表した。

骨格が変形し、衣服の端が裂け、靴は内側から弾けた。そこから覗く皮膚は髪の毛と同じく銀色の体毛に覆われていた。

「な……」

さすがに色を無くして驚いた美由紀が英治を振り落とした。

両手を床につく英治。その右手から唯一の武器であるナイフが落ちた。代わりに今の英治にもっともふさわしいと思われる武器 両手の爪が、異常に鋭く変形した。

「今宵は満月……伝説じゃないけど最高のシチュエーションがそろったみたいね」

完全に雨が上がった夜空に、澄んだ満月が誇らしげに月光を注ぐ。窓ガラスを通した最高の背景に、英治は いや、銀狼は歡喜の雄

叫びを上げた。

「銀狼、いいえ、

『銀の英治』シルバー・エッジの誕生ね」

第六章 シルバー・エッジ - 7

「英治……さん？」

両足で立ち、破れたとは言え衣服をまとっていないければ、それはまさしく狼そのものであった。

「……ふふ……」

美由紀が、幸人に続けて沈黙を破った。

「なるほど……吸血鬼がいるんだもの、狼男がいても不思議じゃないわね。でも……それがどうしたっていうの!？」

美由紀が英治に突進した。途中で垂直にジャンプし、宙で回転して天井に脚を付く。

英治を翻弄した空中殺法。しかし前の時よりも数倍脚にばねを利かせて勢いを溜め込む。

しかし。

「なっ!？」

床を見上げた美由紀の視界に、跳躍する銀狼が跳びこんできた。

姿勢を崩して真下に着地する美由紀。その後方に、美由紀の十八番を奪う形で天井から跳躍した英治がひらりと降り立つ。

それを振る向く間もなく、銀狼が美由紀に突進。

「ぐっ……」

すれ違いざまになぎ払った四本の爪が、美由紀の腹部を深くえぐっていた。

姿勢を低くした銀狼が、牙を剥き出しにした。構造上、狼の口では言葉を発し得ない分、その表情は威嚇とも嘲りともとれた。

その顔が残像を残して消えた。

再度、銀狼が脇をすれ違ったのだと理解したのは、右腕にできた四本の平行線と化した傷から吹き出す血飛沫が空気を染めた時だった。

「やめて、姉さんが死んじゃう!！」

駆け寄ろうとした幸人を、沙羅の小さく力強い腕が制した。

「だめよ」

「沙羅ちゃん……」

「傷つけない事が助けることなの？」

「！？」

デジャビュ既視感　いや、夢で経験した場合はそうといえるのか。

「あなたのお姉さんは、既に人の心を失っている。血を吸う存在であつても、どんなに人間離れた能力を持っていたても、人の心を忘れない限り人は人。でも」

「姉さん」

「きやつ！？」

沙羅が今までに聞いたことの無いような感情を表に出した。

幸人が沙羅の髪で隠された背中に手を指し入れ、パイソンを取り出した。

相手が幸人だという油断があつたとはいえ、たつぷり一秒はかかったその動作に手が出せないでいるとは。

「待って、英治さん」

「ガッ！？」

「ゆき……と」

既に出血多量で手が出せないでいる美由紀に、苦痛の無い一撃を送ろうとした英治の動きが止まった。姿形は変われども、その銀狼の中に英治は生きていた。

しかし

「姉さん……本当は、苦しかったんだよね？　あの時……『逃げて』って留守電に残した時、姉さんは戦ってたんだ。人間と吸血鬼の狭間で。そうだよな？　あんな声、始めて聞いたよ……とても苦しそうだった」

幸人が、銃口をぴたりと姉の額に向けて歩み寄った。

「姉さんの気持ち、今になってやっと分かった気がする。小さい時、布団の中で僕に言ったこと、結婚のことで冷やかした時に見せた寂しそうな背中……だから、一線を越えちゃったんだよね、姉さんの

中で。でも」

幸人の頬を、涙が一筋通った。

「本当は今が一番苦しんでしよう？　僕に永遠の命を与えても、それで永遠に生きても、それが本当に望んでいるものなんだろうか？　それに姉さん自身も気付いているんでしょう？　だけど、もう引返せないところまで来ている……だから苦しいんでしょう？」

「幸人……」

「だから……ぼくがその苦しみを終わらせてあげるよ……他の人じゃだめだ……僕の、僕の姉さんだから……」

撃鉄を起こした。

引き金に掛かる力が、徐々に大きくなってきた。

夢の中で僕は

引き金を引いたのだろうか？

引かなかったのだろうか？

それとも

「ありがとう、幸人」

「姉さん……」

「でも、幸人の役目じゃないわよ」

「？　姉さん！？」

幸人は動けなかった。

英治も沙羅もその速さを眼で追うのがやっとだった。

美由紀が、幸人の震える手からパイソンを奪い、月光の降り注ぐガラス窓に背をつけた。

銃口を自分の胸に向けて。

「楽しかったわ……幸人」

「ね、姉さんっ……」

「今度生まれ変わったら　別の家に　ううん、やっぱり同じ家に生まれたいわ。もう一度やり直すために」

「姉さんっ……」

駆け寄る幸人。

「さようなら」

轟音が部屋を占めた。

美由紀の心臓を貫通した弾丸が、背後のガラス窓も打ち破った。四散して遙か地表へと落下する破片に、美由紀の体が仲間に加わった。

感染者の宿命が美由紀の体を塵芥へと変えた。

月光を受けて煌く破片と塵が、遙か下の地表を背景に星空の小宇宙を作った。

ガラスの無い窓枠に手を付いてそれを見送る幸人。
姉を呼ぶ声が、いつまでもビル街に木霊こだましていた。

エピローグ

「いいの？ 記憶を消さなくて」

墓石に手を合わせていた幸人が振り返った瞬間、沙羅は何度目かの同じ質問を口にした。

「うん……姉さんのこと、辛くても忘れちゃいけないと思うから」
幸人がまた同じ答えを返す。

「ごめんなさい」

「いいよ」

「な」に二人で話してんだ？」

盆時期のもっともきつい日差しの中を、水桶とひしゃくの返却から戻って来た英治が訊いた。

「別に、狼男さん」

「そういう言い方よせって」

やはり抵抗感があるのだろうか。それを知って言う沙羅も沙羅だが。

「で、幸人くんはこれからどうするんだ？」

「うん……大学は続けようと思います。姉さんが行けなかった分までやってあげたいし」

「そっか。でも学費とかどうする？ 部屋代もあるだろう？」

「あ……そっか」

「ふっふっふっ、そうかと思ってうちの事務所に荷物移しておいたから。部屋代はタダ、報酬は三人で山分けすりゃ、学費ぐらい出るし」

「え、でも？」

「それに、確か最初来た時言ったよね？ 『お金は無いけど何でもしますから』って。今回の報酬、まだだしな。ちょうどいいじゃん、うんうん」

「は、はあ」

「英治」

「何だよ？ 筋は通ってるだろ？」

鬱陶しそうに英治が返事をする。

「道理で事務所の掃除をいつもの倍、時間かけてやってたわけね」

「いいじゃん、きれいになるしさ」

「なら、ちようどいいわ。ついでに幸人さんに射撃訓練の続きもしましょう」

「な？ 沙羅お嬢様、その右手に持っているのは何でございましょう？」

「次は動く標的で練習よ、幸人さん。私がまず見本見せてあげるから、良く覚えておいてね」

「わーっと、ちよっと、タンマ、いやマジで」

「動く標的を狙う時はね……」

「沙羅ちゃん、なんでパイソンじゃなくてマシンガンなの？」

「ぎゃーっ！！」

賑やか過ぎる三人の声が響く霊園に、姉の墓石が清めの水を受けて一際綺麗に輝いていた。

終

エピソード（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

本サイト投稿時点からするともう8年近く前の作品になり、一部現在にそぐわないところがあるかもしれませんが、色々とご意見・ご感想いただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6934/>

シルバー・エッジ

2010年10月26日06時57分発行